（表紙）

名越時敏日史　文久二年壬戌三月ヨリ六月ニ至ル

文久二年壬戌三月ヨリ六月ニ迄ル

日史壬戌三月中

目録

三月三日
一島津内蔵殿其外御役替
○一和泉様御首途ニ付仰出
○一太守様和泉様蒸気船天祐丸ヨリ山川辺御出之事
○一宝久丸破船（村橋氏乗船）両人助命届書十七年前午歳ノ事也
○一太守様御筆仰出
○一不容易企イタシ候者之事ニ付従　和泉様仰出
三月十四日
一二階堂部其外御役替
○一容貌之事ニ付従　和泉様仰出
三月十五日
一川上東馬殿其外御役替
右同日
○一御小姓与番頭寄発起之事
○一俄甘酒仕様
○一木村探元書状
一拙者御弓奉行帰役之節村田嘉兵衛歌
一拙者御側御用人転役之節右同人歌
○一従　殿下将軍家へ被　仰渡候御書付之写
○一拙者桜島湯治ニテ皆吉氏へ贈リシ文
一島津内蔵殿へ鉄炮中リ付
一拙庭井戸埋メ候場所之事
○一摂綿丸効能書
○一公方様御婚礼被為済候ニ付　太守様一種一荷御拝領

之事
○一和宮様御台様ト奉称候事
一茄子砂漬仕様之事
○一栄之尾御湯治仰出之事

壬戌四月中

○一父上様御死去之事
一物主之儀ニ付仰出
○一和泉様御家内様へ御引取公辺御届之事
一池水始テ越候様相成候日之事
○一和泉様京都御逼(迫カ)留仰出
○一和泉様　勅書御頂載(戴カ)仰出
○一和泉様御道中ヨリ之仰出

日史第九第十　五月　六月

目録

一伏見刃傷人数双方名書
一太守様五社御参詣
一伏見上意打事件
一御軍役御改正
一麻疹流行
一和泉様御事三郎様御改名之御通達
右ニ付御祝儀
一於伏見相働候人数并永田佐一郎江御感状
一御上納金濃尾川之御普請御用金也
一上御屋敷　御殿廻御焼失ニ候得共御上納金ハ御勤之件ノ御通達
一射場奉行被仰付六月朔日
一麻疹流行ニ付御通達
一落書
一三郎様京都御発駕之御通達
一於直殿御事　於貞様と奉称　三郎様御実子御通達被仰出
一小松帯刀御側詰被仰付候御通達
一麻疹病注意之話
一当番頭詰衆并御番人名前
一麻疹流行ニ付御施薬等之御通達
一三郎様御出府之御通達

一大雨落雷
一内之浦物主壱組諸御手当届覚
一道鑑様五百年忌御法事相済御祝義之御通達

日史第七

名越時敏

文久二年壬戌三月中

朔日　霜降、

朝六ツ過起、先日ヨリ之腫物弥張立、気分ハ差テ悪敷ハ無之候得共、腫物疼キ痛ミ候故終日臥候、夕方正月・二月之日史綴直シ、三月ヨリノ此日史綴方イタシ帳留共イタシ、大工モ来候、今日ハ史記入書物箱作、又四書正解・七書直解入書物箱モ作ル、是ハ成就ニハ不相成、大工小松家家来之橋本矢之進ト申者吉利ヨリ上町小坂下横小路へ出居候由、

二日　曇、

朝六ツ過起、昨日同断ニテ出勤イタサス、今日ハ終日床之内ニテ今日ヨリ幾所モ小キ口明キ候、所謂カサニテ可有之、今日モ大工来、色々小細工共イタシ候、夜五ツ半時分臥候事、

三日　霜降、終日曇、

朝六ツ起、腫物昨日ヨリ口明候処、今日ハ相応ウミモ出候、夫丈余程疾(疼カ)キモ薄ロキ候、四ツ後平田氏被来、ウミ抔押出シ被呉候、今日節句ニ付見廻人数井上弥兵衛殿・渡辺彦太郎殿・町田内膳(久憲)殿・町田直五郎殿・隈元直次郎殿・右松十郎太殿・相良吉次郎殿・児玉佐平次殿・郷田源助殿・奥山藤左衛門殿、七ツ過ヨリ宮里十兵衛殿・伊藤家おとくとの被来、夜入四ツ時分被帰候、

父上様・母上様ニハ七ツ過前内記様へ御出ニテ候、五ツ前御帰リニテ候事、今日御役替左之通、

当番頭ヨリ御側御用人勤

島津内蔵

当番頭ヨリ御用人勤

島津仁十郎

当番頭ヨリ御用人勤

伊集院静馬

御側役格御側御用人勤御側御用人一篇

亀山甚之丞

四日　曇、夕ヨリ雨、

朝六ツ過起、腫物昨日同断、弥快方、今日モウミ多ク出候、未矢張床ノ内ニハ候得共、間々座内共出候、余程快候、夕ヨリ前お村様御出ニテ、

父上様ニ茂拙者方御出ニテ四ツ時分迄御寝酒被召上候テ御引入、お村様同刻御帰ニテ候、母上様同刻迄拙者方ニテ御寝酒被召上候、無程臥候事、

一明後六日

(久光)和泉様

御首途ニ付、

(忠義)太守様

和泉様へ当日謁御家老御祝儀之御通達且右ニ付御請等御通達来候事、

一太守様・

(頭注)「蒸気船天祐丸」

和泉様今日蒸気船天祐丸ヨリ山川へ為被差越ト之噺承候、当分病中故委細不相分候、

五日　終日雨、

朝六ツ過起、今日ハ余程快候テ終日写本トモイタシ日暮候、然レトモ未床ハアケ候様ニハ無之候、暮ヨリ　父上様・母上様拙者方ニテ御寝酒被召上候、四ツ時分御引入ニテ候事、

一一昨日ハ山川ニテ屋久島下リ横目其外士衆四五人ニテ喧嘩有之、其内即死モ為有之由、委細ハ不承候、伊集院何某ト歟云フ人モ為有之哉ニ承候、

一今晩拙者コフヤク付替ル迚、ウミノ付居候ノハギ取置候ヲ四男徳熊当年四才ナルガ走来、夫ヲ足ノ腹ヘ強踏付候テ鳴出シ候事、

六日　晴、

朝六ツ起、腫物弥快方ニハ候得共未床茂アケス、昨日同断ニテ候、然レトモ座中且ハ庭ノアタリ歩行共イタシ候、八ツ後ヨリ町田藤七郎殿・町田家へ参居候ニ男郷十郎来、今晩泊ニテ候、　御両親様ニハ夕

方ヨリ前内記様へ御出、暮御帰ニテ候、父上様ニハ無程御臥、　母上様ニハ又々前へ御出ニテ候、夜四ツ時分臥候事、

○一今日

和泉様御直御首途アラセラレ候事、

七日　快晴、

朝六ツ起、腫物弥快方昨日同断、先日ヨリ池干置候、未少々水モ溜居候ニ付番所之者共へ昨日ヨリ水汲出サセ、今日ハ魚モ取ラセ池替ニテ候、　父上様ニハ御隠居ニテ御寝酒被召上候、拙者ニハ未夜ハ難罷出候ニ付拙者方ニ罷居、四ツ時分臥候事、

八日　快晴、夕雨ト成、

朝六ツ過起、腫物弥快方、今朝少々根モ出候、昼時分大根出余程快候、今日ヨリ仁太郎取寄池モリフサギ共イタシ候、夕永田与右衛門殿一刻入来候、　御両親様八ツ過ヨリ前内記様へ御出ニテ暮御帰、　父上様ニハ直ニ御臥ニテ候事、暮過ヨリ母上様拙者方へ御出御寝酒被召上候、

九日　雨天、

朝六ツ過起、腫物ハ余程快候、夜前ヨリ之雨ニ池大溜リ、仁太郎今朝モ来候得共塗方不出来、空シク帰候、夕方雨止候ニ付主税・番所之者共打寄クミ出シ、池ハカラニ成候間又々明日ヨリ仁太郎来呉候様申遣置候、明日ハ御一門方并島津図書殿・島津又六郎一列・大番頭以下御用之儀有之候間、諸御役人・詰衆迄四ツ時罷出候様御通達来候、且又今日ハ川田与右衛門殿奥御小姓一篇之勤被仰付由候、将監殿ヨリ祝ニ来候様申来、且又明日ハ二階堂家智芳院様之四拾九日御法事申来候、今日八ツ後ヨリ戸柱へ参居候郷十郎并千石馬場町田家鈴麿殿被来、両人共泊ニテ候、父上様ニハ　御隠居ニテ御寝酒被召上、拙子ニハ未平快ニハ無之候故用心イタシ不罷出候、四ツ時分臥候事、

○　先年村橋左膳殿乗船宝久丸破船両人助命届書

覚

坊泊
久志浦之
嘉蔵
新四郎

右者一昨十一日鰹猟方トシテ坊津下之浜之喜次郎舟草カキ島へ差越候処、人声仕候ニ付島近乗掛申候処、右之者共琉球御在番衆御乗船水主之由ニテ、今暁列帰候段申出候ニ付形行相糺候処、当三月廿八日山川致出帆、翌廿九日朝口永良部島沖へ乗掛申候処、東風強折角折走仕候得共口永良部島へ難取入、無是非八ツ時分乗戻リ申候処、漸々雨風強黒島沖ニテ梶尻掛縄払切既ニ危体ニテ、乍漸相凌夫ヨリ任風相流、黒島沖三里計之所ヨリ夜入誠ニ真之暗夜ニテ流居シ処、夜九ツ時分草カキ島之内飛瀬へ乗掛及破船散々罷成、右之者共不意ニ助命仕候段申出候、外人数之儀ハ暗夜、殊ニ大時化ニテ如何様相成候モ相分不申、翌朝ニ罷成候処船滓類如何流失仕候哉一切相見得不申候、且食物之儀ハヒナ并鳥類取得助命仕候段申出候、委細之儀ハ久志役々共ヨリ可申上候間、此段御届申上候、

午六月十三日

横目
伊瀬知平太
右同
鹿島直左衛門

右ハ拾七ケ年跡ノ午歟、

十日　雨、

朝六ツ過起、腫物快方、今日者終日古書付類取調方イタシ候、暮ヨリ　父上様御方へ罷出御寝酒御相手、五ツ半時分御暇ニテ無程臥候事、

○一昨日之御用
太守様（忠義）・
和泉様（久光）御筆仰出左之通、

家老中江

和泉様御儀、何篇是迄国政向御内談申上、且先度公義ヨリ御内沙汰之趣モ有之、我等実ニ多幸之至ニ候、就而者此度二丸江
御住被遊候ニ付、猶又表向御介助奉願置候間、以来

仰出等弥厳重相守候様可取計事、

戊三月

和泉様御儀、何篇

御国政向

御内談被

仰進、且先度

公義ヨリ御内沙汰之趣モ被為　在

御幸ニ被

思召上候、就而者此度

二丸江

御住居被遊候ニ付、猶又表向

御介助之儀

御願被

仰進置候間、以来

仰出等弥厳重相守候様可取計旨、御別紙之通

御筆ヲ以被

仰出、誠以難有御事候条、此旨謹而被奉承知、

仰出之趣聊無緩疎誠実ニ被相守、家来末々迄モ急度

可被申付候、

三月

（川上久封）筑後
（島津久徹）大蔵
（喜入久高）摂津
（川上久運）但馬
（川上久美）式部

○去ル午年外夷通商御免許以来天下之人心致紛乱、各国有志ト相唱候者共尊王攘夷ヲ名トシ、慷慨激烈之説ヲ以テ四方ニ交ヲ結ヒ、不容易企ヲイタシ候哉ニ相聞得候、当国ニモ右之者共ト私ニ相交リ書翰往復致候者有之哉ニ候、畢竟

勤

王之志ニ感激イタシ候処ヨリ右次第ニ及候筈ニハ候得共、浪人軽卒之所業ニ致同意候而者、当国之禍害ハ勿論、皇国一統之騒乱ヲ醸シ出シ、終ニハ群雄割拠之形勢ニ至リ却テ外夷之術中ニ陥リ、不忠不孝無此上儀ニ而別而不軽事ト存候、拙者ニモ

公武之御為聊所存之趣有之候ニ付、以来当国之面々

右様之者共ト一切不相交、命令ニ従ヒ周旋有之度事ニ候、若又私之義ヲ重ンシ絶交イタシ難キ者ハ、有筋ニ申出候ハ、其訳ニ応シ何様共可致所置候、尤、此節之道中筋且江戸滞留中右体之者共致推参候共私ニ面会致間敷、乍然無拠訳ニ依リ致応接候共敢テ不致議論、其筋之者江談判いたし候様返答可致候、乍此上不勘弁之族於有之者天下国家之為実以不可然事候条、無遠慮罪科可申付候事、

戌三月　和泉様

御名乗御判

外夷通商以来天下之人心致紛乱、各国有志ト相唱候者共四方ニ交ヲ結ヒ、不容易企イタシ候哉ニ被聞召上、御当国ニモ右之者共ト私ニ相交リ書翰往復等致候者有之哉ニ付、以来一切不相交、勿論此節御道中并江戸御滞留中右体之者共致推参候共私ニ面会不致、無拠訳ニ依リ致応接候トモ其筋之者へ談判イタシ候様返答可致、乍此上不勘弁之族有之候者無遠慮罪科可被仰付旨、御別紙之通委曲和泉様御筆ヲ以被仰出、何共奉恐入事ニ候、右ニ付テハ誠以不容易事ニ付、被仰出候之趣誠実ニ相貫、聊異心有之間敷候、乍此上万々一心得違之者茂有之候者不差置御取扱可被仰付候、此旨謹テ被奉承知、家来末々迄茂急度可被申付候、

三月

（川上久封）筑後
（島津久徹）大蔵
（喜入久高）摂津
（川上久運）但馬
（川上久美）式部

○大身之面々ハ重御役ヲ茂被仰付事ニ付、学問武芸ハ勿論、言行一致イタシ候様ニトノ趣ハ兼テ被仰出、殊更御軍役之儀、追々分而御手厚御沙汰被為在、右面々専物主被相勤候身柄ニ付旁

其嗜者可有之事候得共、自然実場ニ相臨イカ程御手当向ハ相整候共、勝敗ハ全物主之功不功ニ依リ候事ニテ別而重立候職掌之事候間、猶亦一統万事可被相励候、就中幼少ヨリ父兄等ヘ相離レ、良師友ニモ乏敷随意之者手ニ成長之方者一廉振起研究イタシ、其身之見込ヲ以師匠人柄被願出候ハヽ、御吟味之品茂可有之候条、往々御用立候様可被心懸候、

右可致通達候、

三月　　摂津
　　但馬
　　式部

十一日　雨、

朝六ツ起、腫物弥快、終日古書付類取調共イタシ候、暮ヨリ父上様御方ヘ罷出御寝酒之御相手申上候、今日ヨリ床ハ揚候、五ツ半時分御暇、四ツ過臥候事、

十二日　晴、

朝ハ六ツ過起、諸事昨同断、仁太郎池塗先日ヨリ打続之雨ニテ不相調候処今日ヨリ又々来候、宮里十兵衛殿一刻被来候、

十三日　晴、

諸事昨日同断、四ツ後薬丸猪之助殿被来候、昼内膳（町田久憲）殿暫被来、七ツ過ヨリお筆来、夜入九ツ時帰候、九ツ過臥候事、仁太郎来、

一昨日ヨリ今日迄紙袋十八作リ、諸書付・帳留類委敷撰分、銘々袋ニ何々入ト相記、惣テ紙ヨリニテ緒ヲ付納戸ヘ掛置候、書付類余程見出シ易ク相成候事、自又外帳一冊造調候テ一番袋ニハ何々之書付、二番袋ニハ何々之入ルト袋之アル数委敷相記之賦也、

十四日　快晴、

朝六ツ過起、腫物快方、今日ハ御役替左之通、

詰衆ヨリ当番頭被仰付候　　上同断

　　島津織之介　　二階堂蔀

詰衆被仰付候　　右上同

島津壬生　　川田

昼児玉佐平次殿被来候、暮ヨリ　父上様御方へ罷出御寝酒御相手毎之通ニテ、五ツ半時分御暇、今日モ先日ヨリ昨日ニ至リ候通古書付類取調終日同断、仁太郎今日モ来、池成就相成故水掛込、四ツ過臥候事、

○一今日

和泉様(久光)御筆仰出左之通、

拙者ヨリ書取ヲ以申渡候事遠慮ニ相考候得共、当時世上之情態何歟不穏之趣ニ相聞得候ニ付、不得已事先日為相達事ニ候、其後猶又致熟考候処、畢竟上威之軽キ処ヨリ群下類ヲ引ニ至リ候儀ニ而、当主者勿論於拙者モ心痛至極之事ニ候、士風沙汰之儀ハ此前ヨリ追々被

仰出置、近比ニモ再往申渡為相成事候得共、方今之模様ニテハ非常之変事到来之節致一和候処無覚束存候、

皇国ニ生レ候者誰トテモ

王朝ヲ尊ヒ夷狄ヲ悪ミ候情意者有之筈ニ候、若其志操無之者ハ禽獣同然之事ニ候、別ニ勤

王家之誠忠派之ト可申様更ニ無之事ニ候、然ルニ右通之名目相唱候由別テ不可然事ニ候、殊ニ年若之面々容貌異様ニシテ放恣之者共有之哉ニ候、是以先年ヨリ追々為被仰渡事候処、近比者其節トハ相変リ候風儀ト相成、愈以不宜次第ニ候、士ハ行跡律儀ニ廉潔ヲ専トシテコソ本意之事ト存候、何程武文研究イタシ候共、言行不正異様異風ニテハ武士ト者被申間敷候、且郷士以下家来末々ニ至リ候而モ右様之者共有之哉ニ猶以不可然事候条、右之趣奉行・頭人能々相心得支配下江丁寧ニ申諭、父兄又ハ同郷年長之者共ヨリモ心得違無之様屹ト教誡有之度存候事、

戌三月　　御名乗御判

十五日　曇、夜入雨、

朝六ツ起、腫物弥快方、今日御役替左之通、

詰衆ヨリ当番頭　　上同

川上東馬(久璋)　　新納波門(久世)

新納次郎四郎

右御側ヨリ御用之哉ニ承候得共不知

拙者事、終日棚之内取集且古書付類取調、暮ヨリ父上様御毎之通、五ツ時分御暇、四ツ過臥候事、

町田民部（久成）

右ハ桂右衛門（久武）旅行跡御小姓与番頭寄被仰付候、

島津良馬

右ハ関山糺（金生）旅行跡寄被仰付候、

右御小姓与番頭寄ト申事今日ヨリ発起、

薫済薬品之事

和ニテモ　上同

一大付子　八匁　一人参　八分

但、熟付子、

一茯苓　八分　一鹿茸　八分

一青塩　八分　一蓮蕊　八分

一真川椒　八分

右七味細末粉ニシテ七日分包分、中指之頭ノ様成芥百荘ツ、一日ニイタシ、都合七日七百荘灸治イタシ候事、

俄甘酒仕様

一糀二枚

但、むるふた、

右半切之様成物ニ入レ酒ヲ交セ、手ニテ押付フタヲカフセ置、

但、酒ヲ交セ手ニテ握候得者酒ノシトリニテ堅ル

右之通イタシ置飯焚ニ打立候、

加減、減歟

一白米五升

至極ヤワラカ成ル飯ニ焚キ、出来揚候トアツキ内ニ直ニ右之糀ト入交セ、半銅之様物ニ瀉シ冷ル迄交セ通シ、

但、真米計ニテモヨシ、餅米ヲ交セ候得者猶吉、

餅計ニテハ尚々ヨシ、糀多方甘、

又

明日之入用ナラハ飯ヲ喰加減ニスマシ作入ル、左様無之候得ハスユク成ル、

又

飯之残抔ニテ作リ候得者大既飯ト糀ト半分交セ飯ヲ

カタキ粥ニナシ、酒ハジチヤジチヤ加減ニヒタシ、
前条同断作入ルベシ、

文字迄似セ置候ノ四番袋之内へ入置、

○　木村村右衛門探元之事書状之写

（頭注）〔按ニ、称名墓誌ニ探龍ハ宝暦五年亥二月四日歿トアレバ、此書状ハ同年二月之書状ナルベシ、〕

御手紙辱奉存候、弥以御安全被成御座候由奉珍重候、
然者被仰聞候絵此三日能勢探龍別而相煩申世話仕候
処、昨日相果申候而気之毒千万罷在候、依之絵未相
調罷在候、近内心懸可申候、其通思召可被置候、折
節客来荒々御答申上候、以上、

二月五日　　木村村右衛門

大野十郎左衛門様

拙者大島ヨリ帰リ御弓奉行ニ帰役被仰付タル時、家
来村田嘉兵衛ヨリ、

されはこそ月ニかゝりし村雲ハ
　いまそ晴たりみよの神風

又御側御用人・御軍役奉行勤ニ転役被仰付タル時、
同人ヨリ、

思ひきや花咲春に逢にけり
　ちることの葉をわすれさらめや

○　安政五年戊午秋従
殿下将軍家へ被仰渡候
御書付写

近年異国船時々相見得候趣風説内々被　聞食候、雖
然文通能修武事全整候御時節、殊海辺防禦堅固之道
是亦兼々被聞食候而
御安慮候得共、近比其風聞屢有之、彼是被為懸
叡念候、猶此上武門之面々洋蛮之不侮小冦不畏大賊
宜籌策有之、神妙（州カ）之瑕瑾無之様精々御指揮候而深可
被安
宸襟此段宜有
御沙汰候事、
八月

○　桜島古郷村に過し比湯治し侍りしに、皆吉金六殿に
も被来居、帰られける時贈りける、

神無月しくるゝ比の末つかた桜の島の古郷の
いて湯はるかにきてミれはもゝさかへたるたミ草の
くさの庵りもにきハりて竈の煙空にミち
これもひとつのこと草にわかたらちをもはらからの
おなしつれなる人々もしはしの宿をかり衣
日々のしわさハおのつからいつるいて湯を汲かわし
髪にそゝくもいやならてちたひもゝたひ交へても
底のさゝれハ清かりしなかれの渕そ皆よしの
友としかたるさまハ実に行も帰るも打つれて
あしたの汐のひるまには手あそひすさミあるハまた
やまともろこし歌よミてなくさミにけるひともはや
今朝あさかせに真帆引てほと古郷を帰るとの
わかれはいとゝうらめしき君か袂をひかへつゝ
この言の葉を見せまほしけれ

十六日　晴、

朝六ツ過起、腫物弥快方、今日ハ終日手習写本等ニテ日暮候、今日者
和泉様（久光）御立、主税ニハ
二之丸下へ罷出候、九ツ過帰ル、暮ヨリ
父上様御方御寝酒御相手毎之通、五ツ半御臥遊シ候
間御暇、九ツ過臥候事、

十七日　晴、

朝六ツ過起、腫物弥快方、今日ハ間々書見共イタシ
候、暮ヨリ　父上様御方へ罷出毎之通御寝酒御相手、
五ツ半時分御臥遊シ候ニ付御暇ニテ四ツ過臥候事、
天保十五年辰六月三日島津内蔵殿鉄炮中リ付余リ
珍敷矢先故留置、

十八日　晴、暮前ヨリ小雨降、

朝六ツ過起、腫物弥快方、今日ハ仁太郎外ニ壱人日
雇来、池石フセイタシ候、　氏神様前之池ニテ候、
石ハ井戸之石段二ケ所共崩シ候、（蜜柑カ）橘柑木後石垣下之
井戸ハ土之壱間計底ニテ石蓋イタシ、先此節ハ水モ
潤沢故埋置候、上ニハ石鉢居置賦、石垣下大抵三尺

計間有之候、樒柑木ヨリ丑寅ニ当リ二間余間有之候、
今日ハ八ツ後町田民部(久成)殿被来候、七ツ後篠原玄的・
有馬次郎八ト申人被来候、家来之川村助市先刻来、
右之衆兄弟ニテ拙者へ緩々面会イタシ置度被申候ニ
付、次郎八殿儀ハ先日助市ヨリ訴訟事拙者ヨリ申込
呉候様承候テ申込置候ニ付被来考ニテモ可有之、右
様之儀承居候ニ付テ猶更面会イタシカタク、何ソ面
会イタスニ不及、当分ハ又拙者病気ニテ引入罷居候
ニ付テハ難得逢段申述候処、何レ面会イタシ一礼不
相述候テハ心ニ不落付候間是非逢呉候様被申候テ、
最早被来居候ニ付逢呉候様申候ニ付、決テ肴ニテモ
持来候テ旁可申ト之事ナルベク是ニ込リト申候処、
如案其通ナレハ断リ候得共是非受呉候様被申、軽キ
肴之事、殊ニ親武左衛門殿為存人之事候間、受候テ
面会イタシ候込リ入リタル事ニ候、シカシ又々追々
催促ニテモ頼申ト申事ニテモ無之、余リ取切致世話
呉候ニ付一礼申迄之事ト承候テ暫被居被帰候、夕ヨ
リ　父上様拙者方へ御出ニテ御寝酒被召上、五ツ時
分御臥被遊候、母上様前へ御出ニテ九ツ過御帰、夫
迄ハ起居候テ無程臥候事、

十九日　晴、
朝六ツ時起、腫物弥快方、夕方伊藤彦助、昼ハ内記
様御出有之候、池普請ニ付今日モ仁太郎来候、暮ヨ
リ　父上様御方へ罷出候テ毎之通御寝酒御相手、五
ツ過　父上様御臥遊シ候ニ付御暇、四ツ過比臥候事、
今晩玄迫来、徳熊相頼候事、

二十日　晴、夕ヨリ雨、
朝六ツ起、腫物弥快方、今朝美代藤兵衛殿入来、七
ツ時分近藤七郎左衛門殿被来候、八ツ後ヨリ亀山甚
助殿・長谷場助七殿相頼候テ琉球書状認方イタシ候、
暮相済夜入四ツ時分被帰候、四ツ半時分臥候事、

○一昨日又為守衛江戸へ戦兵弐百人計御内達為有之由、
右之什長左之人数被仰付候由、
大山彦右衛門　　新納嘉
西郷宗次郎　　吉田清十郎

三原伝左衛門　蘭牟田利兵衛
大山清太夫　篠崎中左衛門
平岡八郎太夫　伊地知七左衛門
町田孫一郎　土師吉兵衛
高田十次郎　小牟田源五郎
大迫新蔵　相良甚之丞
長崎隼太　児玉佐平次

二十一日　曇、間々小雨、

朝六ツ過起、腫物弥快方、今日ハ山田氏ヨリ頼之手本書ニテ候、外ニ茂主税手本少々書候、今日者池普請ニ日雇共三人来候、徳熊先日ヨリ風邪未快玄迫来候、夕ヨリ　父上様拙者方ニテ御寝酒被召上候、夜入五ツ時分御引入、四ツ時分臥候事、

二十二日　間々細雨、今晩ヨリ今朝迄雷鳴アリ、

朝六ツ過起、腫物弥快方故今日ハ髪洗ヒ手水仕ヒ月代共イタシ候、雨天故日雇不来候、暮ヨリ父上様御方へ罷出毎之通御寝酒御相手、五ツ半時分御臥被遊候ニ付御暇申上、四ツ時分臥候事、

一今日御製薬方ヨリ摂綿丸申請効能書左之通、

小児蚘（クワイ）アリ、或ハ疳症ヲ発或疲労シ、或ハ不時腹痛キヒシク、或ハ口辺タヾル、等一切虫気アルニヨシ、

二十三日　晴、

朝六ツ過起、腫物快気ニテ今日ハ風呂抔ニ入候、未針先計口目癒ス候得トモ足膏薬付候テ入候、今日モ仁太郎其外日雇共都合三人来候テ池普請、今朝美代氏被来、裕右衛門来、夕宮里十兵衛殿被来、夜入四ツ時分被帰候、四ツ半時分臥候事、

一昨日北郷浪江殿当番頭ヨリ御側御用人勤被仰付候、

一今日竹之子八本欠キ来候、皆不延立ノニテ候、当年ハ遅キ年柄ニテ今日又竹立方イタシタル由、漸今日ニテ百五十本程相見得候段承候、先達テモ七八本欠来候、例年之通ナレハ三月ノ末ニハ大方出揃ニ相成候ニ誠ニ遅シ、

二十四日　曇、

朝六ツ過起、吉次郎夜前熱気有之候ニ付、今朝玄迫来呉候様申遣置候処四ツ過来候、虫気ニテ熱モ起候半ト申事ニ候、尤、風邪茂付居候、七ツ過ヨリ伊地知才右衛門との被来候テ四ツ過被帰候、　御両親様ニモ拙者方へ御出ニテ、　父上様ニハ五ツ半時分御臥之事、

拙者四ツ半時分臥候事、今日モ日雇三人来ル、

二十五日　終日雨、

朝六ツ過起、今日ハ鑓二本削、夫ヨリ書見共イタシ間々手習共也、暮ヨリ　父上様御方毎之通罷出候、御寝酒御相手、五ツ過御寝被為在候、五ツ過前於村様御出ニ候得共暫御会釈申上、吉次郎先日ヨリ病気ニ有之、拙者ト臥候故不気分故コマ事少々有之、添寝ニテ拙者ニモ其儘臥候事、今日モ日雇三人来ル、

一町田民部殿事、守衛方物主ニテ大坂迄被差越、来ル廿八日出立被仰付候旨吹聴有之候事、

○　御通達之写

公方様（家茂）御婚礼被為済候ニ付、先月廿七日従　公方様上使内藤志摩守（正誠）様、従

御台様（和宮）御使水野佐渡守殿ヲ以一種一荷ツ、

太守様（忠義）被遊御拝領候旨御到来候、依之御一門方并諸大身分其外月次御礼罷出候面々、来ル廿八日御礼後居残

太守様・

和泉様（久光）へ御祝儀於席々相謁可被申上候、

但書・右書等略ス、

三月　　筑後（川上久封）

○　和宮様御事、二月十一日ヨリ

御台様ト可奉称旨従

公義被仰渡候段申来候、此旨表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

三月　　筑後

二十六日　快晴、

朝六ツ前起、先日ヨリノ腫物平快イタシ候ニ付今日ヨリ出勤、出掛新納家・川上家・北郷浪江殿・宮之城屋敷・佐志島津織之助殿・二階堂蔀殿・町田民部殿・島津権五郎殿へ参候テ四ツ前出　殿、八ツ後退出、帰掛平佐屋敷・島津内記様江一刻ツヽ立寄帰宅、又々重富屋敷・伊藤彦助殿・河俣仲太夫殿・町内膳（久意）殿・伊藤六郎右衛門殿・伊地知八郎右衛門殿・近藤七左衛門殿へ一刻ツヽ、参候テ大鐘前帰宅、暮ヨリ平佐屋敷お津屋との江罷出候、薬丸氏夫婦子共・島津権五郎殿夫婦子共・島津左膳殿孫二女おミちとの被参居候、九ツ時分帰宅候事、池普請日雇共三人来、

二十七日

朝六ツ前起、野屋敷へ参候、筍共欠セ四ツ前帰宅、帰掛町田鷲之介殿へ一刻立寄候、七ツ過ヨリ町田民部殿へ明日出立之祝ニ参候、泊番ニテ大鐘過出　殿、夕詰島津主計殿へ代合相勤候、次渡毎之三ケ条ニテ候、御目付ハ平田平六殿ニテ五ツ半時分

御引ケ承知ニテ候、昼加藤権兵衛殿入来候事、

一拙宅池普請日雇三人来候、今日迄ニテ成就、

二十八日　昼ヨリ雨、

朝六ツ起、朝出二階堂蔀殿へ相頼出勤イタサレ候間、五ツ前退出、帰宅、庭拵トモイタシ候、夕ヨリ長屋之喜右衛門外舅川辺之（空白）毎々土産物共呉候ニ付召呼候、福留七左衛門同伴ニテ候、夜入五ツ半時分帰候、　母上様四ツ半御引入、　父上様ニモ拙者方へ御出之処五ツ半御引入ニテ候、九ツ時分臥候事、八ツ後美代被来、

二十九日　晴、夕ヨリ曇、

朝六ツ過起、四ツ時ヨリ江戸書状認、九ツ時ヨリ急キ月代イタシ髪結、直ニ当番ニテ出殿、七ツ前夕詰島津左膳殿へ代合、次渡毎之三ケ条、外ニ明日磯御出御滞留之一通、都合四ケ条月番ヨリ承居候ニ付其通次渡退出、直ニ島津内蔵殿へ先日御役替之祝儀ニ参、夫ヨリ二階堂源（行光）太夫殿・川上式（久美）部殿・島津主税殿・平佐屋敷おつ屋との江参、大鐘過帰宅、暮過

父上様御方へ罷出、五ツ時分　父上様御寝、五ツ半時分御暇、四ツ過臥候事、

一茄子砂漬之仕様今日承候ニ付書留置、

金砂壱升　　塩壱升

黒麹壱升

右交合、茄子少々干候テ、佐土原茄子百弐拾斗漬候テ能押ヲ掛置候テ宜候、多少ハ右ニ準シ見賦可有之也、拙者此内承居候ノハ、麹ハ無之味ヲ付ル迄ナルヘシ、

一今朝美代藤兵衛殿被来、松林院殿・川上源十郎殿八ツ後被来候由、

○　御通達之写

来月初旬ヨリ為御湯治踊栄之尾

御茶屋へ被遊

御光越筈候、右ニ付テハ万端御作略ニテ諸事奥計被仰付候条、昨年

御光越之振合ヲ以取シラベ、得差図候儀ハ其通可有之旨可承向々へ可申渡候、

但、御休泊并御日限之儀ハ追テ可申渡候、

三月　　（川上久封）筑後

晦日　小雨、未之刻ヨリ甚雨、

朝六ツ起庭掃除、五ツ過内之浦与頭白坂壮次来、尤、取次美代藤兵衛殿被来候、

御発駕・御祝儀并両度之

仰出承知ニ来候、

（忠義）太守様

仰出并

（久光）和泉様両度之

仰出於所相弘、一統奉承知候様申渡、左候テ、先度被仰渡候自訴五日限届申出候様ニテ候事、此節ハ別段分テ被

仰渡候事ニ候間、右様之者若哉罷居候ハヽ、何レ無残自訴不申出候テハ不都合之事候間、屹ト糺方之上被仰渡之通奉畏候様申渡候、此節ハ郷士ニ壱人於甑島拝ミ候者罷居、其外ハ無之段申出候、夫ヨリ（蜜柑カ）橘柑之木下ニ小池堀方イタシ候、八ツ半時分夕詰ニテ出

殿、平田靱負殿江代合候、次渡ハ毎之三ケ条、外ニ
磯御出御滞留之御通達壱通有之段承候、泊番島津右
近殿出勤、次渡同断イタシ候テ暮前帰宅、暮ヨリ伊
勢平右衛門殿入来、夜四ツ被帰、無程臥候事、
○一太守様今日ヨリ磯御仮屋御出ニテ
御滞留相成候事、

日史第八

名越時敏

文久二年壬戌四月中

朔日　曇、夕細雨、
朝六ツ起、四ツ前島津権五郎殿へ立寄、四ツ時ヨリ
造士館へ相詰、八ツ時退出、暮前之内記様へ一刻罷
出、昼ヨリ　父上様御出居ナサレ候間御迎ニテ候、
御出之節ハ　母上様・主税ニモ御付添申上参候、無
程御供ニテ帰候、夜四ツ時分臥候事、拙者方ニテ
母上様御寝酒被召上候、今日ヨリ又日雇両人取寄取
広メノ池普請、
一今日造士館講釈ハ山名半助殿ニテ候、九ツ後令義解
会読有之候、

二日　間々小雨、
朝六ツ起、四ツ時出勤、九ツ過帰宅、八ツ後野屋敷
へ参候、今日モ筍ニ竹為立候処、今日迄ニ野呂氏上
之山五十壱本、大山之方ハ四百七十本立候、当年ハ
竹モ一体大振之様有之候、日入比帰宅、往来共大興
寺山越候、暮ヨリ
父上様御方へ罷出、四ツ前　父上様御臥遊シ候ニ付
御暇、無程臥候事、

三日　晴、
朝六ツ起、五ツ半島津権五郎殿へ立寄、四ツ時造士
館詰ニテ出勤、九ツ後帰宅、今日ハ山吹之間鉄炮壱
人人数支ニテ、拙者出呉候様川上東馬殿遮テ承、東
馬殿同組ニテ四ツ後ヨリ之鉄炮ニ八ツ時漸々出候テ
世話敷事ニ候、両人ツ、八組ニテ候、暮帰宅、夫ヨ
リ　父上様御方へ毎之通リ罷出候テ四ツ前御暇、無

程臥候事、今日モ日雇両人池普請、

四日　小雨、

朝六ツ起、四ツ前出　殿、九ツ過御暇、直ニ帰宅、終日在宿、暮ヨリ　父上様御方へ罷出御寝酒御相手毎之通、四ツ半時分臥候事、

五日　細雨、

朝六ツ起、講堂詰ニテ四ツ前出勤、四ツ後御暇、八ツ後御食後　父上様拙者方居間ニテ俄ニ御不塩梅、言語不通ナラセラレ是迄之御中風二度押之御模様、則医師ハ勿論身近キ類中触廻シ候、おたねニハ九ツ前荒田島津左膳殿所へお広との病気見廻ニ被参居候共、主税ニハ加藤家へ稽古トシテ先刻出候ニ付、何レモ早々為走両人共早ク帰リ、類中其外知人追々見廻ニ被来、医師新村鎌益殿、三度久木田玄迫殿、両度平田玄裕、両度沖瑞雲殿被来候、初ハ鎌益殿サジニテ候得共、従此方之望ニテ沖氏サジニ相成候、今晩夜起、

一今日見廻人数

夜迄　島津内記様
夜起迄　町田内膳
夜迄　松岡喜左衛門殿
昼夜起迄　美代藤兵衛殿
夜起迄　伊勢平右衛門殿
相良市之進殿
町田八之進殿
沖瑞雲殿
久木田玄迫様
おミち様
おのりとの
おふちとの
川上家　お藤
夜迄　島津権五郎殿
島津新八郎殿
夜迄　右松十郎太殿
夜迄　宮里十兵衛殿
大庭猪之助殿
隈元直次郎殿
逆瀬川玄高殿
平田玄裕殿
おむら様
おことと
おとくとの
町田家　おふて

ニモ来候外、家来共ニ者夜起迄野元休次郎、夜起迄川村清左衛門、夜起迄木佐貫軍四郎・瀬戸山庄太郎、夜起迄白浜小兵衛・戸柱町田家々来辻元新兵衛・上同岩下万兵衛・白浜小左衛門・宮之原善右衛門、夜同姓平次郎、夜起迄名越清左衛門、夜起岸良喜右衛

門、夜起塩田宇兵衛、福留八皆共其内夜起モアリ、

六日　晴、

父上様御病気昨日同断ニテ、言語不通御安眠之御容体ニテ候、見廻人数島津内記様・内膳殿・川源殿・安喜殿・森喜殿・美藤殿・薬猪殿・町三殿・宮十殿・児佐殿・大悦殿・池三殿・大新殿・右十殿・貞寿院様・おむら様・おふち・おふて・おとくどの・おいなどの・平田玄裕殿・沖瑞雲殿・久木田玄迫殿・新村鎌益殿・隈元直次郎殿・五代孫次郎殿・上村笑之丞殿・松岡為左衛門殿・相市殿・二弥六殿・おミち様・おミねとの・町八殿・伊平殿・二逸殿・おひさとの・基太村新殿・井弥殿ニテ候、今夜モ夜起、

一家来共見廻、尤、御看病人数、

村田平蔵　名越清左衛門
川村清右衛門　宮之原彦助
野元休次郎　塩田宇太郎
岸良喜右衛門　海老金太郎
白浜小兵衛　野元喜三次
塩二男
木佐貫軍四郎

七日　晴、

父上様御病気同断、看病人数、

伊平殿　相市殿
伊八殿　おことと
おミねとの　おふちとの
おふてとの　おくわとの
内膳殿　宮里十兵衛殿
薬丸猪之助殿　町田直五郎殿
美代藤兵衛殿　隈元直次郎殿
平田玄裕殿　沖瑞雲殿
二階堂弥九郎殿　松岡喜左衛門殿
井上弥兵衛殿　町田八之進殿
島津内記様　島津新八郎殿
基太村真七郎殿　二階堂弥六殿
大庭猪之助殿　おむら様
おミち様　おひろ様

久木田玄迫殿

家来人数同断、

村田平蔵　川村清右衛門

野元休次郎　同三けさ

塩田宇兵衛　野元喜三次

宮之原平次郎　宮之原彦助

大迫吉之進　名越清左衛門

ニテ候、尤、夜起イタシ候、今日ヨリ看病差出、且今日ハ恵灯院御代参被仰付置候ニ付昨日御断之願書差上置候処、直ニ御免ニテ新納波門殿へ被　仰付候由、

八日　晴、

父上様御病気五日ニ御煩付ヨリ昨日迄ハ御イビキ強ク候、昨日昼時分ヨリ漸々御労見ニテ御イビキモ薄クナラセラレ誠ニ込入タル事候処、終ニ暮六ツ過御落命、イカントモスベキヤウナシ、今日モ沖瑞雲殿・平田玄裕殿・久木田玄迫殿、度々新村鎌益殿ニモ被来候、其外御看病人数数多、於筆・おミねとの泊ニテ候、其外加勢人数等泊リ候者モ有之、父上様御前ニハ家来之内番人共申付、九ツ半時分臥候事、

九日　雨、夕ヨリ強、

今日七ツ半時

父上様御入館(棺カ)、屏風立廻シ忌掛人数拙者初内膳殿其外官香壱弐本ヅヽ持、行義正シク次之間ニ座シ、頭之間ニテ福留吉太郎・川村助市・白浜孝兵衛・沢田作右衛門

御入館御手添申上候、福留七左衛門夫婦ぎ相詰何篇気ヲ付候様申付候、其外ニハ御入館之次第誰モ覗キモ不相成候様イタシ候、右相済銘々壱人ツヽ御拝申上候、拙者居間頭之方へ被為入、屏風立廻シ家来共改服ニテ御番申上候、昨晩ヨリ昨晩迄ハ類中内証之方へ相集リ候、兼テ出入人数世話人ハ父上様御方次之間へ相集リ御葬式一件イタサレ候、今晩ハ九ツ時分臥候事、

十日　快晴、

朝六ツ起、八ツ時迄ハ内証へ類中相集リ、夫ヨリ拙者居間へ出、忌掛人数其外身近キ人々ハ相集リ、一通リ吸物壱ツ酒共サシ出シ、七ツ過飯差シ出シ候、書院之儀ハ内記殿・権五郎・靱負抔へ亭主振相頼段々客人有之、吸物壱ツ・酒飯差出シ候、硯蓋一面出シ、小皿物三ツ計拙者居間之方ヨリ銘々次出候、折角右者手抜無之様下知イタシ置候、吸物壱ツ差出シ候節ハ直ニ小皿三ツ次出候様イタサセ候、七ツ過書院頭之間屏風立切　御館取仕立候、花舜軒小僧壱人列来御経上ケ、夫ヨリ拙者御焼香申上候テ、内膳殿忌掛人数居間ヨリ書院敷込之方へ出、屏風立切書院客ニ不相構御焼香申上候、夫ヨリ書院へ来居候人数焼香、其外出入人数家来共同断之筈、拙者ニハ日入過ヨリ花舜軒へ参候、主税・郷十郎同断、内膳殿ニモ被参候、吉次郎ニハ拙宅へ居残之筈候処、主税・郷十郎参候得ハ、サアヲレモヂヤト刀ヲヅ取参候由ニテ御葬場迄モ参候、六ツ前御館ハ玄喚迄出サセラレ、六ツ頭鐘ニ御出館相成候由、五ツ過帰宅候得者イマタ段々ト客人等有之、各四ツ半時分被帰、九ツ前臥候事、

父上様　御法名

得宜院殿大道一菴大居士、当年ニテ

御年齢ハ七十六歳ナラセラレ候、

母上様ニハ於枝様

寿昌院様ト御改名、奇妙ナル御事ニハ

母上様之御実母様寿昌院様ト申上候、御同名ニ候得共昨年御死去故、坊主ヨリ書付差上候儘御改名ニテ候、

一引導師ハ福昌寺方丈へ相頼候、

十一日　曇、

朝六ツ起、今日新納矢太右衛門殿・おむら様・おミち様・木尾彦左衛門殿被来、其外家来共来候、尤、取集加勢人数段々有之候、夜四ツ半時分臥候事、

十二日　雨、

朝六ツ起、髪結、直ニ花舜軒御墓へ参詣、無程帰宅、今日ハ美代藤兵衛殿・宮里十兵衛殿・二階堂弥六殿・

同姓弥九郎殿、夜おむら様御出、四ツ半時分御帰、
無程臥候事、松岡氏ニモ被来候、

○　御通達之写

一御備組諸郷物主之儀ハ其所地頭ヨリ被相勤候儀勿論之事ニテ、其段ハ追々申渡通ニ候、然共依御役場難迦人又者一ケ郷ヨリ幾組モ被差出候節ハ其節々別段物主被仰付候間、地頭職被仰付置候面々其心得罷在候様申渡、可承向へ茂可申渡候、

四月　　摂津（喜入久高）

○

和泉様（久光）御事、

御実父様之御儀候処、当分之御成合ニ而者難被為黙止

御内情之御訳モ被為

在、此節御実形之御身柄ニ被為復　御家内様へ御引取被遊候、左候テ、

太守様（忠義）御参府之節々

御留守中御国政向被為行届候様御取計被遊度旨、二月十六日御用番様江御届書被差出候処、被成御聞置候段被仰渡候旨御到来候、依之御一門方并諸大身分其外月次御礼罷出候面々、明後十五日御礼後居残於席々謁御家老御祝儀可被申上候、

右、御祝儀ニ付惣出仕之次第等毎之通候得共以下略ス、

右之通、

太守様・

和泉様へ御祝儀被申上候様向々へ可致通達候、

四月十三日　　式部（川上久美）

十三日　晴、

朝六ツ起、六ツ半花舞軒御墓へ参詣、今日見廻人数町田監物殿・蘭牟礼伴助殿・町田内膳・川田将監殿・倉山民五郎殿・隈元直次郎殿・二階堂弥六殿・川北孫左衛門殿・おことの・伊藤六郎右衛門殿・名越清左衛門・宮之原平次郎ニテ候、暮ヨリ母上様抔打寄得宜院様御下酒共被下候、夜四ツ時分臥候事、

十四日　晴、

朝六ツ起、六ツ半花舜軒御墓参詣、無程帰宅、今日見廻人数大庭猪之介殿・二階堂逸見殿・木佐貫軍四郎殿、夜入宮里氏被来、

十五日　快晴、

朝六ツ起、六ツ半花舜軒御墓参詣、無程帰宅、昨日ニテ　父上様一七日モ御過遊シ候間、今日ハ拙宅茶取イタサセ候、大柴ニ相成候、今日見廻人数弥六殿・弥九郎殿・伊地知才右衛門殿・町田八之進殿被来候、野元休次郎来候、

一今日国分之家来悔ニ来候、浜田正太郎ト田中清右衛門ニテ候、鮫島善兵衛・前田銀助右四人ヨリ釣大根ト饅頭一箱呉候、

十六日　晴、

朝六ツ前起、花舜軒御墓参詣、大庭氏・木尾氏・美代氏被来、夜入伊藤六郎右衛門殿被来候、昼名越祐右衛門来、茶取相始、今日ヨリ野屋敷茶取、

十七日　晴、

朝六ツ前起、花舜軒御墓参詣、宮里氏・新納矢太右衛門殿被来候、一昨日摘候居屋敷之茶今朝成就相成拾斤余、外ニ粉壱斤余、

十八日　晴、

朝六ツ前起、花舜軒御墓参詣、一昨日摘候野屋敷ノ茶今朝成就相成拾壱斤半、外ニ粉壱斤余、

十九日　雨、

暁大鐘前起、茶取加勢、四ツ過花舜軒御墓参詣、一昨日摘候茶今朝成就相成斤目拾七斤四勺、今日内之浦郷士年寄兼丸弥右衛門拙者忌中ニ付悔トシテ来候、渡辺氏・相良氏被来候、

廿日　朝細雨、後晴、

朝六ツ起、花舜軒御墓参詣、今日見廻人数伊才殿・桜島之家来田中猪之助・おミねとの、夜入森喜右衛門殿被来候、

一明日ハ得宜院様二七日ナラセラレ候ニ付、明日蒸方
等出来兼可申茶摘方取込候、

廿一日　快晴、

朝六ツ起、花舜軒御墓参詣、今日見廻人数内膳殿・
新納矢太右衛門殿・吉国荘吉・川上家娘おふぢ・町
田家へ参居候娘おふで・おとくとの・喜悦来候、
一今日者野屋敷へ茶摘遣候、

廿二日　間々細雨、

朝六ツ起、花舜軒御墓参等昨日同断、今日見廻人数
美代藤兵衛殿・相良市之進殿茶取加勢迄イタシ被呉、
近藤七郎左衛門殿被来、夜入　母上様拙者方ニテ御
寝酒共被召上、四ツ時分臥候事、茶取人数夜明シ有
之候、

廿三日　晴、

御墓参朝昨日之通、今日入来人数伊地知八郎右衛門
殿・基太村新次郎殿・宮里十兵衛殿夕ヨリ被来、夜
入四ツ時分被帰候、市之進殿八ツヨリ入来泊リ茶取
加勢之事、

廿四日　晴、

御墓参昨日同断、河野八郎左衛門殿・相良市之進殿
被来、相良氏ニハ茶取加勢ニテ泊リ之事、

廿五日　晴、

朝六ツ起、六ツ過花舜軒御墓参詣、相良氏茶取加勢、
朝野呂新之丞殿・町田藤八殿被来、八ツ後藤八殿・
伊地知才右衛門殿・二階堂源太夫殿被来候、
一池水此節池普請ヨリ能越候様相成、スタリ水過分ニ
有之、役人福留七左衛門方へ遣候、其スタリハ宮里
十兵衛殿へ遣筈、是ハ未取付無之、七左衛門方へハ
今日ヨリ遣シ候事、

○　廿五日御通達之写

和泉様(久光)御事、去ル十九日伏見被遊
御立筈候得共、京都へ被遊

御逗留候旨申来候、此旨向々へ可申渡候、

四月　　式部（川上久美）

○御一門方・島津図書殿并島津又六郎一列大番頭以下月次御礼罷出候面々、奥・表・御勝手方諸御役人、詰衆へ御用之儀有之候間、明廿六日四ツ時被罷出候様向々へ可致通達事、

右之通各被得其意、此書付刻付ヲ以致廻達、留ヨリ式部方へ返納可有之候、以上、

四月廿五日　申刻

廿六日　晴、

朝御墓参昨日同断、今日モ町田藤八殿被来候、暮ヨリ母上様御方へ罷出御寝酒御相手申上候、

○一今日之御用左之通、

浪士共蜂起不穏企有之候処、島津和泉取押置候旨叡慮被

思召候、先以於

御膝元不容易儀発起有之候而者被脳（悩カ）

震襟（宸カ）候ニ付、和泉当地へ留置鎮都（鎮静カ）有之度旨被

思召候事、

四月十六日

○和泉様御事、今般

御上京、

近衛様江被遊

御参殿候処、

御滞京被為

在、浪人共御鎮静有之候様被為蒙

勅命候ニ付、

太守様（忠義）御筆御添書ヲ以

御別紙之通被

仰出候趣ハ、一統奉承知通ニ而誠以御冥加之御事候

条、弥以御国法ヲ相守、聊不致動揺人心相安シ、御

奉公方誠実ニ可心懸候、

四月　　筑後（川上久封）　大蔵（島津久徴）

（喜入久高）
摂津
（川上久運）
但馬
（川上久美）
式部

○一諸藩士浪人等へ私ニ面会不可致事、
一命ヲ受スシテ猥リニ諸方へ奔走不可致事、
一万一異変致到来候共敢テ不致動揺、下知無之内其場へ不可駈付事、
一酒色可相慎事、
右之趣先度ヨリ追々申渡候得共、以来猶又可相守候、若此上違背之族於有之者、無容捨可処罪科者也、
文久二年戌四月

○右之通、去ル十日
和泉様（久光）御筆ヲ以
御沙汰被為
在、誠以奉恐入事候条、
御趣意之程誠実ニ相守候様大坂於　御殿拝聞申渡相成候段申来候条、此旨向々江不洩様可致通達候、
四月
筑後
大蔵
摂津
但馬
式部

廿日　晴、
朝六ツ起、今日吉野御馬追ニ候得共、当分忌中故通リ見物モイタサス、外物見ハ戸立切申付候、（頭注）「典姫様吉野へ御馬追御覧」典姫様吉野江御馬追御覧アラセラレ候、今日ハ早天ヨリ馬場モ賑々敷候故御墓参夕方イタシ候、花舜軒同断之事、今日見廻人数二階堂弥六殿・相良市之進殿被来、辻元新兵衛同断、

二十八日　晴、
朝六ツ起、花舜軒御墓参詣、今日見廻人数川上源十郎殿・お筆・町田庄太夫殿・内膳殿・於村様、暮ヨリ母上様御方へ罷出御寝酒御相手、

一得宜院様今日三七日ニ被為当候事、

二十九日　晴、風烈シ、

朝御墓参等昨日同断、今日見廻人数渡辺彦太郎殿・松岡喜左衛門殿・辻元新兵衛ニテ候、

晦日　烈風細雨、

朝六ツ過花舜軒御墓参詣、今日見廻人数内記様・相良吉十郎殿・宮之原善右衛門来候、母上様暮ヨリ拙者方ニテ御寝酒被召上候、夕方ヨリ薬丸猪右衛門殿妻被来、五ツ過比被帰候、

日史第九

名越時敏

文久二年壬戌五月中

朔日　烈風甚雨、

朝六ツ起、花舜軒御墓参詣、終日在宿、夕ヨリ母上様拙者方へ御出ニテ御寝酒被召上候、四ツ時分御引入、無程臥候事、

二日　晴、風アリ、

朝六ツ起、御寺参御墓参等昨日同断、今日見廻人数川上源十郎殿・お藤・お筆・伊藤彦助殿・伊地知才右衛門殿各夜咄迄イタシ四ツ過比被帰候、

三日　晴、風アリ、

朝六ツ起、御寺御墓参等昨日同断、七ツ時分ヨリおむら様御出ニテ、夜入四ツ時分御帰、同刻臥候事、

四日　快晴、

朝六ツ起、御寺御墓参等昨日同断、今日見廻人数町田藤八殿・美代藤兵衛殿・安田助左衛門殿・宮里十兵衛殿、暮ヨリ　母上様拙者方へ御出ニテ御寝酒被召上候、四ツ時分臥候事、

○一伏見ニテ大坂へ被残置候守衛人数其外ト此節和泉様京都　御逗留被召列候人数ト喧嘩名前左之通、

京都人数

奈良原喜八郎（繁）　深手　鈴木勇右衛門（重高）

鈴木昌之介（重流）　即死　道島五郎兵衛（正邦）

森岡善助（昌純）　大山格之助（綱良）

山口金之進（直秀）　江夏仲左衛門（栄享）

大坂人数

有馬新七（正義）　田中謙助（盛明）

弟子丸龍助（方行）　森山新五左衛門（永治）

橋口伝蔵（兼備）　橋口宗助（隷三）

柴山愛次郎（道隆）　西田直五郎（正基）

右八人惣テ即死、

五日　暁ヨリ細雨、

朝御寺御墓参昨日同断、内膳殿・町田鷲之助殿・宮里十兵衛殿・渡辺彦太郎殿被来候、暮ヨリ　母上様拙者方へ御出ニテ御寝酒被召上、四ツ過御引入ニテ無程臥候事、

六日　晴、

朝六ツ起、昼安田喜藤太殿・木尾彦左衛門殿被来候、暮ヨリ　母上様御方へ罷出御寝酒御相手、四ツ時分御暇、無程臥候事、夕御寺御墓参ナリ、

七日　晴、

朝六ツ起、昼おむら様・宮里十兵衛殿、夕方ヨリ近藤七郎左衛門殿被来、大鐘比花舜軒御墓参詣、暮ヨリ伊勢平右衛門殿・伊藤万次郎殿被来候、万次郎殿ニハ少シ早目被帰、近藤氏・伊勢氏九ツ時分被帰候、昼新納弥太右衛門殿ニモ一刻入来、

八日　雨、

○朝六ツ起、御寺御墓参詣、五ツ時申上候、四ツ時太守様（忠義）五社御参詣被為在候、昼宮里十兵衛殿・市来半之丞殿一刻入来、今日ヨリ忌御免有之候得共、太守様五社御参詣ニ付　御出有之迄之間御清ニ候間、病気之御届申上今日迄ハ不罷出候、昼宮里氏被来、夜五代孫之丞殿被来、四ツ半被帰候、無程臥候事、

九日　晴、

朝六ツ起、今日ヨリ忌御免ニテ四ツ前出勤、八ツ後退出、七ツ時分御墓御寺参詣、昼宮里氏被来候、今日ヨリ宮里氏へ池之スタリ水参候、七ツ過ヨリ町田少輔殿（シャウスケ）・町田直五郎殿・お筆被来候、夜入八ツ過被帰候、直五郎殿ニハ九ツ過ニ被帰候、隠居監物殿事先日少輔ト改名之由候、

十日　晴、

朝六ツ起、御墓御寺参詣、昼井上弥兵衛殿・吉川源右衛門殿・町田鷲之助殿・宮里十兵衛殿・仁王堂伊藤家おのり様孫女弐人召列御入来候、今晩ハ泊ニテ大鐘ヨリ出勤、夕詰川上東馬殿へ代合候、

十一日　快晴、

朝六ツ起、六ツ半島津権五郎殿へ朝出相頼出　殿被致代合、次渡等昨日通三ケ条、別ニ何モ無之候テ罷帰候、帰宅、髪結、直ニ御寺御墓参詣、無程帰宅、今日昼時分射場地之所へ居付候バンコ昼時分成就相成置付候、能折おむら様御出ニテ、バンコヒラキニ茶泡盛共差上候、八ツ後御帰ニテ候、夜五ツ時ヨリ母上様御方へ罷出御寝酒御相手申上候、四ツ半御暇、九ツ時臥候事、

十二日　晴、

朝六ツ起、五ツ過御墓御寺参詣、四ツ前出勤之賦罷在候処、市田隼人殿ヨリ病気ニテ今晩泊番難相勤候間、相勤呉候儀ハ相叶間敷之旨申来候ニ付請合候、四ツ時五代孫之丞殿・町田鷲之助殿、八ツ前ヨリ二階堂弥六殿、八ツ後おかのとの被来候、大鐘ヨリ泊番ニ出　殿、夕詰平田靱負殿へ代合相勤候、四ツ過臥候事、夕ヨリ宅へ相良市之進殿被来候由、

十三日　晴、

朝六ツ起、六ツ半朝出二階堂蔀殿へ代合退出、直ニ帰宅、五ツ過御墓御寺参詣、九ツ時分ヨリ宮里氏被来、八ツ半被帰、又七ツ半時分ヨリ被来暮過被帰候、今朝伊藤万次郎殿被来、四ツ時分臥候事、

十四日　快晴、

朝六ツ起、朝町田鷲之介殿入来、四ツ後花舜軒御墓参詣、帰宅、九ツ過ヨリ当番ニテ出勤、夕詰大野多宮殿へ代合、帰宅、夕方於せつとの一刻被来、暮ヨリ内記様御夫婦・於むら様御出ニテ四ツ半時分御帰リ、無程臥候事、

十五日　快晴、

朝六ツ起、今日ハ講堂詰ニテ四ツ前ヨリ出勤、八ツ後帰宅、七ツ半時分御墓御寺参詣、今日見廻人数松岡喜左衛門殿・町田内膳殿・吉国荘吉・万次郎殿ニテ候、

一今日造士館講釈上原源之丞殿ニテ子曰苗而ヨリ、

○　此節於伏見口

上意打手被　仰付候次第

少シ肩ト右手ニ疵アリ、　奈良原喜八郎

頭上大疵有之候得共随分快方、伏見御仮屋ニテ当分療養中、　森岡善助

即死、　道島五郎兵衛

頭上ニ一ケ所、右手ニ一ケ所、余リ大クハナシ、京都御屋敷ヘ罷帰当分療養中、　山口金之進

耳ニ一ケ所、右手ニ一ケ所相応成疵ニ候得共、当分爰元御屋敷ニ同断、　江夏仲左衛門

無疵、　大山格之助

右之耳涯ヨリ惣テ切スヘリ、伏見ニテ療養中命ハ懸命ナシ、　鈴木勇右衛門

無疵、　鈴木正之助

無疵、跡ヨリ駈付、　上床源助

右人数上意打手被仰付候、森岡氏既ニ両日助命六ケ敷御座候得共、追テ快方無此上候事ニ候、右之墨引之人数ハ最初ヨリ茶屋内ヘ差越直ニ応対イタシ候、太刀初ハ道島ニ為有之由、就中喜八郎此節ハ余程大出来大功有之、誠以感心ニ御座候、都テ御感状被下候、御切米拾石ツヽ被下候、　有馬新七

即死、

田中謙助
柴山愛次郎
橋口宗助

此者　和泉様（久光）御内沙汰ト申偽惣テ引入申候由、且者長州ヨリ二百人操出賦抔ト申偽候由、甚以姦悪ノ次第委細難申上候四人ニ御座候、重罪不届者ニ御座候、右之者共大帳本人ニ御座候由、

橋口伝蔵
西田尚五郎
森山新五左衛門
弟子丸竜助

即死、

右者其場へ駈出候者ニ御座候、外ニ二階之上ニハ三拾人計罷居候由御座候得共、奈良原弁舌ヲ以二階下ヨリ相慎（鎮カ）申候由、大小共ニ打捨（本ノマヽ）丸肩ヌキニテイヨ〳〵和泉様御命令之段相示シ、先々御屋敷へ一同無事ニ参呉候様、其上ハ拙者受合宜可取計ト之段申込、其通漸々相慎（鎮カ）申候由此節被差下候、浪人之内船弐艘ノ内へ乗居候、

田中河内（綏猷）之介

右大本人

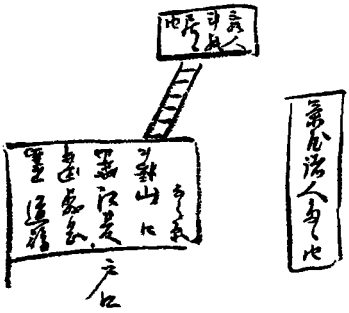
一青蓮院（朝彦親王）様御内勅命有之、御真跡持参且錦之御旗御同人様ヨリ拝領之段申偽、夫レヲ根本ニシテ色々申立、都テ引入申候由、此節御下シニ付テハ考訳御座候、

一外浪人土佐并久留米・佐土原銘々其屋敷へ引渡、昨晩ニテ相済、

一御国元ヨリ先度亡命之人数ハ昨夜召捕、大坂格護所ニ暫時召入置、其上御下シ之由、人数ハ大脇仲左衛門・松田東園・山本四郎・指宿三次ニ御座候、坂元（本ノマヽ）士同様船弐艘ヨリ之人数ニ被差下候、着之上屹ト御取扱ニ相成候様承申候、

一右悪党之人数被打候場所ハ、伏見之内淀川ヨリ上リ口ニ京橋ト申所之近辺大キ茶屋二階ニ打集リ居、此方打手之人数差越候節ハ最早打立候筈ニテ、甲冑或草鞋抔用意之砌之由、然処打手右件墨引之人数内へ差越、有馬初右四人之面々へ逢申渡候処、別テ之強気ニテ有馬ト申者ハ不罷居ナト、申出、二階ヨリ下リ不申候由、無是非二階へ上リ誰様ニテモ四人江篤

ト申上度趣ニ付罷出候ト申所、壱人モ対候者無之、漸々柴山へ相対色々申所ヨリ田中左様ナラハ何分可承ト申候ニ付、道島ヨリ左様ナラハ二階下へ御下リ給度トテ二階下へ左之通場所ニ於テ、



大山
鈴木
上床
待伏候人数
上意之相図ニテ飛入賦之由、

右通之於所ニ奈良原ヨリ今日ハ御四人様へ切腹ヲ進メニ参候訳ハ
和泉様(久光)御思召之訳ニ御座候ニ付、是非被成度強而進メ候得共、強気ニ申募リ申候由、夫ヨリ不得止事道島ヨリ

上意ト申掛打初外人数モ直ニ飛入候由、外ニ段々其説有之候得共少モ間違ハ無御座候、
一大賊之者共幼少之人数抔色々暴悪ヲ以テ引入残念千万ニ御座候、趣意ハ跡以ヨリ追々可申上候、

十六日　夕ヨリ雨、
朝六ツ起、御墓御寺参詣、帰宅、四ツ時、(出勤脱カ)九ツ過御暇、直ニ帰宅、八ツ後退出ヨリ内膳トノ被来、七ツ過被帰候、美代藤兵衛殿ニモ八ツ後一刻被来候、夜五ツ時ヨリ　母上様御方へ罷出御寝酒御相手、四ツ過御暇、無程臥候事、おたね不塩梅ニテ玄適モ来、

十七日　甚雨、
朝六ツ起、御墓御寺参詣、朝伊地知八郎右衛門殿入来、九ツ過ヨリ当番ニテ出勤、夕詰仁礼舎人殿へ代合、七ツ後帰宅、夕方徳熊不塩梅ニテ玄適被来候、美代氏モ一刻被来候、夜入五ツ時ヨリ　母上様御方へ罷出御寝酒御相手申上候、四ツ半時分御暇イタシ無程臥候事、

十八日　甚雨、

朝六ツ起、五ツ時分安田喜藤太殿一刻被来、今日ハ四ツ時花舜軒御墓参詣、今日

得宜院様御墓石建、石工野元休次郎、拙者銘書イタシ候、石灯炉壱対得宜院様・　法成院様へ拙者兄弟ヨリ奉寄進、御石ハ野屋敷石場ヨリ出ル、御台ニ犬ヲ刻差上候ハ兼テ犬御好故ナリ、

御石塔些亀抹ニ茂奉存候得共、先年

法成院様御死去之節ヨリ不老院様・

得宜院様被仰談、永年代々如是可然ト被究置、　不老院様御墓茂御同様被成置候ニ付、此節茂同様

御石塔相調差上候、七ツ後宮里氏入来、

一右御石塔犬之下絵上脇龍円、

十九日　快晴、夕ヨリ細雨、

朝六ツ前起、

得宜院様御法事ニテ今朝五ツ時ヨリ客人、

島津権五郎殿　　川上源十郎殿

二階堂弥六殿　　島津内記様

島津新八郎殿　　河野八郎左衛門殿

名越彦太夫殿　　名越清之進殿

安田喜藤太殿　　松岡喜左衛門殿

吉川源右衛門殿　　隈元直次郎殿

渡辺彦太郎殿　　近藤七郎左衛門殿

基太村助左衛門殿　　町田鷲之助殿

伊藤彦助殿　　宮里十兵衛殿

児玉佐平次殿　　伊藤万次郎殿

美代藤兵衛殿

四ツ時ヨリ花舜軒へ御法事ニ参リ、主税同断、美代氏并七左衛門参候、戸柱町田家計法事イタサレ郷十郎壱人参候、相済御墓参イタシ、八ツ時帰宅、七ツ時分内膳殿・花舜軒、其外御女姓方於村様・おミち様・おふて・おとくとの・子共方モ段々有之候、各暮過御帰ニ候、四ツ時分臥候事、

二十日　雨、

朝六ツ起、四ツ時出勤、四ツ過御暇、今日来客新納弥太右衛門殿、夕御墓御寺参詣、昼大庭猪之助殿入

来、暮ヨリ　母上様拙者方ニテ御寝酒被召上御相手申上、四ツ前臥候事、

二十一日　雨、

朝六ツ起、御墓御寺参詣、帰宅、四ツ時出勤、九ツ過御暇、帰宅、八ツ後内之浦地頭所郷士年寄簑毛郷兵衛来、（頭注）「御軍役御改正」今日此節御軍役御改正ニ付今日御手当帳相渡候、左候テ、此節迄被渡置候御手当帳且絵図面等御軍役方へ差出候様相達候、取次美代藤兵衛殿被来候、昼宮里氏被来、被帰、又暮ヨリ被来候、夕ヨリお村様ニモ御出ニ而各四ツ時御帰ニ候、徳熊当分五日跡ヨリ之打立致痲疹候ニ付今朝ハ玄適被来候、今日ヨリ度々下シ有之候ニ付又々玄適ヘ被来呉候様申遣候得者、玄適ニモ流行之痲疹ニ相立候テ臥居申候間、外医師頼呉候様申来、沖瑞雲殿ヘ申遣候処嫡子雲泊殿被来候、（頭注）「麻疹大流行」当分鹿児島中大流行、已前流行候ハ二十余ニモ可相成候間、二十五六ヨリ已下之人モ余リ残リハ無之様子ニ候、

二十二日　甚雨、

朝六ツ起、六ツ半朝出ニテ出　殿、泊明渋谷喜三左衛門殿ヘ代合相勤候、四ツ過御暇、帰掛花舜軒御墓ヘ参詣、昼宮里十兵衛殿入来、夜六ツ半時分ヨリ母上様拙者方ヘ御出ニテ御寝酒被召上、四ツ過御引入、無程臥候事、徳熊麻疹、今日ハ飯モ全不参峠ト相見得候、

二十三日　雨、終日無止間、

朝六ツ過起、四ツ時造士館詰ニテ出勤、八ツ前帰宅、直ニ御墓参、御寺同断、八ツ過帰宅、夜六ツ半過ヨリ　母上様拙者方ヘ御出御寝酒被召上、四ツ過御引入、無程臥候事、

二十四日　終日雨無止間、

朝六ツ起、四ツ前出勤、九ツ時御暇、帰宅、直ニ花舜軒御墓参詣、七ツ前ヨリ宮里氏入来、七ツ後沖雲伯殿入来、徳熊先日ヨリ麻疹ニテ療治相頼候、今日ハ余程快有之、甑島ヨリ来居候家来橋口仲太郎三日

跡ヨリ麻疹ニ而同人江療治相頼、屋敷内麻疹相煩候者共先一番ニ門番人父子三人、長屋ニハ岸良喜右衛門嫡子之嘉太郎并喜右衛門妻之妹・宮之原喜兵衛・下女壱人・福留七左衛門四男与市都合九人ニテ候、五ツ前ヨリ母上様拙者方へ御出ニテ御寝酒被召上、九ツ時御引入、無程臥候事、此節之麻疹御領国中大流行之由候、（頭注）〔麻疹御領国中大流行〕

二十五日　終日雨、

朝六ツ起、造士館ニテ四ツ前出勤、八ツ後退出、直ニ帰宅、飯給直ニ御墓御寺参詣、昼松岡氏・隈元氏一刻ツヽ入来候、夜四ツ時ヨリ　母上様拙者方へ御出ニテ御寝酒被召上、四ツ半時分臥候事、

○　御通達之写

和泉様（久光）御事、於

京都従

近衛様被

仰進趣被為在、去ル十二日

三郎様ト御改名被

遊候段御到来候、此旨可被奉承知候、

右之通表方江致通達、奥掛・御勝手方ヘモ可申渡候、

五月　　但馬（川上久運）

○　和泉様御事、去ル十二日

三郎様ト御改名被遊候ニ付、御一門方其外月次御礼罷出候面々、明廿六日四ツ時登　城於席々相謁、

太守様（忠義）・

三郎様へ御祝儀可被申上候、

右之通表方へ致通達、奥掛・御勝手方ヘモ可相達候、

五月廿五日　　但馬

二十六日　雨、未之刻ヨリ霽、

朝六ツ起、御墓御寺参詣、八ツ半ヨリ夕詰ニテ出勤、当番新納波門殿へ代合相勤、泊番島津平馬殿代合、御暇イタシ、次渡ハ毎之通ニテ承、泊番ヘモ其通次

渡置候、夕帰宅候得ハ前お村様御出、夜五ツ半時分御帰、四ツ時分臥候事、

○　此節於伏見相働候八人并永田佐一郎へ従
和泉様　御感状之写
今日於伏見抛身命無比類働精忠之程令感悦候、仍切米拾石宛行之条、猶可抽精勤者也、
文久二年四月廿三日　御名乗御判

奈良原喜八郎
森岡善助
道島五郎兵衛
山口金之進
江夏仲左衛門
大山格之助
鈴木勇右衛門
鈴木正之助

右銘々へ
諸浪人等鎮撫之儀厚令沙汰趣有之候処、抛身命申諭精忠之程令感悦候、依切米八石宛行之条、猶可抽精勤者也、
月日　御名乗御判

永田佐一郎江
右永田事、什長之処同組惣テ浪人ニクミシ駈出候ニ付、為御断切腹イタシ相果候、右ニ付御切米被成下候事、

二十七日　終日雨絶間、
朝六ツ起、造士館詰ニテ四ツ前出勤、八ツ後退出、直ニ帰宅、七ツ時花舜軒御墓参詣、八ツ前藤田喜次郎一刻入来、暮ヨリ　母上様拙者方御出ニテ御寝酒被召上、四ツ過臥候事、

○一此節御上納金被為蒙　仰候事、
御用金七万弐千壱両
永百九拾七文三分
内、

金弐万四千両壱分　　子年
金弐万四千両壱分　　丑年
金弐万四千両弐分
永百九拾七文三分　　寅年

右者濃州・尾州・東海道筋川々御普請御用出金上納方御猶予被仰出、来々子年ヨリ三ケ年割合右之通御上納候様、且納方等之儀ハ先達相達置候通相心得、其年々支度次第可被申聞、其節取計方可及差図旨御書取ヲ以被相達候段申来候、此旨向々へ可申渡候、

五月　　（喜入久高）摂津

○

此節上御屋敷

御殿廻御焼失ニ付、御手当不被為行届、御拝借金御願立相成候得共、川々御普請御用之儀者被遊　御勤候

御心得之段御届書差出候処、申出之趣御尤之儀ニ被思召候、依之御願通御普請御用其儘御勤被遊候様、左候テ、御上納方御猶予被成下、来々子年ヨリ三ケ年ニ割合御上納可被成旨、御書付御書取ヲ以被成御渡候段申来候、此旨向々へ可申渡候、

五月　　摂津

二十八日　雨、

朝六ツ起、五ツ過御墓御寺参詣、昼市来半之丞殿入来、泊番ニテ大鐘前ヨリ出勤、夕詰川上東馬殿へ代合相勤候、五ツ半

御引、四ツ過臥候事、

二十九日　朝後霽、夜暫雨、

朝六ツ起、朝出川上東馬殿へ代合、五ツ前帰宅、無程御墓御寺参詣、直ニ帰宅、今日沖雲伯殿入来、主税・徳熊麻疹イタシ候ニ付相頼候、昼二階堂弥六殿入来、暮ヨリ　母上様拙者方へ御出ニテ御寝酒被召上候、拙者事暮ヨリ風邪気分ニ有之候間粥酒抔給、夜着カムリ臥候事、

日史第十

名越時敏

文久二年壬戌六月

朔日　晴、

朝六ツ起、夜前風邪気分ニテ候処、手療治致相応候ト相見得気分宜相成候、今日ヨリ忌明ニテ夕詰出勤掛島津内記様・宮里氏へ一刻参候、出勤迄之間入来人数美代藤兵衛殿・野呂新之丞殿・永田与右衛門殿ニテ、沖雲伯殿ニモ入来、夜前ヨリ吉次郎痲疹塩梅故申遣候、当分ニテ屋敷内痲疹相煩候人数十二人ニテ候、夫ニテモ未残リ多人数有之候、追々打立可有之ト存候、

一今日川上直衛殿・島津主計殿・喜入多門・新納波門（頭注）「射場奉行被仰付毎年今日例ナリ」射場奉行被仰付候由、毎年今日被仰付候事、

二日　曇、

朝六ツ起、四ツ時ヨリ重富屋敷御双方・上之馬場今和泉屋敷并今和泉裏通辺ヨリ立野辺冷水之奥城ケ谷辺処々見廻、園牟田（草牟田カ）へ越相良家・関山家、夫ヨリ川田家・永吉、夫ヨリ西田辺倉山家ヨリ千眼寺前通リ原良新納源左衛門殿へ見廻、夫ヨリ西田水上近ク迄参、夫ヨリ山岡家・税所氏・山田転殿・相良氏・仁礼家・平田靱負殿へ見廻、夫ヨリ津留与右衛門殿・谷川次郎兵衛殿・平田正十郎殿・堀四郎左衛門殿へ見廻、夫ヨリ田面蹈切リ郷原転殿・二階堂源太夫殿・島津左膳殿・川上式部殿へ見廻、夫ヨリ武之橋、帰掛島津主税殿・田尻務殿・菱刈家・花岡屋敷・島津権五郎殿へ参、暮前帰宅、五ツ時分ヨリ　母上様拙者方へ御出ニテ御寝酒被召上、四ツ時分臥候事、

一昨日式日飛脚付候由ニテ江戸状トモ相届候、

三日　間々細雨、

朝六ツ起、江戸状認、夫ヨリ庭掃除トモイタシ四ツ時出勤、四ツ半御暇、浄光明寺参詣、夫ヨリ内之丸家鴨馬場辺ヨリ韃靼冬々筋処々見廻、夫ヨリ後迫辺本立寺筋清水馬場筋川上龍衛殿・美代藤兵衛殿へ見廻、夫ヨリ仁王堂馬場筋処々・春日小路処々見廻、八ツ半帰宅イタシ居候得ハ七ツ前石原五之助殿被来、

島津右近殿事、今晩泊御受之処熱気強相発、当分流行之痲疹塩梅ニ候間相勤呉候儀ハ相叶申間敷哉之旨承候ニ付、病気ニ付テハ難被相勤筈、拙者何モ差支無之御受之段返答イタシ候、大ニ喜悦ニテ被帰候、七ツ時ヨリ戸柱町田家へ参通筋処々同断ニテ用事有之、一刻帰宅、直ニ泊ニ出勤、夕詰大野多宮殿へ代合相勤候、五ツ半時分

御引相達候、御目付ハ野村勘兵衛殿ニテ候、

○　此節麻疹流行ニ付仰出

疱瘡・痲疹・水痘病人遠慮、

一疱瘡病人者相見得候日ヨリ拾五日過候ハ、糺立次第罷出可相勤、

一麻疹・水痘病人者三番湯懸候テ罷出可相勤候、

一御医師疱瘡・痲疹・水痘之病家見廻療治仕候ハ、当日之

御目見遠慮、翌日ヨリ不及遠慮候、

一表へ被遊

御出座候節、

御目通ニ者御定之日数通不可罷出候、

一大奥女中之儀、早速宿許へ相下リ養生可致候、

右者御在府・御在国共

御側并御近習番所へ罷通程之人且大奥女中之儀モ右之内遠慮可有之候、先年来申渡置候得共、程久敷相成候ニ付猶又其通リ可相心得候、此旨向々へ不洩様可申渡候、

六月　（島津久徴）大蔵

四日　快晴、夕ヨリ小雨、

朝六ツ起、泊明ニ候処、朝出島津矢柄殿イタシ呉ラレ、五ツ時帰掛高橋氏・伊勢氏・井上氏へ見廻、帰掛内記様へモ一刻参、帰宅、七ツ時分ヨリ庭取集共イタシ候、徳熊痲疹ハ先日ヨリ宜、主税ニモ今日ヨリ少々快、吉次郎ニハ今日ヨリ手足ニモ相見得候、屋敷内中之痲疹当分二十人ニテ候、未二相煩一人ハ拾三人残リ候、其人数母上様・拙者夫婦・名越平八殿妹於なかとの・福留七左衛門夫婦・同庄二門番之次郎・岸良喜右衛門夫婦・名越喜兵衛母・下女市来ヨ

リ来なか壱人・下人甑島甚助・国分十助弐人、右之内モ岸良ガ妻ト下女壱人ハイタス賦ノ者ニ候得共未取付候、其外モ此前イタシタル歟疑敷人多々有之、誰カ煩ヒ付可申モ難計候、煩残リハ相少ク候、是程ノ流行病ハ拙者覚ヘテ初テニテ候、暮ヨリ母上様拙者方ニテ御寝酒被召上、四ツ過御引入ニテ候、無程臥候事、右癩疹ニ付テ今日ヨリ家来ハ壱人モ無之相成、下女壱人是モ今日ヨリ打立歟不知、下人弐人此者共モ両人共相煩歟不知、右通ニテ人支中々不自由ニテ候、福留七左衛門ニモ子共四人・娘壱人・下女壱人相煩、七左衛門夫婦ト庄二相残、老人共水汲ナトイタシ、見兼候ニ付下人共ヘ水クミ遣候様申付候、是レハ〳〵稀成流行病カナ、御領国中何方モ如斯家内中壱人モ不残相煩処モ多々有之由、御領国中ニ不限日本国中之由候、

○　閨中之言葉

うれいない　　御所之思召
いゝかけんにけておしいよ　　九条殿
そんなにおふるいなよ　　諸司代
あれ又いくよ　　早飛脚
早くしておくれよ　　外国打払
もふよしにしな　　交易
おつよいねい　　薩州
またやるのかへ　　浪人乱妨
よくなつてきたねい　　国主勢ヒ
さしてミたりよ　　会津大老
なんたかきミかわるくなつた　　当時役人
またするのかへ　　忠臣蔵
あとてよくなるからしつとしておしよ　　水戸浪人
とふしたらよかろふ　　親玉
こふなつてハたまらねへ　　諸家中
静におしよ　　世間ノ人

右、三条橋へ張付有之、

五日　曇、稀ニ小雨モアリ、

朝六ツ起、昼辻元新兵衛来、七ツ後前内記・伊藤彦助殿へ一刻ツゝ参、帰宅、大鐘過ヨリ泊番ニテ出

殿、夕詰堀四郎左衛門殿へ代合相勤候、夜五ツ過御引ケ有之、四ツ過臥候事、

六日　晴、稀ニ細雨、

朝六ツ起、朝出内記様ニテ五ツ過帰宅、四ツ過戸柱町田家へ松林院殿病気見廻トシテ参、帰掛奥山氏・薬丸猪之介殿へ一刻ツヽ参、九ツ過帰宅、今日見廻人数池田次郎兵衛殿・安田助左衛門殿、暮過ヨリ母上様拙者方ニテ御寝酒被召上、四ツ時分臥候事、今日ヨリ召仕人数皆痲疹、残リ下僕壱人無病、頓ト込入候、子共看病モ出勤イタシ候得者出来兼候次第故、明日ヨリ御座相頼出勤不致賦、

七日　曇、

朝六ツ起、昨日通痲疹流行ニ下僕壱人ニ相成看病モ届兼候ニ付、今日ヨリ御座相頼出勤イタサス、暮ヨリ　母上様拙者方ニテ御寝酒被召上、四ツ過御引入、四ツ半臥候事、

八日　間々小雨、

朝六ツ起、朝飯夕飯拙者共夫婦ニテ焚、何方モ自身飯焚之方多々有之由、吉次郎痲疹モ今日ヨリ少々快方、徳熊弥快方、主税ニモ痲疹ハ快候得共、痲疹前ヨリ腹合少々不宜候処、未右之病症不快、未床之内ニテ候、暮ヨリ母上様拙者方ニテ御寝酒被召上候事、

九日　間々細雨、

朝六ツ起、座内掃除・飯焚・庭掃除イタシ候、先日ヨリ武之橋川上家お藤痲疹之段承候ニ付今日左右聞ニ遣シ候処、今日峠ニテ相応不塩梅之由、明日ニ相成候ハヽ、気分モ宜可相成ト医師為申由、町田家ヘモ左右聞ニ遣候処、是ハお筆昨日ガ峠ニテ、今日共少々快由申来候、夜五ツ時分ヨリ母上様拙者方ニテ御寝酒被召上候、九ツ過御引入、無程臥候事、

十日　快晴、

朝六ツ起、座内庭掃除、今朝ハ飯ハ下男甚助焚候、主税・吉次郎ニモ余程快候得共未床之内、薬丸猪之

助子共方、永吉升形前新八郎殿抔ニモ痲疹被煩候由、何方モ大流行日頃ニ相成、間々不出来モ有之、世話成事ニ候、浄光明寺サヘ毎夜葬式六ツ七ツツ、ハ有之由、過半痲疹ニ可有之由、南林寺思ヒヤラレ候、未何程モ有之哉不承候、暮ヨリ　母上様御方へ罷出御寝酒御相手申上候、四ツ過臥候事、

十一日　晴、

朝六ツ起、屋内掃除・米洗イタシ、焚方ハ甚助ニテ候、夫ヨリ庭掃除、子共ハ漸々快方、召仕之者共モ快方ニハ候得共、起出薬取ニ共参候ハ甑島ヨリ参居候橋口仲太郎壱人、其外ハ未打臥居候、夜入五ツ時分ヨリ　母上様拙者方ニテ御寝酒被召上、九ツ時分御臥遊シ候事、今日見廻人数ハ沖雲伯殿・美代藤兵衛殿ニテ候、

十二日　晴、

朝六ツ起、朝之内仕事大抵昨日同様、夕前内記様へ一刻参、五ツ時分ヨリ母上様拙者方へ御出、昨夜御同断ニテ候、

十三日　晴、

朝六ツ起、朝之内仕事大抵昨日同様、今日ヨリ出勤、九ツ半御暇、朝之内戸柱町田家へ参、奥山氏ヘモ一刻立寄候、帰掛平佐おつやさま江一刻罷出候、帰宅、八ツ半ヨリ久々ニ野屋敷へ参候、参掛町田鷲之助殿・藤田喜次郎殿・野呂氏へ一刻ツ、立寄候、大鐘過帰宅、奥山氏ヨリ貰候菊植付候、暮ヨリ　母上様拙者方御出、御寝酒毎之通、五ツ時分ヨリ前へ御出、四ツ半御帰、九ツ時分御臥候事、

十四日　快晴、

朝六ツ起、五ツ半二之丸御番所へ一刻参、夫ヨリ講堂詰ニテ参、講釈ハ山名氏イタサレ候、当分痲疹ニテ出席余程相少ク、児ハ九人相見得居候、出席ハ四拾以上之人而已之上、夫モ看病旁ニテ出席相少候、九ツ時御暇、帰掛島津権五郎殿へ一刻参候、当分痲疹イタサレ候、帰宅、七ツ時ヨリ花舜軒御墓へ参詣、

伊藤六郎右衛門殿・町田内膳殿・内記様江一刻ツヽ、参候、暮ヨリ母上様御方へ罷出御寝酒御相手申上候処、五ツ過大島之嘉美行此節又医道稽古トシテ上国、只今小廻ニテ山川ヨリ前之浜へ着、則拙亭之様参候段申候、先年拙者大島小宿村へ致止宿居候節之宿亭主之養子ニテ、拙者帰国之節モ列参、其節平田氏へ入門ニテ医術致稽古帰居相応流行イタシ候得共、又々帖佐之眼科ヘモ先年入門イタシ居候処、未成就イタサス候ニ付、此節ハ彼方へ参候テ皆伝ヲ受度上国之段申候、夜八ツ時分迄相嘶臥候事、

十五日　快晴、

朝六ツ起、掃除庭家内共イタシ候、六ツ半嘉美行起出来、種々嘶共イタシ候、夕詰ニテ八ツ半過出勤、泊島津左膳殿へ代合、帰宅、暮ヨリ　母上様御方へ罷出御寝酒御相手、四ツ過御暇イタシ無程臥候事、

○　御通達之写

三郎（久光）様御儀、先月廿二日京都被遊御発駕候段申来候、此旨向々江可申渡候、

六月　　大蔵（島津久徴）

○　於直殿御事、

於貞様、

右之通御名被進、

三郎様御実子ニ被

仰出、以来右之通相唱、諸書付等ニモ此様之字相用候様被　仰付候、左候テ、御順等之儀者追テ可被仰出候、此旨向々へ可致通達候、

六月　　摂津（喜入久高）

○　御側詰　　小松帯刀（清廉）

右者未年功者無之候得共、此節柄不容易御用筋出精相勤候ニ付、別段之以

思召右之通御役替被

仰付、江戸・御国許共御家老座江モ相詰、御家老同様御用致取扱候様先月廿日京都於

御殿

三郎様御直被
仰付候段申来候、此旨表方へ致通達、奥掛・御勝手
方へモ可相達候、

六月　　大蔵

十六日　快晴、
朝六ツ起、朝出ニテ六ツ半時分出勤、泊明島津左膳
殿へ代合相勤候、四ツ後御暇、終日在宿、藤田喜次
郎殿・宮里十兵衛殿被来候、暮ヨリ　母上様御方へ
罷出御寝酒御相手、嘉美行ニモ罷出候、九ツ時分臥
候事、
○一痲疹日比ニハ余程不出来、死候者多由候、痲疹相済
候後水ヲカヽリ或ハ呑、其外油物ナト食シ瀉痢ト相
成死候者多由、又ハ鶏其外熱物ヲ食シ発熱甚敷シテ
死者モ有之由候、

○当分当番頭一篇之人数名前
島津左膳（久元）　大野多宮（久甫）
平田靱負（正智）　島津内記（久住）
島津右近（久遠）　島津矢柄（久敬）
渋谷喜三左衛門（貫峯）　島津蔵人（久命）
島津権五郎（久篤）　仁礼舎人（仲信）
島津兵十郎　島津平馬
喜入多門（久博）　堀四郎左衛門（起敬）
島津主計（久宝）　市田隼人（義賢）
名越左源太（時敏）　二階堂蔀（行懐）
島津織之助（久直）　新納波門（久世）
川上東馬（久瑾）

○当分詰衆人数名前
頴娃弥市郎　義岡相馬
島津新八郎　吉利仲
鎌田杢之丞　北郷数馬
島津勇四郎　島津小平太
川田掃部　宮之原小膳

○当分相勤候御番人名前
小番一番組合
東郷伝兵衛　得能佐平次
土岐半助

部屋栖番
三番組ヨリ寄
東郷愛之進　大野清右衛門
樺山伊十郎　相良彦太郎
肝付半右衛門　最上佐一郎
新番一番組合
重久嘉左衛門
部屋栖番
御小姓与一番組
二番ヨリ寄
牧仲左衛門　園田喜三次
税所龍右衛門
部屋栖番
伊地知七之丞　永田愛之助
迫田仲之進　黒田藤八郎
池田吉之助　山田清太郎
稲留八次
小番二番与合
六番組ヨリ寄
伊地知才右衛門
部屋栖番
阿多甚五左衛門　伊勢弥市郎
篠崎覚之丞　伊地知直十郎
四番組ヨリ寄
平田直十郎　丹生弥一郎
新納佐平太　今井十郎
木場龍右衛門
新番二番与合
部屋栖番
一番組ヨリ寄
伊集院弥二郎
御小姓与二番組
田代喜介　上山孫左衛門
峯崎与三次　河野甚兵衛
部屋栖番
河野与左衛門　岩下孫一郎
徳永周八　岩切助右衛門
有馬東之丞　肥後助左衛門
川村助次郎　伊集院万左衛門

折田清兵衛
町田助七郎
伊地知藤十郎
友野二郎
四番組ヨリ寄
能勢十郎
平原新次郎
小番三番与合
松崎次左衛門
関山甚七
部屋栖番
渋谷次助
毛利覚次
土岐矢二郎
新番三番与合
一番組ヨリ寄
重久嘉左衛門
部屋栖番
大河平源兵衛
御小姓与三番組
吉井勘左衛門

加治木彦太郎
東郷巳之助
中島仲兵衛
長崎助八
木村平右衛門
脇元喜之助
平田桑之進
東城中之助
市来十左衛門
松岡甚蔵
重信万兵衛

八木十郎兵衛
川上喜三左衛門
加世田新兵衛
部屋栖番
永吉藤左衛門
川上正之助
愛甲嘉右衛門
国分宗之丞
二番組ヨリ寄
八木新兵衛
廻源之丞
小番四番与合
一番組ヨリ寄
仁礼覚左衛門
四本甚七
部屋栖番
土持肇
平田直十郎
谷村孝次郎
児玉三左衛門
新番四番与合

池端万助
伊東次兵衛
和田友七郎
川上喜藤太
木脇新左衛門
平原新次郎
山口孝八郎
武元庄八郎
上村十左衛門
義岡善之丞
上野新五郎
橋口権五郎
山田弥市郎

部屋栖番
山下喜右衛門
御小姓与四番与
武井善兵衛
内田仁左衛門
部屋栖番
本田弥九郎
伊勢勘之丞
山本孫六
伊集院吉太郎
町田郷左衛門
仁礼孝右衛門
川崎休左衛門
小番五番与合
町田太七郎
讃良休兵衛
大島三左衛門
川田彦次郎
部屋栖番

四本佐平次
永田源五左衛門
林権次郎
二番組ヨリ寄
川上直太郎
甲斐弥源次
能勢十郎
四本宗一郎
山田宗一郎
三原嘉次右衛門
秩父十郎太

鮫島四郎
久保弥九郎
河野郷左衛門
福崎太八郎
大島休左衛門
国分庄之丞
新番五番与合
有川彦五郎
部屋栖番
篠原伊平次
御小姓与五番組辰之日
新納休蔵
六番組ヨリ寄
佐野勘兵衛
部屋栖番
丸田孝八
町田助五郎
六番組ヨリ寄
伊東八郎右衛門
川上覚兵衛
六番組ヨリ寄
田中三助

伊藤次郎右衛門
新納次郎右衛門
伊地知新四郎
児玉平蔵
赤塚源之進
川上孫五郎
竹下吉之進
六番組ヨリ寄
馬場勇助
浜田部左衛門
田中庄兵衛
中江市兵衛
野村千左衛門
河野市二

伊藤整之助　池田次郎兵衛
伊藤彦左衛門
小番六番与合
讃良善助　日高清太夫
後醍院喜兵衛　柳清之助
二番組江ニ往寄
伊地知才右衛門　樺山源太郎
田中藤右衛門　安藤八郎左衛門
今井荘八郎　畠山源七
部屋栖番
二階堂彦太郎　鮫島源助
町田彦一郎　伊藤七郎右衛門
町田正左衛門　有馬新太郎
畠山森之助　山本猪之助
新番六番組合
御小姓与六番与巳之日
浜川林八　五番組ヨリ寄　内田仁左衛門
西之原源之丞
部屋栖番
伊藤徳之助　中村太兵衛

岩山直五郎　田中三助
樺山源左衛門　伊集院栄之丞
川北新次郎　有村清太郎
川上卯八郎　松崎杢右衛門
綾部市郎太　有川荘太郎
川上郷十郎　渋谷彦八郎
郷田源一郎　徳尾源左衛門
渋谷次左衛門　河島新之丞
御役御番勤
寺社方取次ニテ　御勘定方小頭ニテ
山口喜三左衛門　福永直之丞
御勘定方小頭ニテ　上同格ニテ
竪山郷之丞　伊佐岡伊右衛門
郡奉行見習
川上出右衛門
学生
一番組合
肝付郷十郎
二番組合
三番組合

四番組合
五番組合
六番組合
伊地知杢右衛門
一番組
伊集院孫左衛門　相良善太夫
二番組
三番組
四番組
平田善之助　仁礼孝右衛門
五番組
瀬戸山善兵衛
六番組
伊勢佐八郎　鮫島新左衛門

十七日　晴、
朝六ツ起、今日ハ泊番ニテ大鐘前出勤、夕詰島津織之助殿へ代合相勤候事、

十八日　晴、
朝六ツ起、朝出内記様へ御頼申上候テ御出勤、五ツ時御暇、終日在宿イタシ候事、

十九日　晴、
朝六ツ時戸柱町田家ヨリ松林院殿先達テヨリ病気之処、只今極々被罷成候旨申来、拙者ハ勿論　母上様・おたねニモ則駈付罷出候、然者又漸々快被罷成候得共別テ難渋之体ニ候間、拙者今日当番ニ候得共内記様御頼申上候、明日モ夕詰之事候得共宜様御頼申上候、四ツ過用事有之罷帰、九ツ時分ヨリ又々参賦候処、不参内又々不塩梅之段申来、参候得者又々快被罷成候、今晩夜起イタシ候、

二十日　晴、
夜前ハ町田家看病ニテ夜起、病人モ先押通快候ニ付、五ツ前一刻罷帰賦ニテ帰居候処、四ツ時分又々病人不塩梅之段申来、早々参候得者又漸々快被相成押通候ニ付、今夜ハ暮過　母上様へ代上、暮過帰宅、四

ツ時分臥居候処、又々九ツ時病人不塩梅相成ラレ候段申来、直ニ参候得者又々快被相成候得者余リ度々不塩梅之事候間、今日ハ居続ニ居候処、今日ハ快被押通、今晩モ夜起イタシ、矢張快被押通候、

二十一日　晴、

今日者終日町田家へ参居、今夜モ夜起、病人ハ押通快候テ夜モ同断、

二十二日　晴、夜雨、

今暁六ツ時迄病人同断ニ候間、六ツ時暫罷帰、四ツ過ヨリ参賦候処、又々六ツ半時分病人不塩梅之段申来、則参候得者此節ハ終ニ養生不相叶候、四ツ半時分帰候、九ツ過ヨリ又々町田家へ参、夜五ツ時分帰候、四ツ時分臥候得共徳熊熱気有之、下痢度々、終夜鳴明シ安眠不出来、折能嘉美行泊リ居候ニ付、起大鐘薬共詰掛為呑候得者夜明少々快、徳熊ニモ安眠イタシ候事、

○　御通達之写

此節痲疹一統流行ニ付、

御城下・町・浜・寺門前ニ至リ軽キ者共困窮ニ而、身近キ親類モ無之無縁之者共存之儘療養行届兼、夫故致死失候者モ有之由被

聞召上、不便之至被

思召候、依之明廿四日ヨリ来月八日迄施薬被成下候条、町家之儀町役、寺門前ハ役人承届、実々極難之者共者証文相渡気寄之医師へ療治相頼候儀差免、貼数之儀者以後向々支配頭等ヨリ取調致一牒名面ヲ以可申出候、左候而、物奉行手形ニテ御物方ヨリ被成下候、

一武家之儀茂万一前文之通療養届兼候者モ候ハヽ施薬被成下候間、触支配并小組頭承届証文相渡、其外仕向之儀右同様申付候、左候而、分而困窮之者共江者為

御救御米被成下候条、一日壱人五合、二七日ツヽ、明廿四日ヨリ来月八日迄於米蔵可相渡候間、施薬之仕向通触支配又ハ小組頭ヨリ物奉行へ相達、常平倉御

囲米之内ヨリ直様書出ニ基キ払渡、左候而、当人請取書取置、右ヲ以御蔵払切引結可取計候、

一町・浜・寺門前前条同断痲疹相煩候者前文同様願出候ハ、為御救御米被成下候条、一日壱人五合、二七日ツ、明廿四日ヨリ来月八日マテ三町於会所可相渡候、

一極難之者共迄施薬并御米被成下事候ニ付、万一可相調丈之者相加リ、以後於令露顕者屹ト可及迷惑候、尤、御徒目付・横目為取締見聞申付置候、右之通以思召被仰付候条、難有奉承知候様支配頭等江申渡、向々江茂早々可致通達候、

六月

（川上久封）筑後
（島津久徴）大蔵
（喜入久高）摂津
（川上久運）但馬
（川上久美）式部

二十三日　曇、夜雨、

朝六ツ起、九ツ半ヨリ戸柱町田家へ参候、今晩葬式有之候事、四ツ時分帰宅、九ツ時臥候也、

二十四日　晴、

朝六ツ起、四ツ半時分町田家へ参、夫ヨリ花舜軒御墓并戸柱御墓参詣イタシ、夜九ツ時分臥候事、

二十五日　晴、

朝六ツ起、大鐘過内記様へ罷出、無程帰宅、又内記様御出、四ツ過御帰、九ツ時臥ス、

○　御通達之写

（久光）三郎様御機嫌能去ル七日被遊御出府候旨御到来候、依之御一門方・島津図書殿并諸大身分其外月次御礼罷出候面々、明後廿八日四ツ時登城、

（忠義）太守様・三郎様へ御祝儀於席々謁可被申上候、

六月　大蔵

右箱之内江図之如キ白砂糖計リニテ製シタル菓子入、色白キアリ、赤キアリ、此節町田民部殿江戸ヨリ贈ラレ、名産故未見ヌ人ノタメ爰ニ写シ置也、

二十六日　晴、

朝六ツ起、拙者此節之忌中去ル廿三日ヨリ之御届ニテ今日ヨリ忌明出勤、九ツ過御暇、直ニ帰宅、暮ヨリ　母上様拙者方御出ニテ御寝酒被召上、九ツ時分御引入、同刻臥候事、

○二十七日　晴、未之刻ヨリ俄ニ大雨、雷明桂山之松築地薬師何某所ハネツルベ江落ル、

朝六ツ起、四ツ時出勤、四ツ過御暇、帰宅、無程野屋敷へ参、嘉美行モ来、暮帰宅、無程　母上様拙者方へ御出ニテ四ツ過御引入、無程臥候事、

二十八日　晴、

朝六ツ起、今晩ハ泊番ニ候処、島津織之助殿夕詰些早目ニ出勤イタシ呉候様申来候間、七ツ時ヨリ出殿、泊相勤候事、

二十九日　晴、

朝六ツ起、五ツ前朝出島津織之助殿ニ代合、御暇、帰宅、四ツ過ヨリ野屋シキへ参候、今日甚助・十助へ粟植イタサセ候、先日ヨリ地拵度々為致置候、七ツ過ヨリ嘉美行来、暮帰候、夫ヨリ　母上様拙者方御出ニテ四ツ過御引入、無程臥候事、

文久二戌六月

○　御備組人数賦帳　　内之浦

御備一手半之人数賦

物主一騎

但、物主之儀ハ御城下ヨリ被差越筈候ニ付、賦方仕不申候、

従卒

南方村長坪之
善吉
同村咄合門
新助
同村白木之
次郎
同村之
喜三
南方村清水門
万之助
同村松園門
太郎
持郷士
唐仁原休之進
但、乳付白地御紋、裾紺、内之浦文字、
昇預
江口次左衛門
談合役
兼丸弥右衛門

一昇壱本
一昇預壱人
一談合役壱騎

従卒弐人
南方村吉留門
伝次郎
同村高花門
亀太郎
貝役
有田万左衛門
太鼓役
岩永覚太夫
一貝壱口
一太鼓壱挺
一什長五人
但、銘々小銃相携、夫壱人ツヽ、什長戦兵拾壱人
相中、
什長
神崎休右衛門
右同
相良治左衛門
右同
白坂壮次
右同

蓑毛郷右衛門
右同
吉井三次郎
夫
北方村新留門
七次郎
同村樫之（脇カ）勝門
仙之助
同村新原門
袈裟助
同村西園門
新助
同村宮之後門
兼次郎
一戦兵四拾五人
内、九人伍長
伍長
岩永玄淵
右同
東郷直左衛門

右同
坂本次右衛門
右同
蓑毛新左衛門
右同
剣持与右衛門
伍長
久木元喜左衛門
右同
白坂源太夫
右同
前田権兵衛
右同
宮地衛守
戦兵
玉置平七郎
白坂十左衛門
肝付八次
吉井孫四郎

有馬平次郎
吉村喜三次
四元嘉右衛門
春山勇右衛門
大迫次兵衛
宮原軍右衛門
吉井伊助
有馬喜之進
大迫卯之助
鎌田新右衛門
剣持甚次郎
白坂源七
川野覚兵衛
黒江幸助
山口仲太郎
松永金次郎
阿久根甚助
赤瀬川森左衛門
春田嘉次郎

唐仁原源右衛門
永井三四郎
下村藤左衛門
有馬堅蔵
大辻清之進
松脇十郎左衛門
田実甚助
白坂助左衛門
前原新助
押田直次郎
満尾市兵衛
坂元十兵衛
江口善四郎

一鉄炮五拾壱挺
内、五挺　什長五人
壱挺　昇預壱人
四拾五挺　戦兵四拾五人
外二、
一玉薬方弐人

源兵衛

但、水汲・薪取其外諸用者物主以下従卒并什長相中夫等惣人体ヨリ繰廻ヲ以兵粮方其外へ召仕可申候、

一玉薬持夫六人

南方村宇都門　周右衛門
同村同門　兼吉
同村牛牧門　吉太郎
南方村吉留門　善左衛門
同村長坪之　新太郎
同村新門　儀三次

合上下八拾八人
内、士以上六拾四人

一兵粮方弐人

肥後次郎右衛門
加藤郷右衛門

一普請方弐人

峯崎七左衛門
鮫島八左衛門

一人馬方弐人

近藤佐市
唐仁原伊右衛門

右四役場主取夫壱人宛四人

吉井廉五郎
白坂伊右衛門

岸良村東膳領門　仲右衛門
南方村川添門　袈裟五郎
北方村上林房門　利助
南方村中西門

主取夫四人
従卒八人
夫丸拾弐人
合乗馬弐疋
小屋割
一物主以下惣人数一坪弐人ツヽ之賦ニシテ五拾弐人
外ニ、
馬屋弐軒、玉薬・兵粮等者別段召置可申候、且
雪隠弐拾人間壱坪ニ四ケ所之賦ヲ以取立可申候、
右人数一小屋縦横依地形取立可申候、竹木等其所在
合ヲ以可用事候ニ付、細引縄等普請方ニ而見合持越
可申候、乍然可成丈ケ家陣又ハ布屋等ニテ為相済可
申候、
右一手半之人数玉薬賦
一塩焙弐拾四貫百弐拾目
斤ニシテ百五拾斤七合五勺、
発数ニシテ壱万弐百発、
但、八匁筒壱発弐匁四分宛、
五拾壱人分壱人ニ付弐百発宛、

一七匁鉛玉壱匁五拾
貫ニシテ七拾貫三百五拾目、
斤ニシテ四百三拾九斤五合、
但、五拾壱人分壱人ニ付弐百発宛、
一火縄千五曲
貫目ニシテ拾六貫八拾目、壱曲ニ付拾六匁ツヽ、
内、一塩焙弐貫八百九拾四匁四分
発ニシテ千弐百六発、
一鉛玉八貫四百四拾弐匁
一火縄百曲五合
貫ニシテ壱貫六百八匁、
右五拾壱人銘々弐拾四発宛胴乱入付自分持、
一塩焙四貫八百弐拾四匁
斤ニシテ三拾斤壱合五勺、
発数ニシテ弐千拾発、
一鉛玉拾四貫七拾目
斤ニシテ八拾七斤九合三勺八才、
発数同断、
一火縄弐百壱曲

貫ニシテ三貫弐百拾六匁、
右五拾壱人、壱人ニ付四拾発ツヽ玉薬箱五荷入付、
壱荷玉薬箱三百三拾四発五合
貫目ニシテ三貫九百八拾七匁、箱共ニ六貫目位夫壱人持、
合持夫六人

外ニ、

一塩焙拾六貫四百壱匁六分
発数ニシテ六千八百三拾四発、
一鉛玉四拾七貫八百三拾八匁
発数同断、
一火縄七百四曲弐合五勺
貫目ニシテ拾壱貫弐百五拾六匁、
合七拾五貫四百六拾五匁六分
右壱人ニ付百三拾六発宛五拾壱人分
右馬付　小荷駄四疋
右同兵粮等之賦
一米弐拾三石八斗五升
打米ニシテ拾九石八升、
但、三盃入弐俵負、小荷駄三拾五疋、
右上下七拾九人半壱日壱人ニ付打米八合宛、
一味噌八拾八貫三百五拾三匁　小荷駄
右同断壱日壱人ニ付三拾八匁宛、
一薪六拾束　長廻三尺
右壱日弐束宛、
一切藁九拾六貫目
右壱日ニ付壱貫六百目宛、小荷駄五疋、
一小糠（コヌカ）三石
右同断ニ付五升宛、
一塩六升
右同断ニ付壱合宛、小糠・塩共ニ小荷駄弐疋、
右之数（日カ）三拾日分、
右兵粮方陣丹荷類之賦
一陣丹荷弐荷
内、壱荷ニ壱斗入口切桶弐ツ入付、
一鍋弐組壱ツ米八升焚
但、弐ツ入子桶入付、

一飯貝
　中四本　小拾本
一片口ざる壱組
　但、弐ツ入子、
一細引百尋
一梅干壱斗
一塩五升
一竹柄杓拾本
　右小荷駄壱疋
右之通太概被相究置候得共、陣丹荷其外之品所在合等ヲ以一組之賄方相調丈可持越事、
一山鍬三挺
一鍬弐挺
一鉈五本
一鎌五本
一藁切
一山刀等
一高張挑灯壱張
一弓張挑灯五張
　内、什長并戦兵間三張、
　兵粮方其外へ弐張、
一中蠟弐拾挺
　高張方
一中小蠟百挺
　弓張方
一物主壱騎
　小荷駄壱疋
　従卒六人
　小荷駄壱疋
一合士六拾人、壱人ニ付壱貫目宛六拾貫目
一合従卒弐拾四人、壱人ニ付五百目宛拾弐貫目
　合七拾弐貫目
　小荷駄三疋
惣合小荷駄五拾八疋
右者、此節御備組被相定、被仰渡趣承知仕、右ニ基キ賦方仕帳面差上申候、以上、
　戌六月
　組頭
　蓑毛郷右衛門
　右同
　白坂壮次
　右同
　相良治左衛門
　郷士年寄助
　吉井玄泰
　郷士年寄
　兼丸弥右衛門

右同
蓑毛郷兵衛

御地頭所
御取次衆中

○此節
道鑑(貞久)様五百年御回忌御法事被為済候ニ付、月次御礼
罷出候面々、明四日四ツ時登
城、於席々相謁御祝儀可申上候、諸士并諸組与力者
御帳へ相付可致退出候、此旨向々江可致通達候、
七月三日　筑後(川上久封)

晦日　曇、雷鳴、
朝六ツ起、今日ハ夕詰ニテ島津織之助殿へ代合相勤
候、泊島津左膳殿へ代合、御暇之事、

（表紙）

名越時敏日史　文久二壬戌七月ヨリ九月マテ

日史壬戌七月中

目録

一和泉様江戸御都合向ニ付　太守様　御筆仰出
一年中着服覚

（貼紙）「文久二壬戌七月ヨリ
九月晦日マテ」

名越日史　紛合未済」

日史第十一

名越時敏

文久二年壬戌七月中

朔日　晴、雷鳴アリ、

朝六ツ起、夕詰ニテ当番渋谷喜三左衛門殿へ代合相勤、泊番島津内記様へ代合、御暇イタシ候事、

二日　晴、

朝六ツ起、五ツ半ヨリ島津権五郎殿へ参、四ツヨリ講堂詰ニテ参、講釈済ヨリ宮之原家先日詰衆被仰付見廻ニ付、右之礼且祝儀ニ参候、夫ヨリ処々暑中見廻ニテ八ツ前帰宅之事、

三日　快晴、

朝六ツ起、今日ハ当番ニテ八ツ前ヨリ出勤、夕詰島津織之助殿へ代合、御暇之事、

四日　晴、夜雨、

朝六ツ起、四ツ前出勤、九ツ過御暇、兵具類土用干イタシ候、

五日　晴、

朝六ツ起、今晩ハ泊ニテ大鐘過ヨリ出勤、夕詰堀四郎左衛門殿へ代合相勤候、夜五ツ過御目付鎌田源次郎殿被来、五疋立後ロ御中門明居候段夜廻リヨリ申出候ニ付、立合見分イタスヘク旨被申候ニ付参候得者最早立居候、決テシメ後レニテモ可有之、御目付方御届ニ相成事候得者、此方ヘモ為御知可給旨申達候得者、明日モ致吟味何分可申旨承置候、且又六ツ半過比御通達参候、左之通、

○御一門方・島津図書殿并島津又六郎一列、大番頭以下月次御礼罷出候面々、奥・表・御勝手方諸役人詰衆へ御用之儀有之候間、明六日四ツ時被罷出候様、向々へ可致通達事、

別紙之通被仰渡候間、此段致通達候条銘々承知之、名前引札ヲ以テ可被申出候、以上、

戌七月四日　　福崎助八

右書写上方下方二手ニ順達相廻候、外ニ書写月番方江次渡ニイタシ候、夜四ツ過臥候事、

一明日御用承知、左之通、

御用之儀候間、明六日四ツ時平服ニテ可被罷出候、以上、

七月五日　　福崎助八

切リ封シ御受書ナシ、福崎氏ハ表御用人、

名越左源太殿

六日　晴、夜雨、

朝六ツ起、今日者四ツ時御用承知故朝出不相頼、四ツ時於御用人座月番座奏者番兼務被仰付候、四ツ半過御暇掛入来院家へ悔ニ参候、恰殿(公寛)妻死去ニ付テ也、直ニ帰宅候、七ツ過ヨリ町田家松林院殿法事ニテ参候、日入比伊藤万次郎殿二女死去ニ付悔ニ参候テ直ニ帰宅、両所共見立ニ遣候、今日菱刈家詰衆被仰付

参候様申来候得共、右次第故不得参候、夜四ツ時分
臥候事、

○

今日

御筆仰出

追々申渡候通外患内憂之世態、人心アル者誰カ是ヲ
痛恨セサランヤ、然ハ
三郎様（久光）ニモ
順聖院様（斉彬）御遺言之御旨被為　受、日々月々危急相成、
無御拠我等参府延引被仰出候、御断且芝屋敷向御下
知ト表向之名目ニテ、内実者為天下国家第一被安
叡慮候思召ニ而、当春
御発途被遊候処、御滞京之
勅命被為　蒙、浪士御沈静之儀被　仰出、万々御苦
心被遊御取沈相成、其後ニ至リ重キ御品且不容易
勅命等御頂戴被遊、又候此節
勅使御同行関東御下向被
仰出、
御出府之上モ追々相伺候得者
公辺向別而御都合宜、越前前中将殿（松平慶永）・閣老辺江モ御
逢被遊候処、只管尊
王之志被相貫、
三郎様御趣意御取用相成、越前中将殿登
城御用部屋日勤、板倉出職、是等皆
三郎様御建白ヨリ取用相成候事ニ候、此上日々御政
道一新正大公平之御処置相成候者無疑義ニテ、我等
実以大幸不過之候、然共
三郎様御苦心之程実ニ奉恐入次第候、就テ者国内之
者共弥正路ヲ心掛、分ニ応シ銘々一入可励忠勤事ニ
候処、士以上之処此比様々之流言有之哉ニ相聞得候、
時世軽重モ不量別而不埒之者共ト存候、直様厳科ニ
処度候得共、格別
三郎様ニモ御苦心被遊候折柄之事故先暫差控候、以
来流言等申触候者於有之者国家之妨相成事ニ候条、
無用捨可及処置候条、其通可相心得候、此旨先達而
ヨリ相含候得共、態ト不相達候、各中ニモ此度
三郎様公武御尽力被遊候次第、国家之為者申ニ不及、
天朝江ノ御忠誠・

御先代様江之御孝道如何相心得候哉、精々忠誠有之
度存候事、
七月

○右御添書
追々被仰渡候通内外憂患之時態、人々奉承知通ニテ、
今般
三郎(久光)様為
御出府被遊
御発駕候処、
御滞京之
勅命ヲ被為蒙、浪士
御沈静之儀被
仰出、厚被遊
御配慮、浪士御取鎮之上
御出府被為
在候処、
公辺向別而御都合宜、御老中様方江モ御対顔
御趣意之御旨被仰上候処、御取用相成候御事共
太守(忠義)様別テ御大幸被
思召上候、就而者御領内之者共弥正路ヲ心掛一入可
励忠勤事候処、士分以上之者此比様々之流言申触シ
候段被
聞召通、別而如何ニ被
思召上、直様御取扱被為在度候得共、先御用捨被遊、
以来流言等申触シ候者ハ屹ト御処置可被為
在ト之趣共、
御別紙之通
御筆ヲ以被
仰出、何共奉恐入事ニ候、浪士御取鎮之儀者実以不
容易御事ニ而、依時機者御国体ニモ相拘事候付、種々
御苦心被遊、無難ニ御鎮静之御処置一統難有可奉敬
承事候処、様々流言等申触シ候段別テ不埒ニ被
思召上候趣、誠以奉恐入無申訳次第ニ候間、向後屹
ト相慎、右様之儀共曾テ無之様弥正路ヲ相守、追々
被
仰出候
御趣意相貫、一向励精勤可奉安尊慮候、此旨謹而被

奉承知、家来末々迄モ急度可被申付候、
（川上久封）筑後
（島津久徴）大蔵
（喜入久高）摂津
（川上久運）但馬
（川上久美）式部

七月

○　年中着服覚

一正月三日のしめ・半切、年頭御式被遊
御受候節ハ三日ヨリ持参太刀之面々長袴、御役ニ付
地頭職被仰付候面々持参太刀・長袴、五節句・年頭・
八朔長袴、御年限中半切、
一正月四日ヨリ七日迄服紗小袖・半切、
一同八日ヨリ平服、
一同十一日十五日熨斗目・麻袴、廿八日不及熨斗目・
麻袴、
上巳
一三月三日熨斗目・麻袴、
一四月朔日袷、足袋ハ不相用、
七夕
一七月七日・八月朔日白帷子・半切、
但、地頭無之町奉行・寄合并一所持二男ヨリ染帷
子、
端午
一五月五日ヨリ染帷子・半切、
一九月九日青物長袴、御年限中半切、
但、今日ヨリ足袋相用来候得共十日ヨリ、
一十二月十三日御煤払ニ付揃上下、
一同廿八日歳暮ニ付揃上下、
一大暑入・大寒入ニ付伺御機嫌揃上下、
一盆両日揃上下、

七日　晴、

朝六ツ起、六ツ半内記様へ一刻参候、五ツ半ヨリ出
勤、今日ハ当番ニテ候得共、御用之儀有之、早目ヨ
リ出殿、引続当番相勤、夕詰島津内記様へ代合、御
暇、夜四ツ半時分臥候事、　母上様御事、昨日町田
家法事ニ付御加勢旁トシテ一昨日ヨリ御出ニテ、今

晩五ツ過御帰、拙者方ニテ暫御寝酒共被召上御臥之事、

○　御通達之写

此節為守衛方上京被仰付候諸座書役等之面々、罷帰迄之間是迄被下来候通跡御扶持米被成下候条申渡、可承向江モ可申渡候、

七月　　（川上久運）但馬

○　入来院恰妻（公寛）お珍（久光女）殿今暁死去ニ付、今日ヨリ来ル十日迄日数五日鳴物令停止、普請者不苦候、此旨表方御役人中江申渡、諸郷ヘモ可申渡者也、

七月六日　　御家老座印

○　入来院恰妻お珍殿死去ニ付、御停止之儀者明後十日迄相晴候得共、

太守（忠義）様御忌十日被遊御受候ニ付而者人々心入ヲ以御忌明迄ハ相慎候様、向々ヘ可申渡候、

七月八日　　（川上久封）筑後

○　当七夕

太守様御朦中ニ付、御一門方并諸大身分其外月次御礼罷出候面々可被奉伺御機嫌候、

但、供廻等平日之通ニ而、白帷子着用之面々茂不及其儀候、

一諸士諸組与力之儀者不及奉伺御機嫌可相達候、

但、星合之儀ハ平日之通可有之候、

七月　　筑後

八日　晴、

朝六ツ起、今日ハ夕詰ニテ七ツ前出勤、当番渋谷喜三左衛門殿ヘ代相（合脱カ）勤、泊島津蔵人殿ヘ代合、御暇之事、

九日　晴、

朝六ツ起、朝出ニテ六ツ半出　殿、島津蔵人殿ヘ代合相勤、四ツ後御暇、帰宅之事、

十日　晴、

朝六ツ起、今日ハ泊番ニテ候得共、昨日松岡喜左衛門殿妻死去ニ付見立并加勢等遣賦ニテ人支故、七ツ過ヨリ出　殿、島津左膳殿江代合相勤候、今朝ハ前御ばゝ様御一周忌ニテ罷出、無程御暇ニテ候事、今晩御目付名越彦太夫殿、

十一日　雨、

朝六ツ起、今朝ハ明番ニテ候処、大野多宮殿朝出イタシ呉ラレ候ニ付、五ツ前帰宅、灯炉張、此両三日灯炉張ニテ候、夜四ツ過キ臥候事、

十二日　晴、

朝六ツ起、四ツ前出勤、四ツ半御暇、直ニ帰宅、終日灯炉張、暮ヨリ家内中打寄諸子祝ニ酒共給候、四ツ過臥候事、尤、　母上様拙者方御出之事、

十三日　風雨、

朝六ツ起、今朝ハ福昌寺御灯炉進納御使者被　仰付、五ツ時相勤、帰掛河俣氏へ悔ニ参候、直ニ帰宅、例年之通暮六ツ時　御先祖様為御迎門外迄罷出候、人数母上様・拙者夫婦ニテ、主税ニハ部屋栖之諸子ニテ候故不罷出候、鐘タヽキハ福留七左衛門妻之ギンニテ候（此銀ハ是枝矢太夫娘ニテ候）、福留七左衛門モ毎之通上下ニテ供イタシ候、夜九ツ時分臥候事、

十四日　晴、

朝六ツ起、七ツ時ヨリ島津権五郎殿へ一刻参候、先日ヨリ権五郎殿嫡子痢病ニテ、昼夜七八十度位之下シニテ候由、別テ之難症ト相見得候、今日ハ大鐘ヨリ之刻割勤前ニ候間、大鐘前出勤、島津蔵人殿へ代合候、泊番ハ島津平馬殿ニテ暮前代合、帰宅、段々見廻人数等有之候、夜四ツ半時分臥候事、

十五日　晴、夕曇、

朝六ツ起、六ツ半ヨリ隆盛院御姉様御墓参詣、夫ヨリ荒田二階堂家へ参賦ニ候処、城ケ谷ヨリ隆盛院へ下ル道筋川北氏前ヨリ登リ候処、当分山茂リ、然モ

朝露甚シク、上下ハ勿論衣服迄茂川へ入タル様ニ相成、迚モ下方抔徘徊出来難ク、何レ帰ラスバ済スト引返シ候得者、ヌメリ転候テ衣服少々泥ニ相成、家来甑島之橋口仲太郎召列居候処、是モヌメリ可笑事ニ候、拙者ニハ刀之鞘モ少々摺リハギ、是レハ〳〵荒不出来、帰ル迚モ見苦シク、如何ニ存候得共未朝早候故其儘帰候得者、今日モ終日見廻人数段々有之候、四ツ過ヨリ島津権五郎殿へ一刻見廻、夫ヨリ町田民部殿（久成）・二階堂源太夫殿（行光）・同姓弥六殿入来院家へ参、八ツ過帰宅、七ツ半時分ヨリ浄光明寺・松岡氏・福昌寺処々、伊藤六郎右衛門殿・町田内膳殿へ参、暮過帰宅、九ツ時毎之通御しやうろ様御帰、又先例之通諸子祝ニ吸物壱ツニテ家内中酒取替シ候、八ツ時臥候事、

一二階堂弥六殿妻先月廿八日麻疹ニテ死去之段、昨日初テ承驚入候、依テ官香五把・野菜料五十疋持参悔申入候、

十六日　晴、

朝六ツ起、講堂詰ニテ四ツ前出勤、九ツ前ヨリ権五郎殿へ富之助殿病気見廻ニ参候、少々ツヽハ快方ト相見得候、八ツ前帰宅、夕ヨリ又々権五郎殿へ参候テ今夜起通之事、外ニ重久佐次右衛門殿・本田吉次郎殿其外両三輩且又女子方或ハ召仕ハレシ人々、

十七日　晴、

朝六ツ過升形ヨリ帰リ、五ツ半出

殿、九ツ前帰宅、九ツ半時分ヨリ臥候テ、七ツ前起、暮ヨリ渡辺氏、昼平田孫九郎殿被来候、四ツ半臥候事、暮ヨリ　母上様拙者方ニテ御寝酒被召上候、

○一御厩へ罷出候馬医之由、九十才ニテ于今毎勤、柿本釜助ト申者至極之元気、鳥渡見掛リハ六十才位トモ相見得候由、珍敷老翁ニテ候、妻モ八十以上ニテ元気之由、是ハ夫釜助之申所、拙者之様ニハ無之不元気ト申由候得共、脇ヨリ見ル所、人並ヨリハ上ト被存候、此者兼テ養生ハ格別無之候得共、朝迄飯給、昼ハ粥、夜ハ不給候由、数十年此通リイタス由候、尤モ妻モ其通之筈ト存候、且（頭注）「ぶへん肴と豚が薬」ブヘン肴ト豚ガ薬ト存

（頭注）「柿本釜助夫婦長命」

候由、是モ少シガ宜ト申候由、

○一京都之医師福井先生家内中別テ無病ニ候間、御当地弟子ニ相成参居候者余リ之事ニ存、何カ御養生食ニテモ被成候哉、御家内中珍敷御無病ニ候ト申候得者、兼々其方抔被見候通朝ト夜ハ漬物壱ツ添テ粥ヲ皆々被下候、飯ハ昼壱度ニテ候、是計之養生外ニ薬用等ハ無之ト被申候由、

○　御通達之写

太守（忠義）様御儀、御用之儀被為在候ニ付、去ル二日御名代御一類中様御壱人被遊御登

城候様被仰渡、島津淡路守殿御登

城候処、

三郎（久光）様御儀、御用向有之御上京被遊候処、浪人共相集不穏様子有之候処、御鎮静可被遊旨被為蒙

御内諭、　御差向御取計

御骨折

被遊候ニ付、

御刀御拝領被

仰付候段御到来候、依之御一門方并諸大身分其外月次御礼罷出候面々、明十九日四ツ時登

城、

太守様・

三郎様へ御祝儀於席々相謁可被申上候、

但、大奥へ兼而御祝儀被申上来候面々ハ毎之通被申上、江戸江ハ有来通追テ急飛脚便御祝儀被申上、

御女中方之儀モ同断可被申上候、

右之通表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

七月十八日

十八日　晴、夜小雨、

朝六ツ起、今日ハ宝鏡院様へ御代参被

仰付、四ツ時福昌寺へ相勤候、帰掛御墓并花舜軒へ

参詣候得者、先年大島ヨリ

母上様御法事之節差上候梅之絵自画自讃之掛物掛有之候故、今日

父上様百ケ日ニ当ラセラレ候ニ付、詠歌一首右掛物之上ニ書付候、

いまは又実の花を手向るも
君か恵と仰きこそすれ
先年大島ヨリ差上候詠歌ハ、
移し絵の梅をまことの花にして
ふかくにほへと思ひ手向る
夫ヨリ帰掛伊藤万次郎殿所へ病気見廻ニ参候、嫡女先日ヨリ痢病ニテ候得共少々快ク候、無程帰宅、七ツ過ヨリ島津権五郎殿へ参候、是モ嫡子富之助殿未痢病不快、少々ツヽ快方ニハ相向キ候、夜八ツ時分薬丸猪之助殿同道ニテ帰リ、直ニ臥候、

○　的前之事

一演武館於弓場去年之通上下打込稽古ニテ、的前之儀ハ上下隔日相掛筈候間、如賦日限無間違雨晴無構可被相掛候、左候テ、江戸詰・田舎御奉公ニ付他行人ニ而モ的可被相掛候、尤、此帳刻付ヲ以名順無滞可被次渡候事、
一的前之日ハ四ツ時前ヨリ罷出、演武館御門内供屋へ控、差引人ヨリ弓場致明方候上ニテ、万端任差図、掃除之儀モ可被入念、尤、差引人ヨリ占方イタス筈候間可被得其意事、
一的前衆不罷出候得者、的相掛候者并矢取候者別而不作法有之候ニ付、的前人数之内ヨリ罷出、不作法無之様可被致下知候、大身分之衆的前之節、家来之内慥成者相添可被差出候事、
一的数三拾之内無之様可被申合事、
但、三ツ的壱組入念出来可被差出事、
一射手人数名前、的前之人ヨリ弓場奉行へ可被差出候事、
一的相掛候当日次之組合其届可被次渡事、
一的前帳賦落候者有之候ハヽ、最寄組合ヨリ早々可被申出事、
一的前帳之儀、留ヨリ六組触役所江返納可有之候事、

戌七月十九日　　弓場奉行　新納波門

八月　　川上直衛

一十一番十一日　　名越左源太

組合

町田内膳
島津内記
河野八郎左衛門
伊集院伊膳

○　御通達之写

麻疹一流行付、武家并町・浜・寺門前ニ至リ軽キ者共、困窮ニテ療養届兼致死失候者モ有之由被聞召上、施薬并御米被成下候段ハ先達而申渡置候処、去ル八日迄ニテ日限筈合候得共、今以流行不相止由候ニ付、引続来ル廿九日迄都而是迄仕向通ヲ以テ又々施薬・米被成下候条、向々へ可致通達候、

七月十九日

（川上久封）筑後
（島津久徴）大蔵
（喜入久高）摂津
（川上久運）但馬
（川上久美）式部

十九日　晴、

朝六ツ起、四ツ時出勤、八ツ後退出、直ニ帰宅、暮過ヨリ母上様拙者方ニテ御寝酒被召上候事、

二十日　晴、

朝六ツ起、今日ハ講堂詰ニテ出勤、八ツ前ヨリ二之丸へ一刻参、夫ヨリ島津権五郎殿へ参候テ八ツ後帰宅、暮過ヨリ　母上様拙者方ニテ御寝酒被召上候、四ツ過臥候事、

二十一日　晴、

朝六ツ起、六ツ過ヨリ家来下人皆打寄、拙者ニモ同断ニテ庭草取、八ツ前ニ相仕廻候、今日者市田家名前泊川上東馬殿被受合置候処、無拠差支到来之由ニテ拙者相勤呉候様承泊番相勤候、夕詰ハ大野多宮殿へ代合候、

○　当分

太守様御事、磯御茶屋
御滞留ニテ　御引ケモ五ツ打直ニ有之候、四ツ過臥候事、

二十二日　烈風、雨間々降、

朝六ツ起、泊リ明ニテ、朝出内記様ニテ五ツ前帰宅、四ツ過ヨリ野屋敷へ参リ候、今日ハ粟クケリ・カライモ土ヨセ共イタサセ候、暮帰宅、六ツ半時分ヨリ母上様拙者方へ御出御寝酒被召上、四ツ半御引入、無程臥候事、

二十三日　晴、

朝六ツ起、直ニ井戸下石垣築出シニ取掛リ、野元喜三次夜前ヨリ来、泊居築方イタシ候、外ニハ戸十郎・仲太郎・十助ニテ候、流レ三間計、横弐間計ニテ候、八ツ後渡辺氏被来候、今日ハ拙者事御座相頼出勤イタサス候、暮ヨリおむら様御出、　母上様ニモ拙者方御出、四ツ過御帰ニテ候、無程臥候事、

二十四日　晴、

朝六ツ起、四ツ前ヨリ講堂詰ニテ出勤、四ツ後ヨリ御殿之様参、当番迄相勤、七ツ前川上東馬殿夕詰ニテ出　殿イタサレ代合、帰宅、板蔵地面地引之場へ諸下知イタシ、暮引入、六ツ半時分ヨリ　母上様拙者方へ御出ニテ御寝酒被召上、四ツ時分御引入、無程臥候事、

二十五日　快晴、

朝六ツ起、四ツ時出勤、四ツ過御暇、直ニ帰宅、今日ハ日雇共来、板蔵地面引且築地土埋イタシ、殊之外埒明大抵埋リ候、暮六ツ半時分ヨリ　母上様拙者方へ御出ニテ御寝酒被召上、四ツ時分御引入、同刻臥候事、

二十六日　晴、

朝六ツ起、四ツ前ヨリ権五郎殿へ参候、富之助殿三日跡ヨリ又々熱気少々出、夫丈三日ハ食事モ進兼候テ咳気モ有之、下痢モ度数三日ハ不相減、矢張同様有之由当分通ニテ、些塩梅不宜気之毒千万ニ存候、四ツ時ヨリ講堂詰ニテ出勤、八ツ後帰宅、夕ヨリ町田内膳(久憲)殿へ精進落ニ参候、宅へ来居候由承候ニ付四ツ前帰宅、九ツ過臥候事、

二十七日　晴、

朝六ツ起、四ツ前出勤、九ツ過御暇、直ニ帰宅、夕ヨリ嘉美行召呼、暮ヨリ　母上様御出ニテ、四ツ過御臥、拙者ニモ無程臥候事、

二十八日　雨、雷鳴、

朝六ツ起、四ツ前一刻　御殿罷出、夫ヨリ講堂へ相詰、九ツ前御暇、帰掛平佐おつやとの江罷出候、無帰宅（程脱カ）、大鐘比ヨリ権五郎殿へ参候、富之助殿些労見之方ニ相成候、夜八ツ時帰候事、

○　御通達之写

喜入多門（久博）妻於寛殿（久光女）今日死去ニ付、今日ヨリ来月三日迄日数五日鳴物令停止、普請者不苦候、此旨与中へ可被申渡者也、

七月廿八日　　御家老座印

大身分触役所

お寛殿事、内実ハ昨朝死去ニテ為有之由候、

○　喜入多門妻お寛殿死去ニ付、

太守様（忠義）御兄弟之御続ニテ候得共、

御家御相続被遊候ニ付半減之御忌服ニ而、御忌十日・御服四十五日被遊御請、

三郎様（久光）ニハ御子之御続ニテ御定式之御忌服、御忌十日・御服三十日被遊御請筈候得共、日数相過候ニ付一日被遊御遠慮筈候、依之御一門方・諸大身分其外月次御礼罷出候面々、明廿九日四ツ時登城、於席々相謁可奉伺御機嫌候、

島津相馬殿嫡子当分当番頭平馬殿事、麻疹後十四日モ出勤イタサレ候処、四五日跡ヨリ痢病ニテ候処、今晩死去之由候、

四月廿五日

浮浪之徒、蛮夷之儀ヨリ彼是蜂起之趣去ル十六日内々言上、被脳（悩カ）

宸襟候処、鎮静之儀御請有之、被安

叡慮候処、又々一昨夜以来猛慕（暴カ）之形勢ニ（被カ）

聞召、元来右之段（徒カ）為

皇国赤心報国之志ヲ以投身命候段者
御感之御事ニ候得共、攘夷一件ニ付テ者実ニ自先年
深被脳
震夷(辰カ)候処、何分国中一致之儀第一ト被
思召候ニ付、尚厚被廻
叡慮候御事候、然処方今血気之壮士等不用理解暴論
ヲ為主、奉
勅命ヲ待スシテ猥リニ乱妨ケ間敷儀ニ及候段ハ忠憤
却テ違
勅命之筋ニ相当不埒之至ト、(候カ)右等違背之輩者早厳可
加制止儀ニ被
思召候事、

五月十八日

○ 方今之時勢不堪傍観、島津家一同挙三国抛身命勤
王
攘夷之旨趣定而不斜　御満足思召候、今般関東へ
勅使被指向、偏ニ君臣御合体国内一致、攘夷之成功
可有之、以深重之
思召被　仰下候ニ付、
勅使ニ引続三郎(久光)出府可周施(旋カ)、去ル十二日以書取被
仰出候処、越前(松平慶永)々中将国政関係之儀、於関東取計候
段叡慮符合
御安心思召候、右ニ付別紙之通
御沙汰候間、
叡慮之旨徹底候様尽力可有之
深御依頼思召候、右之段内々　御沙汰候事、

忠能　実愛　雅典　道熙

定功

五月十八日

○ 一橋(徳川慶喜)刑部卿・越前々中将等之儀、　御箇条書之通被
仰出候処、去十五日大樹年頃者田安(徳川慶頼)大納言後見願之
通差許、越前前中将国政可関係被申付候由言上有之、
就テハ後見之儀、強而者被
仰出兼候得共、何分内外不容易形勢ニ候間深被遊
御案痛、以一橋被登用候方可然　思召候、但名目之
処可為輔弼ト歟、且越前大老職之事為家門之間流例(柳営カ)

本ノマヽ之辺ニテハ可差支候得共、先件非常之所置ヲ以可被（許カ原書不詳）申付　思召候、但是以差支候ハヽ政事惣裁職ト称候テモ可然　思召候、

但、越前々中将儀、　思召之通相成候上ハ方今内外危迫之時節ニ付、今年秋中上京有之国是之議論被　聞召度、且同人儀上京之節ハ引続三郎ニモ可有上京候、其辺相含周施様ニト　思召候事、

朕惟、方今時勢夷戎恣猖獗、幕吏失措置、天下騒然、万民欲墜塗（炭脱カ）不協和、是以不能挙膺懲之師、願降嫁皇妹於大樹、則公武一和而天下戮力以掃攘夷戎、故許其所謂焉、而幕吏連署曰、十年内必攘夷戎、

朕甚喜之抽誠祈神以待其成功、昨臘和宮入関東也、使千種少将（有文）・岩倉少将（具視）諭天下大赦之事、且告曰国政仍旧、大概委於関東、至如外夷之事、則我国一大重事也、係其国体者咸問朕而後定議、或二三外藩臣預聞夷戎之所置、幕府対曰　宸意事甚重大、難遽奉行、請暫猶予、既而頃日列藩有献謀議者、如薩長二藩殊親来奏事、且山陽南海西国之忠士、既蜂起蜜（密カ）奏曰、幕吏奸徒日多正議委地而蔑　王家、睦夷戎、物貨濫出国用乏耗、万民国弊（困カ）之極殆至受夷戎之管轄（轄カ）、不日而可知也矣、冀挙旌旗奉鸞輿於函嶺、誅幕府之姦徒、或曰為除太平浸潤游惰之弊、誅京師之姦徒、又曰不顧幕府下攘夷之令於五畿七道之諸藩、如其衆議畢雖出于忠誠憂国之至情、事甚激烈、使喩薩長之輩鎮圧、其他召幕老吏久世大和守（広周）、往復歴日未告唯諾、而先行昨臘所喩之大赦、夫大樹猶弱何失之有、但幕吏因循偸安撫馭失術、如是則国家傾覆可立而待也、

朕日憂懼焉所謂偸一日之安、忘百年之患、聖賢之遺訓可鑑矣、当内修文徳、外備武衛、断然建攘夷之功、於是斟酌衆議、執守中道、欲使徳川興祖先之功業、張天下之網紀、因策三事、

其一曰、欲令大樹率大小名、上洛、議治国家、攘夷戎、上慰　祖神之震（宸カ）怒、下従義臣之帰嚮、啓万民和育之基、比天下於泰山安、其二曰、依豊

太閤之故典ニ使ヲ沿海之大藩五国称ニ五大老ニ為ニ咨ニ決
国政ニ防ニ禦夷戎ニ之所置ヲ、則環海之武備堅固雄(確カ)然、
必有下掃ニ攘夷戎ニ之功上、其三曰、令下一橋刑部卿ヲシテ援ニ
大樹ニ越前々中将任ニ大老職ニ輔中佐幕府内外之政上ヲ、当ニ
不ル受ニ左衽之辱ヲ、此万人之望恐不ル違ニ
朕意ニ、決ニ乎此三事ニ、是故下ニ使ヲ於関東ニ、蓋欲ル使下幕
府選ニ三事中之一ヲ以行上也、是以周詢ニ群臣ニ無ル所ニ
忌憚ニ各啓ニ沈(沃カ)心丹ニ、宜ル奏ル讜言ニ、

六月朔日

○　上意振

近来不容易時勢ニ付、今度政事向格別ニ令変革候間、
何モ為国家厚相心得心付候儀ハ可申聞、猶年寄申談
候、今日　上意之趣誠以厚　思召、国家之慶事無此
上難有事ニ候、昇平殆三百年、其流弊綱紀モ相弛ミ、
武備御行届相成兼候折柄、近来外国之時勢御差湊ニ
相成居御取扱振ヨリ自然天下之物情ニ差響キ、終ニ
奉脳(悩カ)
叡慮候、素ハ　公武之御間柄(柄カ)聊モ御隔意被為在候御
事ニハ(無之脱カ)候得共、何トナク御情実御通徹ニ相成兼候故
ヨリ之儀ニ付、速ニ御上洛万端
御直ニ被仰上度ト之思召ニテ、則御内々被仰出ニ相
成候、併　御上洛之儀ハ寛永以来御廃典ニ相成候御
式ニ候得者、万端取調急速ニハ御行届ニ難相成候ニ
付、暫之処年寄共ヨリ御猶予相願候儀、此度之儀者
御旧例ニ不被為抱(拘カ)格別御省略、御行粧ニ万端御易簡
ニ被遊候思召ニ付、急々取調次第ト被仰出候、甚御
急　思召御事ニ候、万事御誠実ニ思召御直ニ被仰上、
御合体御熟算之上従来之弊風御一洗御武威被遊　御
振張、我　皇国ヲ世界第一等之強国ト被遊候
御偉業ヲ被為立、各
天朝之　震(辰カ)襟ヲ奉安、下ハ万民ヲ安堵為致度トノ
思召ニ而候得者何レ厚(モ脱カ)奉得其意、
御政事向御変革之筋等各見込之儀モ可有之候得者、
聊モ不憚忌諱国家之御為相心得、心底ヲ尽シ可被申
上、猶追々被
仰出候趣茂可有之候間、無飽迄モ其意ヲ体シ可被抽
忠誠者也、

六月

二十九日　間々細雨、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、朝美代氏・町田藤八殿入来、八ツ後モ藤八殿入来、暮ヨリ　母上様拙者方御出御寝酒共被召上、四ツ過御引入、九ツ過臥候事、

日史第十二

文久二年壬戌八月中　　名越時敏（花押）

朔日　晴、

朝六ツ起、五ツ半時分出　殿、今日ヨリ奏者方月番、初月番ニテ候、無役大身分御家老謁於敷舞台始テ拙者奏者相勤候、麻疹後者無役大身分之出仕者絶テ無之候処、今日久々ニ新納織衛殿被罷出候、八ツ後退出、直ニ帰宅、八ツ後内之浦地頭所年寄ト浦役来候、与頭・横目等モ来筈候得共、地頭所之儀モ痲疹大流行ニテ難迦面々而已ニテ、右両人迄来候段承候、当分

太守様（忠義）御朦中御慎ニ付、八朔御祝儀御流ニ相成、伺御機嫌迄有之候得共、召呼酒共為呑暮帰候、取次美代氏今朝モ八ツ後モ被来候、渡辺氏モ同断両度被来候、暮ヨリ嘉美行来候、　母上様ニモ拙者方ニテ御寝酒被召上候、夜四ツ半時分臥候事、

二日　晴、夕大雨、

朝六ツ起、朝藤八殿一刻被来候、出勤掛平佐おつやとのへ一刻参候テ四ツ八ツ出勤、帰掛升形権五郎殿へ参、七ツ時分帰宅、暮過ヨリ毎之通母上様拙者方御出有之候事、四ツ後万次郎殿被来候由、

三日　快晴、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、四ツ後町田八之進殿・松岡喜左衛門殿被来候由、松岡氏ハ忌中後始テ被来、右之礼共被申候由、今夕ヨリ福山之様被行候由、尤、締方ニ候、暮ヨリ母上様前へ御出ニテ九ツ時御帰、夫迄ハ起候事、

寄道祝

治れる御代のしるしに敷島の
ミち栄へ行やまとことのは
なを子

久かたの雲ゐをかけて匂ふらん
君かことはの花そゆかしき
栄へ行君かミかけにならひてや
ことしハ松もミとりそふらん
あつ子

初春といへる御題を給りて
万代のためしにひかん梓弓
はるまちへたるけふのうれしさ
あつ子

○

戌正月元日於
御城内下供騒キ候一件御坊主へ聞合候書面
長三

然者去ル朔日
御城中之口辺ニテ殊之外混雑有之候、一条委細承込
候丈之処左ニ申上候、

一御玄喚脇ヨリ中之口迄別テ致混雑、誰様御家来ニ候
哉、軽キ者両人、当日
御拝領之時服長持等ニ押サレ例(倒カ)レ候上ヲ踏レ、壱人
ハ六ケ敷相成候趣、壱人ハ追々療治出来快相成候由、
其外少々ツヽ之怪我人数多有之、
一御時服長持并挟箱等数多押コハシ、下供傘桐油等散々
ニ相成候、
一中之口ニテ士分之者刀ヲ抜、是ハ全往来イタシ度為
之事ニモ可有之、右ニ付御目付始御徒目付・御小人
目付等取慎(鎮カ)トシテ中之口ヘ出張有之、差図有之、中
之口往来ヲ留、出入之人ヲ計、夫故御勝手向御役人
迄御玄喚ヨリ退出、供廻混雑ニテ不相分壱人或ハ草
リ計位之事ニ而退出有之、惣退出済及五ツ時ニ、
一中之口御飾松迄例ス、
一御拝領御時服御玄関ヨリ出シ方夕刻ニ成、
先承込見候丈之処右之通御座候、文化度以来之混
雑之由御座候、宜御承知可被下候、此段貴答申上
候、以上、
正月九日

○

安藤対馬守（信正）登

城之節及狼籍候始末御当人御届書

今朝登

城掛坂下御門下馬所手前ニテ狼籍者鉄炮打掛、七八人程抜身刀ヲ以左右ヨリ駕籠へ切掛候ニ付、供方之者防方イタシ狼籍者六人討取、其余之者逃去申候、拙者儀モ捕押方致指揮候内少々致怪我等候ニ付、坂下御門御番所ニテ手当イタシ候得共、出血等有之候ニ付一先帰宅イタシ、供方初手負之者共有之候間相糺、追テ御届申達候、以上、

戌正月十五日　安藤対馬守

○

右手負御届書

昨日御届申上候家来手負相届（糺カ）候処、別紙之通御座候、此段御届申上候、以上、

正月十六日　安藤対馬守

深手　原田壮蔵

同　友田三蔵（六トモ）

深手　小笠原（草トモ）平次郎

鉄炮即死　松元錬次郎

浅手　上坂大五郎

同　村上要二（秀トモ）

深手　斎藤勇之助

同　高津幸之丞

浅手　押方（カタガキ）万蔵（歟）

水戸浪人死体所持道具

財布半切二巻、十八九才（廿七八トモ）　三島三郎

懐中物内ニ斬奸趣意書ト認有之候書付、

三十三才二十三四トモ　豊原邦之助

懐中物一ツ、麻ウラ草リ一足、西洋短筒一挺、玉二通リ五匁程風呂敷ニ包有之、

右同　二十二三トモ　細谷忠斎

斬奸趣意書ト認候書付、手拭一筋、

三十歳二十五六トモ　吉野政助

木綿胴巻一、内ニ斬奸趣意書認有之、

三十五才　相田平之助（千カ）

斬奸趣意書ト認候書付、西洋短筒一挺、是ハ側ニ取落物孤細向集二冊、

三十才四十トモ　浅田儀助

右之通、内桜田御門持場死体見分、

○三郎詩

決心手欲払榛荊　一剣直当百万兵

成否元来皆天耳　欲留報国尽忠名

倒れてもまた起ぬらんわか心

（頭注）「醜ノ醜臣」

しこのしこをミつきる時まで

公義召捕之三人

一橋付近習番　四十八　山本繁五郎

七万八千石下野宇都宮

戸田越前守家来（忠恕ヨリ）　四十七　大橋順蔵

順蔵養子　三十七　大橋寿次

右三人、当時

公辺御所持之儀書記、一橋へ差上候処、早速右書付一橋ヨリ御差出相成候ニ付、順蔵・寿次儀召捕相成候由、山本義者右書付致取次候者ニテ御呼出相成候得共、何茂無御構御暇相成候段申来候、

○　安藤対馬守殿登

城混雑之様子御門当番ヨリ届書

今朝交代後五時御太鼓ニ而
御老若方御登　城之御様子ニ付、見計トシテ私共冠
木御門内迄罷出候処、立番同心共下座申込候ニ付、
大番所ニ而茂下座仕居罷在候処、立番同心共ヨリ御
門外ニテ混雑之様子有之趣申込候ニ付、与力両三人・
同心四五人冠木御門内へ罷出、様子見計候内大和守（久世広周）
殿御上リ相成、御門内ニテ大和守殿御同道ニテ御番
所前迄御出有之、又候御跡ヨリ堀出雲守（氏敏）殿御番所前
迄御出有之、（安藤信正）対馬守殿ニハ御手疵之御様子ニテ御番
所へ御上リ被成候処、大和守殿・出雲守殿直ニ御登
城相成申候、対馬守殿御手疵、御番所ニテ御家来共
打寄御手当イタシ候様子ニテ、無程御門外迄御歩行
ニテ御退散ニ相成申候、右ニ付冠木御門立寄リ潜リ
ヨリ往来厳重相改通行為致居候処、本ノマ、（只今カ）只付御目付小出
修理（秀実）殿ヨリ御小人目付桜井新作ヲ以御門平常之通立
番同心差出、出入之儀厳重相改候様被　仰付候ニ付、
右之通リ相勤申候、此段申上候、以上、
坂下御門当番
小出主膳組
（小堀大膳組カ）
正月十五日

○

水戸浪人自殺之一件松平大膳太夫届書

今十五日昼九ツ時比、書生体之者一人大膳太夫（毛利敬親）外桜
田屋敷内稽古場へ罷越、家来桂小五郎ト申者へ相対
候儀申入候処、折柄小五郎他行中ニ付其由申聞遣候
得共、待合相対可致トノ事候ニ付、夜六ツ時小五郎
帰宅、相対ニ及ヒ候、然処是迄識面者ニテモ無之候
ニ付姓名旨趣相尋候処、水戸浪人内田万之助ト相唱、
今日御曲輪内ニヲヒテ及狼藉候党類候処、機会ヲ失
ヒ遺憾不少、於途中致自殺候モ心外之儀ニ付性名ヲ
モ承及居候間、死後作舞（本ノマ、仕舞カ）ヲモ相頼度罷越候趣申述候
ニ付相宥免置、其段役向之者へ申達罷帰見候処、其
場へ書付一通残置及自殺居候由申置候、此段御届申
上候、以上、
正月十五日
松平大膳太夫内
大和弥八郎

○

戌正月十五日風聞書

今朝久世様御上リ、引続安藤様御上リ然処江短筒二
発打掛候ヲ相図ニ切掛、其節即刻殿様御駕籠ヨリ御
立出、抜刃ニテ御自身御働被遊候由、御手疵之程ハ

如何候哉相分兼候得共、御上下へ少々血付候由、直ニ坂下御番所へ御上リ、其節御供二人御付申候処へ跡ヨリ追掛候故、一人引返シ切合乱妨人ヲ打留候ヨシ、右切結候御供之人手疵ヲ負ヒ候得共御供イタシ、直様坂下ヨリ面体等包帰候由、其跡ヨリ内藤様御上リ、大急候テ駈抜無滞御登　城有之、安藤様ハ坂下御番所ヨリ即刻御下リ相成候ヨシ、鉄炮ハ安藤様之御刀番へ当リ候由、御家来手疵負候モノ有之候由、即死ハ有之間敷哉ニ承申候、多分乱妨人ハ水戸浪人ト申噂ニ御座候、何分六人共即刻切殺サレ、イマタ検使モ不相済頓ト相分不申候、尤、懐中物等モ有之候付跡ニテハ相分可申、知レ次第早々可申上候、逃去候モノモ有無相分不申、押へ候モノハ無之様子ニ御座候、此段途中ヨリ承リ候丈取アヘス奉申上候、何レ御届等相分次第委細可申上候、急キ早々、以上、

正月十五日　　高野仁助

柳瀬半助様

○

桔梗（キケウ）御下馬騒働

当十五日朝五ツ時浪人体之者短筒二発安藤様御登城之節御駕ヲ目当ニ而打掛候処、御供廻二人即死、是ハ直ニ戸板ニノセ安藤様御屋敷へ持入候由、左候テ、対馬守様御駕籠へ刀二本突入、一本ハ右之脇ヨリ、一本ハ後ヨリ突入候由、其時安藤様御駕籠之左脇ヨリ御出被成、少シ血相付土足ニテ坂下大番所之様大急ニテ被相馳候由、二三間余歩行、御コロヒ被成候、其節御供廻四五人駈付大番所迄漸御越被成候由、然処安藤様御屋敷ヨリ銘々印相付、鑓組五拾計駈出浪人七人突留、其上刀等ニテ切殺シ候者モ為有之由ニ而、安藤様大番所ヨリ御帰候節ハ久世様御駕籠へ御乗替相成、御供廻等茂都テ久世様御家中之由御座候、折節紀州様ナト御通リ掛、御供廻等抜身ニテ御通行被成候由、

右実場形行見聞書

○

安藤家一件ニ付牧野備前守内陶山八郎左衛門ヨリ届書

今朝安藤対馬守様御登

城之節、御供連途中江何者共不知及狼藉候旨相聞得候ニ付、早速為見廻候処、持場内へ落散候品モ相見得候ニ付、人立不申様制、足軽差出入念番人相付置申候、先此段御届申上候、以上、

内桜田御門番
牧野備前守内
陶山八郎左衛門

正月十五日

○

安藤対馬守殿へ狼藉一件聞合書

御老中
安藤対馬守様

右御内用方御用人川島助之丞宅へ今日差越、面会之上昨年来之挨拶旁取膳（繕カ）申述候上、昨日御登城之時分御行列へ致乱妨候者有之、委（悉カ）ク御打留之由風聞仕候、如何之事ニ候哉、対馬守様ニハ御怪我不被為在候哉、兼々可申候事故御機嫌奉伺、御国許へ可申上越（徳カ）旨申述候処、御懇切ニ早速御尋被下、忝御聞及候通乱妨人有之、委（悉カ）ク打留ト申程ニモ無之、三四人ハ打洩候哉ト不相分、六人打留申候、兼テ少々ハ増供モ有之候得共、不意之義ニテ未熟成者共無面目次第、主人ニモ乗物之外ヨリ突候ト相見得、腰へ幅壱寸程突疵等有之、深サ左程ニハ有之間敷、面体へ些細ニ疵受候得共、是ハ誠之カスリ疵ニテ小サ成盲薬（膏カ）ニテ相済ミ申候、気分等相替候儀モ無之、昨夜モ少々痛ミハ有之候得共、致安眠モ候程之儀ニテ御心易思召可被下候、且又鉄炮ヲ打掛候哉ニモ承申候、如何ニヤ相尋候処、右鉄炮ニハ供頭之両股打抜相倒レ候得共、直ニ起上リ両人打留、其身モ諸所へ疵請、其内後ヨリ頭ヲ切付候、疵深ク何分死去之程難計、其外三人重疵請、数ケ所薄手受候而、右四人ハ死生何分無覚束存候旨、其外薄手負候者ハ多人数有之由承申候、勿論対馬守様ニモ御乗物ヨリ御出、御手合モ被成候由、夫ヨリ坂下大番所迄御出被成候得共、御出血モイタシ候儀ニテ御登

城ハ不相成、御迎供御取寄御退散被成候旨包置候体無之、万事懇ニ物語仕候儀ニ御座候、此段申上候、以上、

正月十六日

四日　晴、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、退出、直ニ帰宅之事、

五日　晴、

朝六ツ起、四ツ時出勤、四ツ半御暇、今日ハ大工亀太郎来、板蔵材木取調候、仁太郎外ニ日雇壱人、柱六本腐レ候テ不用ニ相成候、余リ不宜候得共賦ニ不入材木之内ヨリ右ニ取替召仕賦、夫故角柱ニ不相成、些丸ミ相掛ルトノ事ニ候、先日ヨリ水道破レ今暫者水掛リカタク候ニ付、其内今日者クルマキ作替共イタシ候、夕ヨリ伊地知才右衛門殿被来候テ夜入四ツ過被帰候、無程臥候事、

六日　朝大雨雷鳴、又夜雨、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、先達ヨリおたね不塩梅ニテ嘉美行致療治候得共未快ラス候ニ付、今日者沖瑞雲殿相頼致薬用候、拙者ニモ今日四ツ時分ヨリ頭痛イタシ候、薬貰ヒ候時候ニ当ラレ候ニ付、発汗イタシ候テ可然ト之事故、薬責付給、粥ヲ給、夜着ヲカブリ打臥候得者過分之発汗イタシ、翌朝ニ相成頭痛モ止候テ別テ快ク候事、

○浪人三島三郎其外人数銘々懐中願書如左

一申年(安政七年)三月赤心報国之輩、御大老井伊掃部(直弼)頭殿ヲ斬殺ニ及ヒ候事、毛頭奉対幕府候テ異心ヲ狭(挟カ)ミ候義ニ無之、掃部頭殿執政以来自己ノ権威ヲノミ振ヒ、奉蔑如

天朝、只管外夷ヲ恐怖イタシ候心情ヨリ慷慨忠直之義士ヲ悪ミ、一已(己カ)之威力ヲ示サンカ為専ラ奸謀ヲ相廻シ候体、実ニ

神国ノ罪人ニ御座候、右巨奸ヲ倒シ候ハ自然幕府ニ於テ御悔心モ被為出来、向後

天朝ヲ尊ヒ夷狄ヲ悪ミ、国危人心ノ向背ニ御心被為付候事可有之ト存込、身命ヲ投候テ及斬殺候処、其後一向御悔心之御模様モ相見得不申、弥御暴政之筋ノミニ成行候事、

幕府之役人一同之罪ニハ候得共、畢竟御老中対馬守殿第一之罪魁ト可申候、対馬守殿ハ井伊掃部頭殿執政之時ヨリ同腹ニテ暴政之手伝ヲ被致、掃部頭殿死

去之後モ絶テ悔悟之心無之、ノミナラス其奸謀詭計ハ掃部頭ニモ超過シ候様之事余多ニ有之▽（「水戸藩史料」より補）兼而酒井若狭守殿ト申合、堂上方ニ正議之御方有之△候得共、種々無実之罪ヲ羅紆（本ノマヽ、羅織カ）シテ天朝ヲモ同腹ノ小人ノミニ致サン事ヲ相謀リ、万一尽忠報国志烈敷手余リ候族有之節ハ、夷狄之力ヲ借リ可取押トノ心底顕然ニ而、誠ニ　神州之賊トモ可申方ニ候、此儘ニ打過候テハ奉脳（悩カ）叡慮候事ハ不及申、於　幕府茂御失体之御政事而已ニ成行、千古迄モ汚名ヲ被為請候様相成候事、鏡ニ懸テ見ルカ如ク不容易御儀ト奉存候、此上当時之御模様ノコトク因循姑息之御政事而已一年送ニ為過（被脱カ）候ハ、近年之内天下ハ夷狄乱直（本ノマヽ、乱臣カ）之物ト相成候事ハ必然之勢ニ御座候故、旁以寝食ヲ安シカタク、右ハ全ク対馬守殿奸計邪謀ヲ専ラニ被致候処ヨリ指起リ（「水戸藩史料」より補）候儀ニ▽付、臣子之至情難黙止、此度微臣共△申全（本ノマヽ、全ハ合歟）対馬守殿ヲ斬殺申候、対馬守殿罪状ハ一々数挙（枚カ）ニ不堪候得共、今其一端ヲ挙テ申候、此度　皇妹御縁組之儀モ表向者

天朝ヨリ被下置候様取繕ヒ、

公武御合体之姿ヲ示シ候得共、実ニ奸謀威力ヲ以テ奉豪奪候モ同様之筋ニ御座候、此度必定

皇妹ヲ枢機トシテ外夷交易御免之

勅定ヲ申下シ候手段ニ可有之、其後若茂不相叶節ハ

窃ニ

天子之御譲位ヲ申醸候心底ニテ、既ニ初（和カ）学者共ヘ申付廃帝之古例ヲ被調候始末、実ニ将軍家ヲ不義ニ曳入、万世之後悪逆之御名ヲ流シ候儀取計所行ニ而、北条・足利ニモ相越候逆謀ハ我々共切歯痛憤之至可申様茂無之候、扨亦外夷取扱之儀茂対馬守殿弥増ニ慇懃丁寧ヲ尽シ、何事モ彼等申処ニ随ヒ、日本周海測量之義早々差許シ、

皇国之形勢委敷彼等ニ相教ヘ、近比ハ品川御殿山ヲ不残彼等ニ貸遣シ、江戸第一ノ要地ヲ外夷共ニ渡シ候類ハ、彼ヲ導キテ我国ヲ取ラシメ候儀同然之義ニ有之、其上外夷応接之儀ハ毎々差向ニ而蜜（密カ）談数刻ニ及ヒ、骨肉同様ニ親睦致シ候而国中之忠義勇憤之者共ヲハ却テ仇敵ノ如ク忌嫌ヒ候段、国賊ト申候モ余有

事ニ御座候、対馬守殿長ク執政被致候ハヽ、終ニハ天朝ヲ廃シ幕府ヲ倒シ、自ラ封爵ヲ外夷ニ請候様相成候儀明白ニ而、言語同断之所行ト可申候、既ニ先達テ「シーホルト」ト申醜夷ニ対シ、日本之政務ニ携呉候様相頼候風説モ有之候間、対馬守殿存候(本ノマヽ、存命カ)故ニテハ数年ヲ出スシテ我国　神聖之道ヲ廃シ、耶蘇之邪教ヲ奉シテ君臣父子之大倫ヲ忘レ利欲ヲ尊ミ候筋而已ニ落入、外夷同様禽獣ノ群ト相成候事疑ナク、微臣共痛哭流涕大息ノ余リ無余義茂奸邪等(之カ)小人ヲ令殺戮、上ハ奉安

天朝幕府、下ハ万民共夷狄ト成果候処之禍ヲ防キ候儀ニ御座候、毛頭奉対

公辺異心ヲ存候儀ニハ無之候間、此後之処井伊・安藤二奸遺轍(本ノマヽ)ヲ御改革被遊、外夷ヲ擒逐(本ノマヽ)シ叡慮ヲ慰メ給ヒ、万民之困窮ヲ御救ヒ被遊候而、　東照宮以来之御主意ニ基キ真正ニ征夷大将軍之御職任ヲ御勤被遊候様仕度候、若モ只今之儘ニテ弊政御改革無之候ハ天下之大小名見放、自分々々之国而已相固候様成行候ハ必定之事ニ有之、外夷之御扱サヘ御手ニ余リ候折カラ、日本国中之人心市童・走卒茂夷狄ヲ悪ミ不申者一人茂無之候間、万一夷狄誅戮ヲ名トイタシ旗ヲ挙候大名有之候者実ニ危急ノ御時節ト奉存候、

皇国之欲(風俗カ)ハ君臣上下之大義ヲ弁シ忠烈節義ヲ守リ候御風習ニ候故、

幕府之御処置段々

天朝ニ相返(反カ)シ候処見請候ハヽ、忠臣義士之輩一人モ幕府之為メニ身命ヲ投候者有之間敷、　幕府ハ孤立之勢ヒニ御成果可被遊候、夫故此度御改心之有無ハ幕府之興廃ニ相係リ候事御座候故、何卒此儀御勘考被遊、傲慢失礼之外夷共ヲ疎外シ、

神国之御国体茂　幕府之御威光モ相立、大小之士民迄茂一心合体仕候テ尊

王攘夷ト大典(本ノマヽ、之カ)ヲ正シ、君臣上下之誼ヲ明(明ニシカ)シマシ〳〵、

天下(トカ)ニ死生ヲ倶ニ致候様御所置希敷(度カ)、是則臣等身命ヲ投奸邪ヲ殺戮シテ、　幕府要路之諸有司ニ懇願愁訴スル所之微忠ニ御座候、恐惶謹言、

七日　大雨雷鳴、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、四ツ過雷鳴強、始之鳴ニ（頭注）「雷火ニテ松焼ク」福ケ迫諏訪後之松ニ雷落、其松雷火ニテ焼ケ、夕ニ倒レ候、拙者居屋敷ヨリモ能相見得候、八ツ前帰掛権五郎殿へ参候、富之助殿少々ハ快キ向キニ候、八ツ過帰宅、暮過ヨリ

母上様毎之通拙者方へ御出、四ツ時分拙者ニハ些不塩梅故御暇ニテ臥候事、

八日　晴、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、直ニ帰宅、夜入六ツ半時分ヨリ　母上様拙者方御出、毎之通御寝酒共被召上、四ツ半御引入候事、

○

松平肥後守御暇之事

二月二日御沙汰書之内

羽織　　松平肥後守（容保）

同氏闌波義国許へ罷越、温泉入湯病気養生イタシ度旨願之通御暇被下、二十ケ月程罷在候而参府候様可被致候、依之被下候、

右於御白書院縁頰老中列座大和守（久世広周）申渡候、

○

和宮様御婚礼ニ付諸書付

二月十一日

一今日就吉辰御婚礼御規式有之、

御座之間

田安大納言（慶頼）殿

右

御対顔御祝義被申上之、過而御熨斗蚫出之、畢テ老中・水野出羽守（忠寛）・若年寄中御目見御祝義申上之、

一御婚礼ニ付溜詰・御譜代大名・鴈之間詰・御奏者番・菊之間縁頰詰・同嫡子・布衣以上之御役人登城、於席々御祝義申上之、謁老中畢而吸物・御酒被下之、

一和宮様御事、今日ヨリ御台様ト可奉称旨被仰出候、

二月十三日

一御婚礼相済候為御祝儀、御三家方ヨリ三種二荷ツヽ、尾張前中納言殿ヨリ二種一荷、尾張殿御簾中・水戸殿御簾中・貞慎院殿・尾張前中納言殿御簾中・貞芳院殿ヨリ御樽肴以使者被差出之、於躑躅之間謁豊後守、

一右同断ニ付、日光御門跡ヨリ二種一荷、同新宮ヨリ一種一荷以使者被差出之、於焼火之間謁同人、

一右同断ニ付、加賀中納言(前田斉泰)・松平筑前守(前田慶寧)ヨリ以使者御樽肴以使者差上之、於檜之間謁阿部播磨守(正耆)、

一右同断ニ付、万石以上之面々ヨリ以使者御樽肴献上之、於大広間四之間御奏者番当番同人家来受取之、

御座間

田安大納言殿

右同断ニ付御登

城

御対顔御祝義被申上之、

一右同断ニ付、御三家方始惣出仕有之、於席々謁老中、

但、於御座間御三家方

御対顔、加賀中納言・溜詰・松平阿波守(蜂須賀斉裕)・松平三(慶倫)河守・松平相模守(池田慶徳)・松平越前守(茂昭)・松平兵部大輔(慶憲)・松平淡路守(蜂須賀茂韶)

御目見、

一右同断ニ付、尾張前中納言殿ヨリ使者差出之、

御座間

御手自備前国勝光

御刀代金十五枚(二十五枚カ)

久世大和守(広周)

時服七

酒井右京亮(忠毗)

右　御婚礼御用相勤骨折候ニ付、於

御前拝領之、

時服五ツ、　老中

同三ツ、　水野出羽守若年寄

同二ツ、　御側衆

右御目見

御婚礼相済候為御祝義於奥拝領之、

二月十八日

一御婚礼相済候為御祝義御能被

仰付、御三家方・加賀中納言始、国持大名其外万石以上之面々・同嫡子・交替寄合・表高家登城見物被　仰付之、

一橋本宰相（実麗）中将帰洛之御暇被仰出候ニ付登城、御能見物被仰付之、

一今辰下刻御白書院へ出御、

銀弐百枚
綿百把　橋本宰相中将

右帰洛之御暇被仰出候ニ付御目見、相済而大広間江渡御、尾張殿・水戸殿・紀伊殿・加賀中納言御対顔、願松平阿波守・願松平三河守・松平相模守・松平越前守・願松平兵部大輔・松平淡路守御目見、畢テ御間之御襖老中開之、御次伺公之面々一同　御目見、相済而御能初ル、

一御能初加納遠江（久徴）守勤之、

御能組

翁三番叟千太郎
松竹風流仁右衛門

開口

夫いや高き松か枝にかゝる例も久堅の天の羽衣まれなれハ千代のミかけ（ミけしカ）と仰つゝ君にさゝくること富貴は愛度かりける時とかや

高砂観世太夫
末広かり
田村彦十郎
福之神
東北宝生太夫
春日龍神

祝言

金札

一御三家方・加賀中納言始、万石以上之面々・交替寄合・表高家、於席々御饗応御料理被下之、

一橋本宰相中将於御黒書院御饗応有之、

一御能三番過要脚広蓋有之、并芝居之町人江折櫃鳥目
被下旨於板縁町奉行申渡之、相済而御中入、
一今日御能ニ付御三家方ヨリ御折一合ツヽ、尾張前中
納言殿ヨリ御槍重一組以使者被差上之、於躑躅之間
謁大和守、
一右同断ニ付在府弐拾万石以上ヨリ御折一合ツヽ、拾
万石以上ヨリ御槍重一組ツヽ、以使者差上之、於槍之
間謁永井肥前守(尚典)、
一御能相済而如今朝御三家方始
御対顔
御目見、畢而
入御、

二月十九日

御座間
御婚礼相済候付
京都　御使
井伊掃部頭(直憲)
金十五枚(百枚カ)
時服十
御馬被下
差添
高家
横瀬山城守(貞固)
金二十枚
右就御暇
御目見、
但、拝領物ハ於羽目之間老中出席頂戴之、
一二月廿一日・廿三日御婚礼被為済候ニ付御能有之、

三月五日

酒井若狭守(忠義)家来
三浦七兵衛
銀三十枚
時服三同断
官武御用筋有之、急速被召下永々逼留(逗カ)、彼是骨折ニ
付被下之、
右於槍之間豊前守申渡候、

三月六日

酒井若狭守
名代松平壱岐守
当御役前後久々相勤、御用多之時節公武御太礼モ有
之候処格別精勤、其上京都表之御警衛茂被仰付候ニ
付而ハ入費モ不少趣相聞得、且今度御縁組御下向御
用モ骨折相勤候ニ付、別段之

思召ヲ以其方勤役中増被下候、御役知弐万石之内壱万石為御加増被下之、

右於芙蓉之間老中列座、豊前守申渡之、

四月廿三日

御婚礼被為済候付

京都御使　井伊掃部頭

茶贈島（茶宇島カ）十巻（本ノマ、）一種

差添　高家

和紙一箱

横瀬山城守

右就帰府　御目見、

従四位上中将　井伊掃部頭

従四位上少将　横瀬山城守

右可任　勅許旨、於御黒書院溜老中列座、紀伊守申渡也、

公義御役之御役替

御役替

本多美濃守（忠民）

加判之列

御免

溜詰格

加判之列

水野和泉守（忠精）

寺社奉行

板倉周防守（勝静）

加判之列

講武所奉行（講カ）

若年寄

稲葉兵部大輔（正巳）

右於　御前被　仰付候、

時服十

本多美濃守

只今迄出精相勤候ニ付被下之、

右於羽目之間老中列座、豊後守申渡之、

松平大膳太夫

当年ハ追テ御暇被下ニテ可有之候、

有馬中務大輔

去年増上寺火之番被

仰付候以来、山内近辺出火有之節、度々出馬イタシ

出精之趣達

御聴、一段之事ニ付被

思召候、此段可申聞旨

御沙汰ニ候、

右於御白書院縁頰列座同前、同人申渡之、

九日　間々雨、雷鳴、

朝六ツ起、金武親雲上来、面会イタシ度承、書院ニテ会候、今日ハ山吹之間鉄炮島津小平太殿引合ニ候処、小平太殿病気故拙者出ルニ不及候処、又市田隼人殿病気ニテ、拙者名代出張呉候様承、新射場三番ニテ島津矢柄殿組合ニテ射候処、五十筒皆負ニテ候、暮過帰宅、四ツ時分迄　母上様拙者方毎之通、

一今日ヨリ板蔵普請打立候、二階有之、十二枚敷ニテ候、

十日　間々雨、雷鳴、

朝六ツ起、五ツ半伊藤彦助殿へ一刻参候テ、吉次郎拙者三男当年七才書物読之儀相頼候、夫ヨリ河野八郎左衛門殿へ一刻参、四ツ前ヨリ恵灯院へ御代参相勤、夫ヨリ

得宜院御忌日ニ付御墓参詣、花舜軒御位牌同断、四ツ過又浄光明寺　浄国院様（吉貴）・月桂院様（吉貴側室、継豊実母）参詣、四ツ半帰宅、暮過ヨリ　母上様拙者方ニテ毎之通御寝酒共被召上候事、今朝渡辺彦太郎殿一刻被来候、

十一日　晴、

朝六ツ起、五ツ過出勤掛金武親雲上へ一刻見廻、直ニ出勤、八ツ後退出、直ニ帰宅、今日ハ渡辺氏・二階堂源太夫殿・おむら様御出、お筆ニモ来候、夕方ヨリ平佐おつやとのへ一刻見廻、夫ヨリ権五郎殿へ参候、夜八ツ時帰宅、富之助殿病気矢張同様ニテ、少シハ不塩梅之方ニ被窺候、

十二日　晴、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、直ニ帰宅、八ツ後沖瑞雲殿被来候、伊藤万次郎殿同断、沖氏ハおたね不快ニ付被来候、暮ヨリ　母上様毎之通拙者方御出之事、今日夕内膳殿（町田久憲）、

十三日　晴、

朝六ツ起、五ツ過ヨリ島津権五郎殿へ参候、富之介殿病気弥労見気之毒之至候、四ツ八ツ出勤、直ニ帰宅、明後日板蔵棟上之賦ニテ今日夕地割ニテ候、暮過ヨリ　母上様毎之通拙者方御出ニ候事、

十四日　晴、

朝六ツ起、明日

御出座ニ付奏者賦、且明日ハ琉球人へ

御目見被仰付、右ニ付テ茂奏者賦等有之、五ツヨリ

出勤、四ツ後御暇、今日者同席中四ツ前ヨリ於祇園

之洲射場鉄炮有之筈ニテ帰宅、直ニ出張、暮帰宅、

五拾筒ニ一句切勝、組合内記様ニテ候、瑞雲殿・伊

藤六郎右衛門殿被来候由、夜五ツ時分ヨリ　母上様

拙者方御出御寝酒等毎之通、今日ヨリ主税兼テ相交

ル人加勢相頼、航米日録写方イタシ候、名前未能不

存候故、今日迄ハ不記置候、

一板蔵明日棟上イタシ候ニ付、今日ハ地搗ニテ候、

一平田玄裕殿嫡子当年六才、昨夕死去之由ニテ今晩葬

式見立ニ人遣候、麻疹後痢病ニテ三十日余被臥居、

内損シテ終ニ死去、

一島津権五郎殿嫡子当年六才富之介殿、右同比ヨリ同

様之病気ニテ今日死去、

十五日　晴、昼過曇、

朝六ツ起、今日者大工共朝六ツヨリ来、板蔵棟上有

之、拙者ニハ五ツ時ヨリ出勤、八ツ前ヨリ権五郎殿

へ参候、今晩富之助殿葬式、夜入四ツ前帰宅、九ツ

時分臥候事、

一詰衆吉利仲殿、先達麻疹被相煩、三日者出勤被致候

処、又々痢病塩梅ニテ終ニ今日死去之由、

十六日　晴、

朝六ツ起、朝伊藤六郎右衛門殿一刻被来、四ツ前出

勤、九ツ過御暇、千石馬場町田家・日置・菱刈家・

市来次十郎殿、是ヨリ先日琉球在番ヨリ着ニ付、夫

ヨリ二階堂源太夫殿へ見廻、川上式部殿へ同刻ニテ、

八ツ半帰宅候得者お藤来居候、宮里十兵衛殿ニモ被

来、お藤ニ者夕方帰候、夜九ツ時分臥候事、

今晩ハ暮ヨリ

母上様前へ御出ニテ四ツ半御帰ニ候、

十七日　晴、

朝六ツ起、四ツ前ヨリ造士館へ相詰候テ、四ツ過ヨ

リ　御殿之様罷出、八ツ後帰宅、七ツ過蘭牟礼伴助殿被来候、町田少輔殿へ新納波門殿所ヨリ妻貫之儀ニ付相談承候、可然ト返答イタシ候処、就テハ拙者引受何歟世話イタシ呉候様承候、夕方おことの被来候、暮ヨリ拙者方ニテ　母上様御寝酒被召上候、四ツ過臥候事、

十八日　晴、

朝六ツ起、朝町田藤八殿・市来次十郎殿被来、四ツ八ツ出勤、八ツ後沖瑞雲殿被来、お種・主税・拙者相頼候、暮ヨリ嘉美行来候、暮ヨリ　母上様ニモ拙者方ニテ御寝酒被召上候、九ツ時臥候事、

十九日　晴、

朝六ツ起、今日新射場三番目ニテ山吹之間中鉄炮有之、五ツ半時分内記様へ罷出、御同道ニテ出張、二人ツヽ七組ニ而候、拙者ニ者島津織之介殿組合ニテ一勝イタシ候、六ツ半時分帰宅、拙者方ニテ　母上様御寝酒被召上、四ツ過御引入、拙者ニハ夫ヨリ板蔵ナト見ニ参、九ツ時分臥候事、

二十日　間々雨、

朝六ツ起、五ツ過出勤、八ツ後帰宅、七ツ時分ヨリ桜島之蔵助夫婦来、夕方帰候、暮ヨリおことの被来、夜四ツ時分被帰候、無程臥候事、

母上様拙者方御出之事、

二十一日　間々雨、

朝六ツ起、六ツ半出勤、今日者琉球人登城、於御対面所

御目見被

仰付候人数左之通、

一唐装束ニテ九拝、

年頭御祝儀其外御祝儀

御礼等之儀ハ兼務

伊舎堂（イシャトウ）親方

右御礼席、御中段上御敷居ヨリ下三畳目頭ニテ御

礼唱、中山王使者伊舎堂親方ト披露、
一唐装束自分之御礼、　右同人
右同断五畳目末ニテ御礼唱、伊舎堂親方自分之御礼ト披露、
一琉球冠服ニテ三拝、　使者　宜野湾親方
右同断四畳目ニテ御礼、奏者島津蔵人唱名計、
一右同断、　唐江之進貢使　奥武親雲上
右御礼席、敷舞台内上御敷居ヨリ下壱畳目ニテ名計、
一右同、　宜野湾親方へ相付上国　金武親雲上
一右同、　返上物宰領才府　当山親雲上

一右同、　琉球館蔵役　照屋親雲上
一右同、　返上物宰領大筆者　我如古親雲上
一右同、　宜野湾親方与力　与世川親雲上
一右同、　同　翁長親雲上
一琉球冠服ニテ、三拝席前同断、　伊舎堂親方与力　米須親雲上
一右同、　奥武親雲上与力　宇久親雲上
一右同、　金武親雲上与力　西平親雲上
一右同、

宜野湾親方儀者

宜野山親雲上（キノヤマ）

一右同、

同

許田親雲上（キョダ）

一右同、

二十二日　大雨雷、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、退出ヨリ直ニ帰宅候得者宮里氏被来、無程被帰、辻元新兵衛ニモ来、是ハ夜入四ツ過帰候、夫ヨリ明日鉄砲仕廻等ニテ九ツ時分臥候事、

母上様ニハ毎之通拙者方御出ニテ御寝酒被召上候事、

二十三日　間々雨、

今日ハ於新射場四番目山吹之間人数中鉄炮有之、五ツ過ヨリ内記様へ罷出候得共、歯之御痛ニテ御出無之、新八郎殿ニハ髪結ニテ未無仕廻之様子、市田家誘引イタシ呉候様承居候テ参候得者直ニ同道、門へ出候得者川上東馬殿ニモ出会、三人同道ニテ出張、初口切迄勝、後ハ惣テ負、暮過帰宅、四ツ過臥候事、

二十四日　晴、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、帰掛平佐へ一刻参候、夜相良市之進殿被来、四ツ時分被帰候、無程臥候事、

口上覚

此節私儀、関東江出府仕候趣意、表向ハ去々年以来修理（忠義）参府両度迄御猶予之御礼、且又屋敷焼失後下知不仕候テ不相叶用向有之筋ニ御座候得共、内実者公武御合体・

皇威御振興・幕政御変革被為在候様建白仕度所存ニ御座候、尤、此儀ハ一朝一夕之事ニ無之、去ル午年以来

幕役共　勅定ヲ遵奉不仕、外夷通商免許仕、剰正儀之親王・公卿ヲ奉始、一橋・尾張・水戸・越前其外有志之大名禁錮仕、庶人ハ死流之刑ニ取行候処ヨリ乍恐被為脳（悩カ）震襟（宸カ）候由伝承仕、諸国之人心致紛乱、浪人共尊王攘夷ヲ致主張、慷慨激烈之説ヲ以交ヲ四方ニ結ビ、或ハ大老ヲ刺シ、或ハ夷人ヲ戮シ候ヨリ幕役共取静之厳令下候処弥奮発仕、近比ニ相成候テ

ハ殊ニ致増長、終ニハ不容易企ニ及候哉ニ伝承仕候、
右通ニテハ　皇国一統騒乱之基ニ相成、勤
王之趣意ニモ不相叶、却テ外夷ノ術中ニ陥候儀ニテ
実以不可然事御座候、私儀家督之者ニモ無之候得共、
三百年来徳川家之御鴻恩ヲ蒙リ、殊ニ亡薩摩(斉彬)守臨終
之節、国政之儀ハ勿論
天朝幕府之御為宿意随述(致継述カ)、精々尽力仕候様分テ遺詫(託カ)之
趣モ承居候付テハ、右次第傍観猶予仕候テハ不忠不
孝之罪難逃存詰、修理太夫申談是非関東へ出府、所
存十分言上仕候含ニテ去月十六日国許発足、当月六
日播州姫路へ着仕候処、諸浪人共追々上坂仕通伏相
待、事ヲ起シ候趣ニ相聞得候ニ付、道中差急キ候儀
茂出来兼、漸去廿日大坂へ着仕候処、浪人多人数滞
坂仕居、紛々之次第御座候間、迚モ無事通行難仕候
ニ付家臣之内内々差出、其方共実ニ勤
王之志有之候ハヽ、此方致上京
叡慮可奉伺候間、暫時潜居可仕旨精々理解為仕候処、
乍漸承服仕候ニ付去ル十三日伏見へ着仕、今日参殿
仕
叡慮奉伺所存建白仕候処、更ニ麁暴ニ事ヲ破リ候義ニ
無御座候、天下之人心安堵仕候様御処置被為　在度
所存ニ御座候間不悪御聞取、委細奏聞被成下候様伏
テ希候、誠惶謹言、

四月十六日

別紙趣意書

一粟田口宮(朝彦親王)・左府公(近衛忠熙)・鷹司公(政通・輔熙)御父子御慎被為解、且於
関東一橋・尾張・越前等御慎解有之候様被仰出度事、
一右御慎解之上左府公関白職被
仰出、於関東ハ越前前中将殿大老職へ被任度、此儀
ハ家格ニテ先例ハ無之筈御座候得共、非常之時節非
常之所置有之候様被仰渡度事、
一田安後見名有テ実無キ事御座候ニ付、免許イタシ候
様被仰渡度事、
一安藤対馬守(信正)手疵平癒出勤仕候由、是ハ第一天下之人
心関係仕不可然事御座候間、速ニ退職仕候様被仰渡
度事、
一久世大和守(広周)早々上洛仕候様被仰渡、前件之儀速ニ取

行候様屹ト被仰渡度事、
一朝廷御威光不被為在候テハ幕役共遵奉仕候儀懸念ニ
奉存候間、大名二三家へ
御内勅被相下、若幕役共違
勅之趣モ有之候ハ、速ニ弁責仕候様被仰渡度事、
　此条御差支之儀有之、御取用無之、
一此以後ハ　叡慮之趣浪人等へ不相洩様御取締厳重被
為相届度奉存候事、
一浪人共之説妄ニ御信用不被為在候様乍恐奉存候事、
一越前在職ノ上ハ上洛被仰出、
将軍未若年之事ニ付、非常之時節御懸念被　思召候
間、一橋へ後見被
仰付、朝廷御尊崇之道於関東
極々(精々カ)奉尽、邪正之弁明ニ相立(自脱カ)、外夷御所持(置カ)天下之公
論ヲ以永世不朽之
明判(明制カ)被為宣、
皇威海外被為振候様被成度、乍恐奉存候事、
　右之条々至愚之身ヲ不顧申上候間、厚　御評儀被
為尽、若御取用ヒ被為成候御事ニ御座候ハヽ、一
日モ早ク勅命被為立度御事ト偏ニ恐願ニ御座候、
敬白、

四月十六日　　源久光拝

二十五日　晴、
朝六ツ起、五ツ過出勤、二十八日之
御目見習礼有之候、拙者奏者、中紙六人日高甚四郎・
中村吉太郎・村田源兵衛・税所雄之助・白坂十郎・
園田七左衛門ニテ候、八ツ後退出、直ニ帰宅、今日
千石馬場町田家祭礼ニ付来候様承、母上様・拙者・
吉次郎参候、拙者ニハ大鐘過ヨリ参、皆同道ニテ四
ツ過帰宅、無程臥候事、町田藤八殿今朝ト八ツ後両
度被来候、

二十六日　晴、
朝六ツ起、六ツ半出勤、今日者
道鑑(貞久)様五百年御回忌御法楽御能有之、浄光明寺始役
僧弐拾四五人罷出拝見、御料理被下候、御能番組、
一翁三番曳千歳　　一養老小幡何某

一清経有川何某　　一葛城中西賀一郎
中入
一橋弁慶中西十郎左衛門　一岩船柏門人
一鴈礫
一痺（シビレ）

七ツ半時分右相済、直ニ退出、帰宅、暮ヨリ　母上様拙者方御出ニテ御寝酒共被召上、四ツ過御引入、無程臥候事、

二十七日　晴、

朝六ツ起、今日者始テ之　御目見習礼ニ付奏者ニテ五ツ過出勤、八ツ後帰宅、夕方ヨリ相良市之進殿入来、四ツ過被帰候、無程臥候事、

二十八日　晴、

朝六ツ起、六ツ半出　殿、中紙奏者相勤候、八ツ後帰宅、昼伊藤六郎右衛門殿入来、夜入母上様御方へ今晩ハ罷出御寝酒之御相手申上、四ツ過臥候事、

二十九日　雨、

朝六ツ起、今日者同席中於四番目鉄炮有之、五ツ半ヨリ前内記様御誘引申上出張、暮過帰宅、四ツ過臥候事、

晦日　晴、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、直ニ帰宅、今朝藤田喜次郎殿・隈元直次郎殿、八ツ後宮里十兵衛殿入来、新納矢太右衛門殿同断之事、

日史壬戌閏八月中

目録

日史第十三

文久二年壬戌閏八月中　　名越時敏（花押）

朔日　晴、

朝六ツ起、五ツ時出勤、今日者

御出座ニテ御一門方御案内并独礼奏者始テ相勤候、
島津信濃殿ニテ候、八ツ後帰宅、帰リ掛平佐ヘモ一
刻立寄、今朝安田喜藤太殿・伊藤彦助殿、八ツ後伊
地知才右衛門殿入来、暮ヨリ　母上様拙者方ニテ御
寝酒被召上候、四ツ御引入ニテ無程臥候事、

二日　間々細雨、

朝六ツ時起、五ツ半河俣氏ヘ一刻立寄、夫ヨリ恵灯
院御代参相勤、相済、花舞軒并御墓ヘ参詣、四ツ過
帰宅、八ツ後宮里十兵衛殿入来、夕ヨリ貞寿院様・
おことの御出ニテ、四ツ過御帰、九ツ時分臥候事、

三日　雨、

朝六ツ起、今日ハ同席中人数分鉄炮有之、五ツ半時
分前内記様御誘引ニテ御同道申上、市田隼人ヘ参、
三人同道ニテ新射場三番目ヘ出張、暮帰宅、毎之通
母上様暮ヨリ拙者方ニテ御寝酒被召上候、前お村様
ニモ御出、九ツ時分御帰、無程臥候事、

四日　雨、

朝六ツ起、今日者今和泉屋敷御鉄炮ニ致出張候様致
承知、川上東馬殿・市田隼人殿・島津新八郎殿誘引、
拙者些不仕廻ニテ書院ニテ三人暫被相咄、五ツ半時
分ヨリ出張、暮帰候、夫ヨリ母上様毎之通之事、
今朝美代氏・相良氏、昼伊藤万次郎殿入来、藤八殿
同断、

五日　小雨、

今日おふさとの・おミつとの入来泊、
朝六ツ起、搆（講カ）堂詰ニテ四ツ時出勤、八ツ前帰、今日
ハ板蔵諸道具入付共イタシ候、八ツ後藤八殿・宮里
氏入来、

六日　曇、夕小雨、

朝六ツ起、五ツ時分町内膳殿ヘ参候、四ツ過帰宅、
今日者御座相頼、板蔵ヘ諸道具入付共イタシ候、今
朝伊地知八郎右衛門殿被来候、夜隈元直次郎殿入来、
四ツ半被帰候、無程臥候事、

おふさとの兄弟今晩モ泊、

七日　間々微雨、

おふさとの帰、おミつとの泊、

朝六ツ前起、今朝町藤八殿・美代藤兵衛殿入来、夕詰八ツ過出　殿、大鐘過帰宅候得者、二王堂伊藤六郎右衛門殿かゝ様今暁ヨリ下シニテ八ツ半死去之由、則悔ニ参候、

母上様・主税ニハ則参候得共間ニ不逢候、夜入六ツ半拙者帰、拙者方　母上様其外家内中打寄、九ツ時分臥候事、

八日　曇、夕ヨリ小雨、

朝六ツ起、今日者御座相頼、八ツ半時分ヨリ伊藤家葬式ニ参候テ夜四ツ時分帰宅、母上様・主税ニモ参候、四ツ半時分臥事、おミつとの泊、

帰候得者明日同席中鉄炮有之段申来居候ニ付、四ツ時分ヨリ玉作之事、

九日　風雨、

朝六ツ起、五ツ半時分ヨリ新射場三番目出張、中々難儀四拾筒口切ナシニテ候処、三拾筒ニ早及丈ニ無之引候テ大鐘帰候、組合島津蔵人殿ニテ候、帰掛平佐おつや様へ用事有之参候、暮前帰宅候得者おむら様御出ニテ九ツ時分御帰、無程臥候事、昼藤八殿被来候由、今晩モおミつとの泊、

十日　烈風甚雨、

朝六ツ起、昨日射場往来ニ草履食イタシ候ニ付、甚雨故御座相頼出勤イタサス、今日ヨリ張付之才助来候、今日ハ唐紙裏打ニテ四拾枚裏打候、処々襖張替并屏風共張候賦、夜入　母上様拙者方御出、四ツ時分迄御寝酒被召上御引入、無程臥候事、

おミつとの今晩モ泊ニテ候、荒田島津左膳殿二女也、

大目付へ

一銃隊調練之儀、近来西洋法御採用相成、御旗本・御家人ハ於構（講カ）武所致修行、夫々厚ク御世話有之、諸家

ニおゐても追々心掛格別出精之向茂有之趣ニ者候得共、猶此上一同及熟練候様主人々々厚ク世話可被致候、就テハ麹町三丁目裏火除明地砲術師範役下曽根甲斐守（信之）・高島喜平（秋帆）調練場御預相成、江川太郎左衛門（英敏）へハ兼テ芝新銭座調練場ニ御預有之候間、万石以上以下之家来等講武所不罷出儀ニ付、勝手次第甲斐守・太郎左衛門・喜平右調練場ニおゐて精出修行候様可被致候、

右之趣、向々へ可被相触候、

文久二戌四月

御黒書院御下段

出御

上意之趣

一近年御政事向姑息ニ流事、虚飾ヲ取繕候ヨリ士風日々軽薄ヲ増、御当家之御家風取失ヒ以之外之義、殊ニ近国ト交際之上ハ別テ御兵備充実ニ無之候テハ不相成、就テハ時宜ニ応シ候御変革被取行、御簡易之御制度・質直之士風ニ復古イタシ、御武威相輝候様被遊

思召候間、一同厚相心得可励忠勤候、

入御以後　御黒書院御次西湖之間ニおゐて、和泉守（水野忠精）殿・周防守（板倉勝静）殿御列座被仰渡候申渡之趣、

一只今上意之趣誠ニ奉恐入難有御儀ニ候、何レモ厚ク相心得、

思召之行届候様一途ニ心掛、抛身命可被抽忠勤候、

猶追々被

仰出候品茂可有之候間、心得違無之様可被致候、

一和泉守殿御渡

講武所奉行へ

大目付

御目付

諸与御番衆并与力・同心、西洋小銃・大砲調練之儀一同格別出精イタシ候付テハ、講武所越中島等之調練而已ニテハ詰リ野戦実地ニ薄キ姿ニテ、足様旁組々之者共御歩行定（立カ）、頭者馬上ニ往通（往返カ）、隊伍ヲ組、武州

徳丸辺へ罷越（調練脱カ）可被致候、尤、時宜ニ寄候テハ一伍（泊カ）イタシ候テモ不苦候間、不取締無之様相心得、諸事講武所奉行・大目付・御目付へ申談候様可被致事、

但、市中ヲ離候テモ隊（ヨリカ）伍ヲ組罷越候様可被相心得事、

右之通申渡候間相達置候、可致通歟向々へ可被相達候、

右文久二戌五月廿五日

十一日　大風雨降、

朝六ツ起、草履ニテ今日ハ雨降故出勤イタサス、同席中鉄炮企茂相断候、才助来、屏風張イタシ候、昨日ヨリ之烈風漸々強相成、巳之刻比ヨリ寅卯之風弥強、大鐘比辰巳ニ直リ漸々柔キ候、カワラ処々落、屏少々倒レ候、尤、糸瓜トフゴリ棚何モナクセンモトシホレ候、世間モ屏ナト倒レ候由、夜入四ツ過迄母上様拙者方御寝酒毎之通ニテ臥候事、おミつとのイマダ泊リ、

十二日　晴、涼気催、

朝六ツ起、今日ヨリ四ツ時出勤、九ツ過御暇、御目見習礼奏者イタシ候、本田六右衛門外ニ両人ハ十四日一日習礼之筈、今朝美代藤兵衛殿入来、八ツ後宮里十兵衛被来候、今日ハ　御殿へ花岡留守居来、若狭殿死去ニ付八ツ後来呉候様承候ニ付、八ツ後ヨリ参、七ツ過帰候、遺言書拙者并島津主税名前ニテ差上候段承候、且又参候而承候ハ夜前七ツ時分若狭殿死去之処、か、様ニモ先日ヨリ病気ニテ七ツ死去被致候、葬式一時ニハ出来候（兼脱カ）ニ付、若狭殿十四日之晩私領へ被差越、か、様ニハ死去之御届申上、吹聴等モ十五日相廻シ、十六日之夜私領へ被差越候賦之由、右次第之事親類中へモ相嘶置ト之事ニ候、

十三日　快晴、

朝六ツ起、講堂詰ニテ四ツ前出勤、四ツ過ヨリ奏者稽古トシテ　御殿へ罷出候、川上東馬殿同道、九ツ半時分帰宅、八ツ後花岡留守居来、二階堂源太夫殿ヨリ被申筈候処昨日被申後候由、当分信濃殿大乗院火消被承居、忌中誰モ類中ニ相頼候方茂無之候ニ付、

拙者承居呉候様被申遣候、何モ不案内之事候得共、何モ故障ハ無之候ニ付、随分承知仕御受申上候段致返答候、新納弥太右衛門殿ニモ用事有之被来候、伊地知才右衛門殿ニモ張付為加勢被来、尤、才助ニ茂来候、伊地知氏ハ夜モ被相嘶四ツ時分被帰候、母上様ニハ前江御出ニテ四ツ過御帰候、

十四日　曇、

朝六ツ起、五ツ時升形へ法事ニ参候、富之介殿四十九日・百ケ日相混候法事ニテ候、四ツ前ヨリ出勤、今日ハ明日有之候　御目見人数習礼ニテ御家老衆・若年寄衆御見分有之、島津大蔵殿（久徳）・川上龍衛殿（久給）御見分被成候、八ツ前帰宅、七ツ過ヨリ花岡屋敷葬式ニ参候、私領へ船路ヨリ被差越候、地蔵角ヨリ北郷浪江殿同道ニテ帰候、夜四ツ時分臥候事、

母上様ニハ心岳寺御参詣之筈ニテ戸柱町田家御出有之候得共、風不宜心岳寺参詣ハ取止相成、タンタトフ野屋敷江御出為有之由、今晩ハ御泊、おミつとの矢張拙宅へ泊ニ而候、

十五日　晴、

今日かん所家直シイタシ候、弐拾人余ニテ暫時ニ済、朝六ツ前起、六ツ半出勤、今日ハ初テ之御目見弐拾人余有之、拙者奏者、桂杢右衛門殿家督之御礼、本田六右衛門并一乗院入院之御礼ニテ候、敷舞台ニテ琉人拝領物之奏者相勤候、八ツ時帰掛平佐へ一刻参候、十兵衛トノ被来候、才右衛門殿被来、才助同断、夜ハ内記様御出、おミつとの矢張泊、

十六日　間々小雨、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、大鐘過ヨリ花岡若狭殿かゝ様葬式ニテ参候、地蔵角ヨリ帰候、木尾氏被来候、四ツ時ヨリ才右衛門殿被来候、才助同断、おミつとの矢張泊、

十七日　曇、

朝六ツ起、六ツ半朝出ニテ出勤、泊明島津右近殿へ代合候、四ツ後ヨリ新射場四番目出張同席中鉄炮、暮帰宅候、当分コロリ流行、第一町多ク流行之由候、

右流行病追払之由ニテ異国人之高サ三間計之者作候テ、子共鐘抔タヽキ浜へ出、焼捨候由之者共へ二ツ行当リ候、毎晩如是イタシ候由、帰宅候得者町田直五郎殿被来、才右衛門殿昼ヨリ被来居、夜モ被相噺候、才助今日モ四ツヨリ来候由、おミつとの矢張泊、

十八日　晴、

朝六ツ起、暁ヨリ辰之刻比迄ニ六度泄瀉有之、御座相頼出勤不致候、夜入四ツ前臥候事、おミつとの泊、

十九日　曇、

朝六ツ起、講堂詰ニテ四ツ時出勤、山吹之間同席中鉄炮故御暇イタシ、新射場四番目ニ出張、夕詰帰宅、四拾筒口切ナシ、鎌田杢之丞との同組ニテ候処、中々及丈ニ無之、拾五筒引帰候、夜五ツ時分臥候事、祐右衛門来候由、おこと殿被来、おミつとの泊、

二十日　晴、

朝六ツ起、四ツ前出勤、九ツ過御暇、直ニ帰宅、今和泉屋敷御鉄炮人数支ニテ罷出候様致承知、直ニ罷出、暮過帰宅、修甫ハ今日二階下段梁リ柱抔少々替、上屋根二階ネダ張共イタシ候、日雇ハ上屋根フキニテ候、夜四ツ時分臥候事、おミつとの矢張とまり、

二十一日　雨、

朝六ツ起、今日ハ御座相頼、二階諸道具外座へ相移シ埃払出取捨掃除共イタシ候、暮ヨリ母上様拙者方ニテ御寝酒毎之通被召上候、拙者御曾祖父恒篤様御像重富静洞（忠寛）様御実母様御作ニテ恒篤様へ被進候由、余程能御似寄ナサレ候ト拙者幼少之時分御両親様ヨリ拝見被仰付、左ナガラ能御似寄ナサレ候段ハ追々御噺モ有之、其後終ニ拝上候事無之、心尋イタシ色々探索イタシ候得共不見出、甚残情不少候処、今日風トイタシ何篇モサガシ求候タンス引出シ之上ニ三十五六年目計ニ御出居ナサレ候、誠ニ難有、イカサマ当分修甫共イタシ、御喜悦之御事歟ト別テ嬉シク、今晩ハ祝之心ニ家内中打寄酒共給候所へ頭之方へ置上候而給候、おミつとの泊、

二十二日　雨、

朝六ツ起、今日モ御座相頼大工、今日者本ヨリ之二階ト此節持直シ候カン所ト之間郎下之上物置、二階根ダ張共イタシ、拙者ニモ二階洗ヒ方イタシ、家来・下人同断、日雇茂両人ハ洗方イタシ候、煤幾重共ナク付ヘンコ起候様有之候得共随分能落候、暮ヨリ母上様拙者方御出ニテ毎之通御寝酒被召上候、今日者二階洗候故下モ畳惣テハギ上ケ、居所モ無之候故書院モ半分ハ諸道具置有之候得共、末座之方へ皆臥候事、おミつとの泊、

毛利侯建白之大意

毛利侯(慶親)建白之旨ハ兼テ申立茂有之候処、去ル五日登城ニテ久世侯(広周)へ面会申述候趣、其大意ハ兼テ

徳川家之御為存意建白仕度段申立置候処参候儀ニ茂無之、追々天下之形勢変革仕、今之如ク相成候上ハ、是非大英断無之而者相成間敷候、一体先年井伊侯(直弼)御在職之節ハ井伊殿之了簡ヨリ万事御暴政之筋ノミ成来候処、井伊殿退役後ハ安藤侯(信正)専権ニテ、却テ井伊殿御在職之有様ヨリ甚敷御暴政ニ相成、天下中人心尽ク徳川家ヲ離レ居、既ニ鍋島家抔内願之趣ニテ隠居被仰付、右ハ徳川家之御暴政最早迚モ不可救事ト存候、内実専(専ラ一国富強之カ)ニ一国富強鏡之目輪(論カ)見ニ有之、其外大藩共各一国々々ヲ守リ候様之形勢、皆以テ幕府之御仕向不宜所ヨリカクハ相成、徳川家之御為誠ニ苦心之至ニ御座候、且

和宮様御下向之義ハ、御下向サヘ被為成候ハヽ、将軍家直様御上洛ト申事迄各方御調印茂有之、誓ヲモ御立被成候程ニハ無之哉、然処其後之御様子見候処ニテハ、御上洛ハ更ニ無之、如何ニモ京師ヲ御踏付被遊候訳ニテ、万事

天朝ヲ欺キ被遊候、御軽蔑モ愈甚敷ト申、此節京師ニ於テハ

天子御逆鱗、宮堂上方一同憤激一方ナラス、只今ニ徳川之御家モ如何様歟相成可申、上者京師之御模様、下ハ人心之背叛ト申、実ニ危急累卵(卵カ)之御都合ニ御座候、仍テハ大御英断不被為在候テハ相成間敷ト段々談論有之候処、久世侯愕然之様子ニテ英断ハ如何之

義ニ候哉ト承候処、毛利侯黙シテ世(久脱カ)侯之顔ヲ睨ミ稍久敷答モ無之処、再三承候ニ付、左様迄ニ御聞被成度候ハ、存意之事モ御英断ニ相成事ト相見得候間可申述候、今日之処ニテハ御懿親ト申人財ト申是非越(松平慶永)前守御大老ニ御引上、一橋(慶喜)殿ヲモ御補佐ニ御用被遊、折々御登

城ニテ御政事御相談モ有之、其外川路・佐々木之如キ正儀ヲ以テ廃黙(廃黜カ)仕候者并有志之者不残御役方ヘ御用ヒ被遊、行々是迄之御政事復古之御手段外ハ有間敷旨茂申述候処、其勢如何ニモ恐敷、久世侯誠ニ愕然ニテ答ニ、誠ニ被申聞候趣御尤至極ニ御座候間、何分心力尽シ可申、乍併私一人ヘ御申聞ニテハ差支候間、同列一同ヘ御申聞被下候様ニトノ事ニテ、内藤・本多等一同列席之上、前文之意味又ハ段々申述候処、何レモ驚入候様子ニテ更ニ答無之候ニ付、各様今御答無之ヲ見レハ愚意之趣御決断ニモ相成タル(サカ)事ニ相見候哉ト御申候処、一同ニ決テ左様之訳ニハ無之、微力ニテ何共不安心ニ存旨答ニ及候得者、毛利侯ニハ弥幕府ニヲヒテ紀綱御一新之勢モ無之、京師ヘ之御申談モ不被遊、人心ヲ御磨撫之御手段モ無之候ハ、、最早此上

天子ヲ扶テ四方ヘ号令仕候ヨリ外無之、此儀者薩肥等ヘ申合候所存モ有之候間、弥御決断モ無之候ハ、

▽(「再夢紀事」より補)右様仕候心得ニ御座候、左様相成候節ハ△流石丸ヘテ御負申心得ニモ無之候間、屹ト御了簡相成候様ニトノ事ニテ、閣老一同其勇威ニ恐レ早々申合可申旨答候、毛利侯被申ハ、京師之モ様御疑惑被成候ハ、家来永井雅楽(時庸)ト申者有之候、此旨儀能々心得居候間、此人ヘ御尋可被成旨申退散被致候由、閣老一同皆顔色ヲ変シ、早速長井雅楽呼出シ一々承候処、成程毛利侯被申候ヨリモ大変成有様ニテ一層苦心モ相増何事哉ラン、去ル十六日ニ

幕命ヲ以テ長井雅楽京都ヘ発足イタシ候由、

右文久二年申(戌カ)四月

四月十一日

御座間

加判之列御免
溜詰格　安藤対馬守(信正)

右於　御前被仰付之、

美濃国兼倉（定カ）　同人

御刀代金二十枚
御三所物

右　御懇之蒙

上意　御手自拝領之、

四月廿二日

脇坂中務大輔（安宅）

名代　松平壱岐守

養子

同淡路守（安斐）

病気ニ付願之通隠居被　仰付、家督無相違養子淡路守へ被下之、

右、於波之間老中列座、紀伊守申渡之、（内藤信親）

四月廿三日

井伊掃部頭（直憲）

差添高家

横瀬山城守（貞固）

右就帰府　御目見、

別冊ニ写故委細ハ略ス、

従四位上中将井伊掃部頭

従四位上少将横瀬山城守

右可任

勅許旨、於　御黒書院溜老中列座、紀伊守申渡之、

四月廿五日

御目付

浅野伊賀守（氏祐）

外国貿易税則再儀之儀期限モ近寄候間、右　御用取扱、

右被　仰付旨於新番所前溜和泉守申渡候、酒井右京（水野忠精）（忠毗）

亮侍座、

五月三日

松平肥後守（容保）

以来重立候御用向ニ付、度々登城相談可致旨被　仰出之、

右、於　御黒書院溜老中列座、和泉守申渡之、

御座間

松平肥後守

右　御目見、

五月七日

尾張前中納言（慶勝）

右、御登　城御慎悉皆御解、

越前

松平春嶽（慶永）

右同断、

徳川刑部卿殿（慶喜）

右同断、

御対顔

松平容堂（山内豊信）

右同断、

同日

御座間

尾張前中納言殿

右　御登　城

御対顔、畢テ於竹之間御吸物・御酒・御菓子・御茶出之、

越前守養父隠居

松平春嶽

右、登　城　御目見、

御座間

徳川刑部卿殿

右、登　城　御対顔、

越前守養父隠居

松平春嶽

以来御用向可申談候間、折々登城相談可致旨被　仰出之、

右、於御白書院黒鶴之御杉戸際列座同前、同人申渡之、

五月九日

御座間

田安大納言殿（慶頼）

御内願之通　御後見　御免、

被叙正二位、

右、於　御前被　仰出之、

五月十四日

遠江守養祖父隠居

養物五（巻カ）

伊達春山（宗紀）

名代伊達遠江守(宗薀)

同氏春山儀、在所へ罷越温泉へ入湯、病気致養生度旨願之通御暇被下、二十ケ月程モ罷在候テ参府候様可被致候、

右、於　御白書院縁頰老中列座、和泉守申渡之、

御勝手懸リ

水野和泉守(忠精)

右被　仰付旨於奥相済、

五月十三日

松平肥後守

松平春嶽

向後御用有之節御用部屋へ相通リ候様被　仰出之、

右、於　西湖之間老中列座、和泉守申渡之、

五月十四日

御座間

内藤紀伊守(信親)

日光御宮　御霊屋御修覆惣奉行

右、於　御前被　仰付之、

御座間

久世大和守(広周)

同断御用　御免、

右、於　奥相済、

大目付

外国奉行兼帯

大久保越中守(忠寛)

御目付

浅野伊賀守(氏祐)

大和守此度上京ニ付、其節可被差遣候条可致用意候、

右、於新番所前溜和泉守申渡之、酒井右京亮侍座、

奥御右筆

佐藤清五郎

湯浅貫一郎

同文言

右、於奥相済、

五月十五日

御座間

位階之御礼

田安大納言殿

銀三十枚・巻物十・御馬壱疋

右　御対顔、

京都へ御暇

久世大和守

御手自御拝料(羽織カ)被下、金二十枚・時服十・御馬被下、

御暇

看病料初而松平越中守

御鷹・御馬被下

御暇

初而酒井雅楽守(忠績)(頭カ)

御鷹・御馬被下、御刀豊後国統行、代金十五枚、

右御目見、

五月廿三日

御座間

脇坂揖水(安宅)

加判之列

右、於　御前被　仰付候、

脇坂中務大輔

座順之儀ハ紀伊守次ト可被相心得候、御勝手掛外国御用取扱、御役相勤候内年々三万俵ツ、被下之、

右、於奥相済、

一揖水事、中務大輔ト相改候事、

五月廿六日

御座間

内藤紀伊守

加判之列御免、溜詰格、

右、於　御前被　仰付之、

内藤紀伊守

御刀(加賀国家次代金二十枚)

右　御懇之蒙

上意　御手自拝領之、

二十三日　曇、烈風、当分修甫故戸ニテ雨覆イタシ有之候

処、五六枚一時ニ庭処々ニ吹落、夜入尚強故結

〆置候、

暁大鐘前起写本イタシ、茶モ入給候、四ツ時出勤、

九ツ半退出、直ニ帰宅、夫ヨリ家之内洗方、主税・

戸十郎其外家来・下人同断、暮ヨリ母上様抔皆々打

寄酒抔給候、四ツ時臥候事、

おミつとの未泊、今朝川上源十郎殿被来候、

二十四日　曇、風少々強、

朝六ツ起、母上様御隠居ニ相成処其外内之座抔、自身ハ勿論戸十郎家来等打寄洗方イタシ候、昼時分ヨリお広との被来、今晩ハ泊之筈候、拙者ニハ泊番故七ツ過ヨリ前内記様一（へ脱カ）刻罷出候、当分花岡之火消大乗院承居候ニ付、泊故若哉今晩出張様之事御座候ハ、、御出勤被成下候様御頼申上候、夕詰島津権五郎殿へ代合相勤、今日ハ当番夕詰勤続ト相見得居候ニ付、心得ヲ以些早目ニ出勤イタシ候、次渡等ハ毎之通之段承、今晩茂無何事五ツ過御引ケ有之、御目付ハ鎌田十五殿、四ツノ夜廻モ異事無之段承届、四ツ過臥候事、大工今日者二階棟々相成候処、前半迄屋根組新規調替組立候事、おミつとの未泊、

伝奏衆へ酒井若州ヨリ直書之写

比日道路之風説ヲ承候処、西国筋之浪人共多人数兵庫・大坂へ参リ彼是不容易暴論ヲ唱候趣ニ有之、尤、支配国外之儀ニテ巨細之儀ハ難相分候得共、全虚説耳ニテモ有之間敷哉、就テハ家官（官家カ）之方々諸藩士へ御直談之儀ハ兼テ御規則モ有之事御承知之義ニハ存候得共、万一御行違之廉モ出来、自然去ル午年八月八日之覆轍ヲ踏候様之義有之候テハ以之外之御次第ニ候、御案思申上不堪苦心内々申上候、既ニ此度格別之御縁組茂被為在、公武之御中御一和之上ハ御一和ニ被為在候処、唯今聊ニテモ御異論之筋相生候テハ公武之御為不御宜義ハ勿論、東西諸臣ニ有之候テモ深恐入奉存候事ニ御座候、必々卒爾之御処置無之様仕度奉存候、此度浮浪之輩暴戻之説ヲ唱由ニ候得共、奉対

天朝動干戈候様之儀ハ、普天之下卒（率カ）土之浜如何様卑賤之者タリトモ人心之固有スル処決テ有之間敷儀ニ御座候間、必々御驚動被遊間敷奉存候、乍併反逆野人（心カ）之徒有之、万々一於

王城之地動干戈悩

震（宸カ）襟候者於有之ハ、私所司代役相勤候限ハ若州一国ノ力ヲ尽シ候者勿論、諸家御警衛之者共致指揮誅伐

可仕候間御安心被遊、必々御軽易（本ノマヽ）之御取計無之様仕
度奉存候、是全
公武之御為尽微衷（本ノマヽ）候儀ニ御座候、右之段決而表立申
上候儀ニハ無之候得共、全
御為筋ヲ存上御両役限リ内々申上置候義ニ御座候事、

二十五日　晴、

朝六ツ起、夜前ハ泊番ニテ候処、朝出市田隼人殿イ
タシ呉候ニ付五ツ前御暇、直ニ帰宅、今日者終日二
階次之間并右之下座洗方、主税・戸十郎・家来・下
人共同断、暮ヨリお村様御出、お広との帰、おミつ
との矢張泊ニテ候、昨日ハ川田将監殿大目付へ御役
替被仰付、御役料高弐百石被下置、席順諏訪数馬次
罷在候様被仰付候、祝ニ来候様吹聴茂来候得共泊番
ニテ不参候、全御用之儀茂不承吹聴ニテ存候、追テ
御通達モ来候、四ツ過臥候事、
一当分流行之コロリ之願ト相見得、三日跡ヨリ下賤共
太鼓・三味線ニテ処々神前ニ踊事甚シ、昨日迄夜五
ツ過ヨリ八ツ七ツ時分迄幾立モ有之シガ、今日者大
鐘過蛭子社之前ニ踊ル、

落書

絵本大各記（功カ）十段目

打場かよし　所司代
風情にて　九条殿
思案投首　永井玄蕃
思ひ言事　近衛殿
更になし　鷹司殿
互の身の　国大名衆
仕合　評定
とふこふ言内　異国打払
時刻か延る　交易停止
早々めで　天下泰平
度〳〵
風か持来る　横浜
せめ太鼓　焼打
気を取直し　玄蕃か

ツヽ立揚
何れもさらはと
言捨て
行方しれす
なしにける
あたりまはり
出立ば
御恩は海山
かへかたし
高名手柄を
見るよふな
あらわれ
出たる
只一射気張弓
心は矢竹
藪垣の
すし足
抜足
聞ゆる物音

浪人
水戸か加勢
五ケ国の
異舟
（薩摩カ）
――の
勢り
内裏
御尊慮
（薩摩カ）
――の
家老
四月十六日
の月
九州大名衆
長州の
家中
伏見奉行
京都四ケ所の

心得ける
逆賊非道の
名をけかし
たとへかたなき
一人非人
野末の小家の
非人も
おこるとは
しらざるか
印ハ目前
是を見よ
みさをの鏡
曇りなき
言葉ハゆるかぬ
大盤石
末世の記録に
残してミへ

かため
井伊
掃部頭
安藤
対馬守
水野
土佐守
交易掛
役人
此節の
諸色高き
なら野
春日野
かゝミ
肥後
長州
家中
掃部頭
打取

水戸浪人

御通達之写

一三郎様益御機嫌能、先月廿一日江戸被遊　御発駕候段御到来候条、御手当等之儀共諸事無手抜候様可取計候、此旨可承向々へ可申渡候、

閏八月　　但馬（川上久運）

一八月九日巳刻

右　御首途、

一同　廿一日

右　御発、

右者

三郎様御下向ニ付

右之通被　仰出候段申来候、此旨可承向へ可申渡候、

閏八月　　摂津（喜入久高）

一三郎様先月廿一日江戸被遊

御発駕、大坂ヨリ蒸気船へ

御乗船ニテ阿久根へ御着船之段ハ先達而申渡通ニ候、万一風波等ニテ御着船（不脱カ）被為整節ハ出水脇元へ　御乗船之筈候条、諸手当等之儀共無手抜様可取計候、此旨可承向へ可申渡候、

閏八月　　摂津

一大目付　　川田将監

右之通御役替被　仰付、御役料高弐百石被下置、席順諏訪数馬次罷在候様被　仰付候、此旨向々へ可致通達候、

閏八月十四日　　摂津

島津元丸

右者未幼年之儀ニハ候得共、志布志・内之浦・佐多・根占表海岸防禦惣頭取并御当地調練場請持等亡父同様被仰付候、左候テ、盛長迄之間一族之内ヨリ陣代相勤諸事致差引、御軍役奉行へ申談得差図候儀ハ其通ニテ、防禦筋手厚行届候様被仰付候、

右之通被仰付候条表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

閏八月　　式部（川上久美）

一太守様御拝領之
御一字折紙等今日御記録所へ御到来之筈候、道筋千石馬場升形ヨリ
二丸御門前通着之筈候条、西田町頭ヨリ右通筋掃除立砂可致置候、尤、飾桶之儀モ可差出置候、
一先払トシテ足軽弐人水上坂之下マテ可差越候、
一御折紙等通路之節、参掛又ハ小路ヘ罷出候面々相敬候様可致候、
一火用心猶以可入念候、

右之通被申渡候様大目付ヘ相達、大番頭・御小姓与番頭・町奉行其外可承向々ヘ可申渡候、

閏八月廿七日　　式部

二十六日　晴、

朝六ツ起、四ツ時出勤、八ツ前退出、直ニ帰宅、明日鉄炮ニ付諸仕廻方或者又家之内洗方諸下知・修甫下知等イタシ候、今日ハ二階前通取崩候、此節ハ二階之縁少シ上ケ候賦、無左候得ハ二階軒下リ候由、此節茂二階之軒四五寸ツヽ惣テ下リ居候故及修甫候、些目障リニハ成ル様ニモ候得共無是非候、尤、是迄ハ物置モ無之故二階ハ惣テ物置、此節板蔵作リ候故二階モ明キ住居出来候様相成候、今朝出勤掛平佐おつやとのへ一刻罷出候、おミつとの未泊ニテ候、

二十七日　晴、

暁六ツ前起、六ツ半ヨリ山吹之間席中鉄炮ニテ四番目射場ヘ出張、暮帰宅、参ニハ島津新八郎殿ヘ参同道、帰ニハ内記様御同道ニテ帰候、今日ハお筆五社参イタシ候由ニテ昼来、五社ヘ参、戸柱町田家ヘ参、五ツ時分帰掛又々来候、今日ハ大工二階軒柱抔替候テ、デンジ（手摺）抔モシラゲ候、夜四ツ過臥候事、おミつとの未泊、

二十八日　晴、

朝六ツ起、五ツ半出勤、今日者当番ニテ候得共、不時ニ新納波門殿ヨリ繰出シ被相頼候ニ付罷出候得共、繰出ハ矢柄殿・蔵人殿被相勤、拙者ニハ御一門方御案内相勤候様承候ニ付相勤、一刻御暇ニテ川田将監殿へ先日大目付へ御役替被仰付候祝義ニ参、夫ヨリ諏訪数馬殿へ先日戸十郎御作事下目付被仰付候礼ニ玄喚迄参候、夫ヨリ町田少輔殿へ一刻、花岡屋敷へ一刻参候、島津権五郎殿へモ同断ニテ八ツ前出勤、次渡等毎之通之段月番仁礼舎人殿ヨリ承、七ツ過夕詰渋谷喜三左衛門殿へ代合候、矢柄殿・蔀殿ヨリ伝言等モ有之致演説置候、夜入　母上様拙者方ニ而御寝酒被召上、四ツ時臥候事、今日伊地知八郎右衛門殿・宮里十兵衛・薬丸猪之介入来候事、おミつとの未泊、

二十九日　晴、

朝六ツ起、今日者御座相頼候訳ハ、

今日加藤清風先生百回忌ニ付惣門人中稽古始之振合ニテ稽古有之、四ツ半時分ヨリ参候、七ツ過稽古相済、吸物・酒抔モ出、飯出候テ帰候、帰掛伊地知八郎右衛門殿へ参、夫ヨリ戸柱町田家へ参、暮帰宅、毎之通母上様抔拙者方ニテ酒抔給候テ臥候事、今日モ宮里氏被来候由、

日史　第十四

文久二年壬戌九月朔日ヨリ

名越時敏（花押）

朔日　快晴、

朝六ツ起、今日者独礼奏者ニテ五ツ半出勤候得共、独礼無之候故御一門方御案内相勤候、九ツ過御暇、八ツ後ヨリタンタトフ野屋敷へ参候、先比郡方寺社拙家役人立合ニテ桂山之方境取究相成居候処、未拙者委敷不承届候間、福留七左衛門列参候テ承候、名越戸十郎ニモ同道ニテ承届能存候事候、長瀬市郎次殿ニハ上之方境迄同道ニテ其所迄能被存候、暮帰宅、夜入毎之通、

流行魚尽し

尾州　川魚――大海の魚に交りかたし、

紀州　ゴマメ――魚の数ながら取にたらす、

水戸　人魚――味がわからす、

松平加賀守

加賀（薩薩カ）――鯛――うつくしくもなくまつくもなし、

仙台　鯨（鯨歟）――大魚之名のミ、実意をしらす、

肥後　鰐の子――成人の後恐るへし、

黒田　鯨二ツついて大漁、

松平安芸守（広島）

芸州　馬鹿ノむき身――作り身にして鯛にツく、

藤堂和泉守（安ハ津）

藤堂　コチ――脊に針あり、

松平因幡守水戸ヨリ養子（鳥取）

因州　初鰹――皆人がすく、

松平内蔵頭岡山

備前　サメ――蒲鉾の外にしよふなし、

松平福井

越前　ショウガクボ――酒を呑計り、

松平徳島

阿州　アナゴ――ヌル〳〵しても鱣ほと味かなひ、

松平高知

土佐　鰹節――なくてもならす、

松平肥後守（奥州）

会津　鱣（鰻カ）――ヌル〳〵してもウマミあり、

有馬筑後

久留米　黒鯛――人の食を食ひ雑魚を追廻しいやしめらるゝ、

出羽米沢

上杉　鱘（鱘カ）――北海大魚、甚吉、しかれとも人しらす、

伊達遠江守（伊予）

宇和島　シヤチホコ――小魚なれとも恐るへし、

田安　池之魚　大海へ出てうろつくはかり、

一橋　鯉　天上志よふもしらす、

松平出羽守（松江）

雲州　赤工　味よろしからす、しかれとも剣あり、

大和守

久世　車海老　むまミあれとも骨かたちなひ、

対馬守

安藤　南風にあたつた魚　腹わたかくさつている、

紀伊守

内藤　井之内之魚　出るとも出られす、

公義之役人　クラゲ　目もなし骨もなし、

外国掛リ　酒に酔た魚　ウロツク計り、

紀州之臣水野　毒アリ無食、

尾州之臣竹腰　ギ魚　針アリ、

水戸之臣　アンコウ　口大きく腹大きし、味よし、

国々の士　俎板ノ上ノ鯉　格護を究ている、

二日　快晴、

朝六ツ起、六ツ半時分内記様へ用事有之罷出候、四ツ前内記様御出、御同道ニテ講堂へ罷出候、四ツ後御殿江御用之義有之候間、市田隼人殿同道ニテ参候テ九ツ過御暇、直ニ帰宅、夜入四ツ時分臥候事、

母上様ニハ昼ヨリ前へ御出ニテ御泊、おミつとの矢張泊、

仰出之写

三郎様（久光）御儀、此節被遊御参

内候処、御懇之被為蒙

褒勅、御剣被遊

御拝領候付テハ、

斉興公朱衣肩衝

御茶入御拝領并

斉興公（斉彬カ）御差之御大小被遊

御拝領候御例ヨリ、諸事御手重キ方致取調候様被仰付候、此旨可承向へ可申渡候、

閏八月　　（川上久運）但馬

諏訪数馬

右者被
聞召通趣有之、
思召不被為叶御役被成御免隠居慎被仰付、親族タリトモ面会不相成、書状・贈答不相成候旨被仰付候、
此旨表方江致通達、奥掛・御勝手方ヘモ可相達候、
閏八月　　摂津（喜入久高）

大目付　　樺山相馬

右之通御役替被
仰付、御役料高弐百石被下置、席順菱刈杢之介頭罷
在候様被
仰付候、此旨向々へ可致通達候、
九月朔日

三郎様去ル廿三日午刻京都
御立ニテ伏見御仮屋へ被為
入、翌廿四日同所
御立、川御下リニテ大坂御屋敷へ被為
入被遊
御逗留候旨申来候、此旨可承向へ可申渡候、
閏八月　　摂津

藤堂和泉守様御建白

先年ヨリ愚存之趣申上候儀ニ御座候処、天下之形勢殆累卵之場ニ相成候得者、是迄之御所置毫髪御謬誤被為在候時ハ被対
天朝御申訳茂無之、是ハ神祖之御鴻業茂忽墜地可仕、左候テハ忠孝之道モ被為背、万民塗炭ニ陥リ候事、実以不堪痛哭之至候、尤、右之挽回可仕策略等無御座候得共、世上之光景御心得モ相成可申哉、不憚諱忌左ニ申上候、
一凡物事ニハ本末ト申義有之、其本末不失順（序カ）席候時ハ雖国天下可治、若顛倒仕候得者如一家一身不斉候事者古今同一ニ帰申候、既諸藩（蕃カ）於横浜港互市通商御許容相成候根元ヲ細訳仕候ニ、一時之権道ト申ニ茂無之、又ハ有無ヲ通シ、四民一統融通相付候筋ニモ不相成、其実ハ必竟夷狄之跳梁ヲ被為厭、因循（苟カ）苟且之

御政事ニ帰申候儀ト奉存候、其大概ヲ挙テ申候得者、
兼テ亜国条約之義ニ付
禁庭へ御伺ニ相成候処、深ク被為悩
叡慮ニ付諸大名存意差上候様被
仰付候内、魯・亜両国ヨリ英仏之軍艦近日渡来可仕、
清国(諸カ)全勝之勢ニ乗シ押掛候ニ付応接甚御面働候間、
夫迄仮条約御承知之調印相済候ハ、英仏ヲ如何様ニ
モ可申諭ト亜使節申上候処、右ハ禁庭へ御申済ニ相
成不申候テハ御取計茂難被遊、併清国之覆轍ヲ践候
而ハ不容易候ニ付、不被為得止調印之上使節へ御渡
ニ相成候、其節モ同志之面々連名ニテ申上候通、如
前条危殆ニ相及候ハ不被為得止御所置ニ可有御座候
得共、迅速ニ御使ヲ以右之事情一応
天意御伺モ可有之、乍去
勅答以前ニ大患御座候場合ニ相成候テハ御不本意ニ
付、臨機之御所置モ無御余儀訳ト奉存候得共、
天意御伺之御使不被差上調印御渡シニ相成候テハ御
違
勅ニ茂相当、御尤ニモ不奉存候段申上候事ニ候、其
後前議ニ付尾張(徳川慶恕)中納言殿・水戸(徳川斉昭)前中納言殿・松平越(慶)
前守(永)登
城之議論等右之(有之カ)趣候間、過激切迫不敬之義共ニ付慎
被　仰付、且外匹夫ニ至迄罪之軽重有之候得共、蒙
厳咎候抔是以無御余義訳ト奉存候得共、其本ハ尊
天朝悪夷狄候ヨリ事起リ候得者道理ニ於テハ正敷事
故、今一段御斟酌有之可然歟ト奉存候之処、前顕(願カ)之
通忠肝義胆之士茂被為刑候ニ付、右之党類弥増憤激(憤怒激)
斐(発カ)仕、遂ニ彼是狼藉等有之候得共、夷人交易等相始
候テヨリ何一ツ本邦御為筋ニ相成候事モ無之、加之
物価ハ追日騰貴ニ相成候間、閭閻之小児ニ至迄異人
ヲ悪候事蛇蝎ヨリ甚敷、上ハ従
朝廷下至于士庶人一体同心之事ニテ、幕府而已格別
御優待被為在候様ニ相見得、其内為異人本邦人妨禦
致シ候様相成、右等惣テ本末顛倒共可申▽(忠義公史料)奉存候、よ
(り補)
偖英国ヨリ相願候沿海測量可仕△段御触御座候処、
私領分伊勢之儀ハ
神廟切近之事、寸土茂夷狄ニ為穢候テハ不相成候間、
其段追々願立候ニ付、先志州海岸ヘハ碇泊モ不仕通

船相済、此儀ハ難有奉存候事ニ候、然処近来御殿山ヲ異人館ニ御取立相成候抔ハ有志之者長大息仕候儀ニテ、左候テハ海中之御炮台ハ悉皆夷狄ニ被下候同様之義ニテ御座候得者、此一事ハ早速ニ御破却相成候様致度奉存候、前条申上候通士気踊躍仕候折柄、如漢土為異人不被致誘導候事ハ恐悦至極ニ付、此上ハ士気相奮候様、御鼓舞有之候様奉懇願候、斯相成候得者夷狄何程之難題等申出候テモ、応接之上御手引ニ相成事モ有御座間敷ト奉存候、何レ異人ヲ此儘ニ御差置候テハ御国辱ト申上候迄モ無之事故、攘夷之処ニ御英断之程偏ニ奉希候、扨此御挙被為在候付テハ如当節人心携弐、各疑惑ヲ抱候様ニテハ事ニ触レ禍起蕭墻(牆カ)可申候間、不取敢公武御合体海内一致ニ相成候様、御仕向被為在度甚差越候儀ニ御座候得共、其御所置ト申テ外ニハ有之間敷、嚮ニモ粗申上候通、近年被対

天朝御不実御不敬之義モ有之、安政午年以後　御政事何トナク御苛刻之様ニモ奉存候得者、右之件ニ宛然如日月之蝕御改被為在候事ヲ天下ヘ御示シ被遊度、其内此比承知仕候ニ、先年慎被仰付堂上方并尾張殿ヲ初、今般御宥(ユウ)見被仰出候趣、至極御尤之御義為天下可賀事ニ御座候、其外匹夫迚モ赤心報国之輩ハ、御差祝(普視カ)被為在候時ハ自然緩急之節屹ト御一臂ニ茂相成候事故、呉々モ如先年厳刑峻法之御沙汰無之様仕度、左候得者却テ反噬之御憂モ無之事ト奉存候、乍去先右一小事共可第一(申脱カ)

禁庭ヘ之御詫不被仰上候テハ相済申間敷、細々申候得者数ケ条可有御座候得共、其大綱ヲ挙テ申候得者、皇妹御降嫁抔ハ　御模様モ被為在候趣、然ルヲ曲テ被為任御願候トハ返々茂無勿論(体カ)御事故、此度御改正之期会ニテ

▽(忠義公史料より補)太樹公御上洛被遊、御直ニ△

皇妹御降嫁之御礼ハ申上候迄モ無之、夫ヨリシテ近来御不実御不敬之御断等被

仰上、且責テ被慰

宸襟候様ニト申御廉ニテ、春秋二季ニハ行幸被為在候様相成候ハ稍天下之士拝伏茂可仕、猶又　御上洛モ中古御廃絶之事、俗吏共ハ不可然可申上茂難計御

座候得共、近々
慎徳(家慶)院様日光御社参之儀モ有之候得者、右ハ大同小
異ニ奉存候、此義弥御治定之上、夫ヨリ
海内疲弊不仕、可成丈御手軽之儀被
仰出候ハヽ、一同感服可仕ト奉存候、斯相成候得者自
然公武御合体海内一致ニ相成可申候間、其機会ニ乗
シ夷狄御打払有之、征夷大将軍之御名相輝可申、左
候得者特ニ被為協
天意候而已ナラス、万民安堵可仕、実ハ
神祖之御鴻業ニモ被為劣間敷ト奉存候、斯相成候テ
モ本末順(序カ)席ヲ瞭然ト被遊、被為得機会候故之義ニ奉
存候、対政府右様之義申上候ハ所謂遼東白ニ御座候
得共、万一御採用モ被成下候得者本懐之至奉存候、

五月廿日　　御名

松平大膳太夫様御建白

外夷鎮撫　御国威更張之御所置ニ付テハ乍憚
公武御深意御合一ニ被為成、速ニ御国是ヲ被成御定、
海内和協御武威海外ニ輝候様被仰付外有御座間敷ト
存付、越俎之罪ヲ不顧鄙意申立候処、献芹之微志不
被捨置、
深意之御内慮被仰聞置、　御誠意ヲ奉感裁(戴カ)微志深増
不得止於　京都堂上之御方迄別段之旨趣内々申上度
候処、恐多茂被為達
天聴、今般私茂上京仕候ハヽ、　御沙汰之旨茂可被為
在由　御密旨被仰下、冥加至極難有仕合奉存候、仍
之尚又熟考仕候処不得止トハ乍申、私式外様之身分
トシテ直ニ奉汚
天聴候段甚以奉恐入候、ケ様之義自然列藩并草莽志
士承及、天下之公論ト存付候事許(件カ)ハ公義ヲ差越直ニ
朝庭へ申上候テ不苦様心得違、自己之了簡ヲ以毎々
上書ナト仕候様成行候テハ識見之承及小異有之、可
奉惑
天聴、尚又　神州之御体ハ鎌倉以来幕府ヲ取建置大
政御委任被成置候テ、列藩以下直ニ奉汚
天聴候テハ其事之得失ハ論ニ遑無之、幕府ヲ軽蔑仕
候筋ニ相当　御威光不相立候テハ列藩各
朝廷ヲ頂キ

勅命ヲ乞請、　幕府ヲ要シ終ニ群雄割拠之勢ヲ醸成シ、海内分裂天下之公論ヲ帰着スル処無之、別テ外夷侮ヲ招キ

御国威弥衰弱可申、乍憚　将軍之御職ハ上

朝庭ヲ御敬戴、下列藩以下ヲ

御慎圧（鎮圧カ）、天下之公論ヲ被成御総括候テ

叡慮ヲ被尊奉、禦侮之御手数被成御行届候様可被為

在候段申上迄モ無御座御事ニテ、今般

公方様御上洛御国初之御光耀ヲ以列藩予参被仰付、

当時御初政ニ付

天下之御更始（張カ）之思召ヲ以　御国是如何相定候テ可然

哉、各存意申出候様被

仰聞、列藩建白之旨趣御熟考、

勅諚台命ヲ以御国是共確定之御旨列藩へ被仰渡候ハ、、

衆心和協

御国威更張之御発端過之候儀ハ有御座間敷奉存候、

万一予参御断申上候旨、或者御国是御確定之旨違背

仕候者有之候者

勅定台命ヲ蔑如仕候義ニ付、無御拠厳譴被仰付候共

申分有之間敷ト奉存候、此段篤ト御評義之上御内定

之旨被仰聞被下候ハ、、私モ速ニ上京仕

御旨意之大要申上ニテ可有御座、重大之事件容易ニ

申上候段千万奉恐入候得共、

神州安危之境此御一挙ニ有之事歟ト奉考、且最前深

重之御内慮トモ被

仰聞置候義旁ニ付、不得止申建候儀御座候間不悪被

聞召可被下候、以上、

五月二日　　御名

御通達之写

三郎（久光）様御光着当日火用心大形無之様可入念旨、表方

御役人組中支配中へ可被申渡者也、

九月五日　　御家老座印

三郎様明後七日被遊

御光着筈候ニ付、御一門方・島津図書殿二丸御式済

之上登

城、謁　御家老

太守様（忠義）へ御祝儀可被申上候、此旨可致通達候、

但書略ス、

九月　　摂津（宮人久高）

三郎様明後七日被遊

御光着筈候間、島津又六郎一列其外月次御礼罷出候

面々ハ、先達テ申渡置候通夫々

御通路筋へ被罷出、

御光着以後

御本丸へ罷出、於席々謁御家老御祝義可被申上候、

以下略ス、

九月五日　　摂津

三日　快晴、

朝六ツ起、今日者夕詰ニテ出勤掛八ツ過ヨリ浄光明寺へ参詣、七ツ前出　殿、当番島津蔵人殿へ代合相勤、泊番島津右近殿へ代合、御暇、日入前帰宅、直ニ又良英寺之伊藤家おのりさま御墓へ参候、おとくとの・おいなとの被参居候、夫ヨリ伊藤六郎右衛門殿所へ参候テ暮帰宅、無程母上様拙者方御出ニテ打寄御寝酒被召上候、四ツ過臥候事、

四日　快晴、

朝六ツ前起、今朝ハ右近殿ヨリ朝出被相頼候ニ付六ツ半出　殿、右近殿へ代合候、四ツ過御暇、終日在宿ニテ家作諸下知、手籠モ見物下知、又写本モイタシ候、暮過ヨリ母上様抔打寄御寝酒御相手申上候、四ツ過臥候事、

五日　快晴、

朝六ツ起、今日者島津兵十郎殿ヨリ当番頭方月番被相頼候ニ付四ツ前ヨリ出　殿、八ツ時帰宅、家作諸下知等イタシ候得者、夕方今和泉御隠居対馬（忠喬）殿ヨリ明日ハ四ツヨリ人数分鉄炮鶴江崎御射場ニテ有之筈候間、少々之支ハ押而罷出候様被仰下候、朝之内ハ不致出勤候テ不相叶事御座候間、九ツ時分ヨリ罷出度奉願候処、夫ニテ宜候ニ付罷出候様又々被仰下候、夫ニ付暮ヨリ鉄炮玉作、近日中山吹之間鉄炮モ有之

筈候ニ付、百計玉造ニテ五ツ半時分漸出来仕廻候、
母上様ハ毎之通拙者方ニテ御寝酒被召上、四ツ時御
引入ニ而、四ツ半時分臥候事、

六日　晴、
朝六ツ起、五ツ半出　殿、夫ヨリ二之丸へ一刻、夫
ヨリ講堂詰、四ツ過ヨリ又御殿、八ツ時帰宅、夫ヨ
リ在宿也、

七日　晴、
暁六ツ前起、今日ハ
三郎(久光)様
御光着ニテ五ツ過出
殿、四ツ時ヨリ二之丸之様罷出候テ、御門脇南御門
之方へ島津又六郎一列・大番頭以下当番頭迄罷出候、
詰衆・無役大身分モ同所罷出候、御用人・物頭・御
使番ハ御門向之方へ罷出候、九ツ過
御光着被為在、此節　御拝領之
御剣御先ニ被相持被為在候、金メツキ金物ワク入ニ
天賜御剣ト認候白木札立有之、同断ワク入ニ　天賜
ト相記候、今一ツ為御持有之候、御着後一刻　御殿
へ罷出候テ、八ツ時帰宅之事、

八日　曇、
朝六ツ起、朝之内藤八殿入来、四ツ前講堂詰ニテ出
勤、八ツ時帰宅、七ツ後ヨリ伊藤六郎右衛門所へ法
事ニ参候、夜五ツ時分帰宅之事、

九日　曇、夜入雨、
朝六ツ起、今日ハ御書院月番ニテ五ツ時出　殿、引
合島津矢柄殿之賦候処、病気ニテ島津良馬殿ト相勤
候、今日ハ此節
三郎様御政事被為聞候為御祝儀四島与人共江　御目
見被　仰付候、帰掛垂水・宮之城・平佐・重富へ為
御祝義参上、夫ヨリ帰宅、又七ツ前ヨリ関山糺殿へ
参候、今日着ニ付テ也、夜入四ツ前帰宅、無程臥候
事、於美つとの未泊、

十日　曇、夕ヨリ雨、

朝六ツ起、五ツ半出　殿、夫ヨリ講堂へ参候テ又御殿へ罷出、八ツ時退出、帰掛鉄砲師十河へ一刻参候、夫ヨリ帰宅、七ツ前ヨリ千石馬場町田家へ参候、今日民部殿着ニ付テ也、夜入四ツ過帰宅、無程臥候事、

十一日　快晴、

朝六ツ起、五ツ過ヨリ新射場一番目へ出張、同席中人数分鉄炮ニテ暮帰宅、夜入四ツ時分臥候事、おミつとの未泊、今晩川上右膳殿用事有之入来候事、

十二日　晴、

朝六ツ起、島津内記様八男当春之比ヨリ身弱ニ有之候処、麻疹後弥以不塩梅、先比ヨリ腫気抔相見得、夫ハヘリタルト承居、最早追々快気ニモ候哉ト存之外、昨日ハ脈沈細打臥候儘ニテ言語不通、則ヨリ灸治等イタサレ候得共、更ニ通徹無之段承候ニ付、今朝者参候処極々之体ト、当年四才、吉熊殿ト申候、中々無覚束相見得候、帰宅、七ツ前ヨリ出　殿、夕詰相勤候、泊島津蔵人殿ニテ大鐘過代合、帰宅、夜入内記様へ罷出候、病人同断ニテ九ツ時分帰宅、無程臥候事、おミつとの未泊、

十三日　晴、

朝六ツ起、用事有之候ニ付六ツ過ヨリ島津兵十郎殿・北郷数馬殿・川上右膳殿へ参リ候、九ツ過ヨリ当番ニテ出　殿、夕詰迄相勤、泊番島津矢柄殿へ代合、夕方帰宅、昼時分内記様へ罷出、又夜モ参候テ九ツ時分帰候、病人ハ矢張昨日同断、無程臥候事、おミつとの未泊、今日八ツ美代氏被来候、

十四日　晴、

朝六ツ起、大鐘時分ヨリ泊番ニテ出殿、四ツ前臥候事、今日ハお広との其外お広との近隣ばゝとの被来、おミつとのも今日被帰候、ミふね参リイタサレ候由ニテ帰ニモマタ被来候由、

十五日　曇、

朝六ツ起、朝出川上東馬殿ニテ五ツ前帰候、八ツ後
美代氏・奥山藤兵衛殿被来候、名越清左衛門同断、
昨日者御墓参イタサス候ニ付今日参候、前モ夜前吉
熊との幼亡之由候ニ付悔ニ参候、夕ヨリモ又参リ候
テ五ツ前帰、四ツ過臥候事、

三郎様御筆仰出　　家老中江

我等事、先般
御内勅ヲ奉戴シ関東へ出府、
公武之御為聊微力ヲ尽シ再上
京復　命ニ及候処、不図モ先月九日参
内被
仰付、議奏衆御取次ヲ以不容易奉蒙　褒
勅、殊ニ重キ御品迄モ拝領被　仰付、誠以武門之冥
加不過之事ニ候、全体我等素志者
皇国内外之大患不堪傍観、且
順聖院様(斉彬)御遺託之御旨奉紹述度赤心ニテ、事之成否
ヲ不顧、忌諱ヲ侵シ犬馬之労ヲ致シテ、
王臣之分ヲ尽シ候迄之趣意候処、格別之奉蒙　殊遇
候儀不存寄事ニ候、且於関東モ一橋・越前登用相成、
尊
王之道追々相立候勢ニテ候得者、暫ク奉
勅之厚薄、処置之得失
叡覧被為　在度候ニ付、大略
御治定相付迄之間我等滞京仕候様再三承知イタシ候
得共、御断申上及帰国候訳ハ畢竟攘夷之儀先々ヨリ
之
叡慮ニ被為　在、兎角此末之時世大事之訳ニテ、国
家之本治定不相成候テハ、時機ニ応シ十分之勤
王モ難相叶候得者富国強兵之術大急務ト存候、尤、
於関東六月朔日且先月被　仰出候趣モ有之、屹度此
涯国政之大体相立、人心致一和候様変革ニ及度候間、
各中ニモ不容易大事之時世ヲ弁シ、上者
朝廷之御趣意ヲ奉シ、下我等之誠志ヲ通徹シ、忠直
ヲ尽シ其職ヲ勤、国家之柱礎ト相成候様心掛、尚熟
慮之上存寄之程モ承度事ニ候、且又今度留主中士分

以上之者共種々雑説等申触候段モ相聞得以之外之事ニ候、事之善悪ニ寄ラス国家之為上書之儀者御先代様被　仰出置候得共、表向上書イタシ候ハ臣子当然之事ニテ不苦候間、猶又各中勘考有之、国中一統趣意貫通イタシ候様有之度存候事、

戌九月

御別紙之通被仰出、我等ニ至リ別テ感伏涕泣ニ不堪候、各中深御趣意奉汲受、粉骨砕身屹度其詮相立候様精力ヲ尽シ丹誠ヲ凝、三郎様之御趣意奉助、我等之不肖ヲ補、国家之良臣ト相成候様有之度存候事、

御添書

去ル九日二丸於御座之間太守様（忠義）・三郎様（久光）御出座ニテ御一門方・島津図書殿并我々共・若年寄・大目付御前へ被召出、厚御沙汰之趣承知仕、猶亦御別紙二通之通太守様・三郎様御筆ヲ以被仰出、何共奉恐入御趣意之御事ニ候、今度被遊御出府等候儀ハ御別紙ニモ細々被仰出候通、公武之御為御深慮之御訳被為在、不容易重大之御事柄被遊　御尽力候処、於公武茂段々御変革之御処置モ追々被仰出、実ニ天下之大幸不過之候、畢竟御趣意御貫通之御訳ニテ誠ニ以奉恐悦候、然者第一我々共初一涯精勤可仕儀ハ勿論、一同深奉汲受御素志、御国家之御為誠実ニ尽心万端相励、不容易世態之程致勘考、皇国之御武威致更張候様文武之道

盛大ニ被相行、礼義・廉恥・質素・節倹之風俗相嗜、
富国強兵之道被相行候様可心掛候、且亦存寄之条々
ハ兼テ被
仰出置候通可致
上書之処無其儀、猥ニ雑説等申触候儀共士分以上殊
更有之間敷儀候間、能々
御趣意相心得、夫々尽職分可奉安尊慮候、此旨謹テ
被奉承知、家来末々迄モ急度可被申付候、
九月
（川上久封）筑後
（島津久徴）大蔵
（喜入久高）摂津
（川上久運）但馬
（川上久美）式部
（小松清廉）帯刀

一所持・寄合
当分無役之家督并嫡子名前
平田正十郎
赤松主水
稲留数馬
新納内匠
畠山主計
山岡斎宮
桂杢右衛門
本田主計
鎌田一藤太
山田守人
上野司
樺山主殿
島津藤十郎
北郷哲五郎
島津又七郎
島津助之丞
島津織衛
島津弥市郎
伊集院半之丞
末川主税
郷原亘

新納織之丞
平田新四郎
二階堂逸見
名越主税
堀弥八郎
河野外記
猪飼鉚太郎

一御役料高三百石　　島津相馬

右之通被
仰付、御役料高被下置、席順川上龍衛頭可罷在候、
右之通、今日
御直被
仰付候、此旨表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可
相達候、

九月十六日　　摂津

一比志島静馬御勘定奉行ヨリ大番頭へ御役替、
一高橋縫殿御小姓与番頭ヨリ御勘定奉行へ御役替、

右之通、今日被　仰付候、

日史第十五

名越時敏（花押）

文久二年壬戌九月十六日ヨリ

十六日　雨、

朝六ツ起、四ツ前出　殿、夫ヨリ造士館へ出勤、八ツ時帰宅、夫ヨリ伊藤六郎右衛門殿・奥山氏へ一刻ツ、参候、夕ヨリ　母上様拙者方ニテ酒共被召上、四ツ時分御引入、四ツ半臥候事、

一若年寄

十七日　雨、

暁七ツ過起、自身粥抔暖メ給候テ、七ツ半ヨリ新射場四番目之様出張、六ツ打出シ、山吹之間人数ニテ弐人ツ、七組、一口切一組勝之鉄炮有之候、終日惣テ負ニテ暮帰宅、明日者摂津殿ヨリ御差図之御用致承知候、外ニモ多人数有之、如何成向之御用ニ候哉、

何共難推計候、先日　御筆仰出之向々考合候得者、
御軍役御手当之一条ニテモ候半哉ト被存候、

御通達之写

貞姫様(斉彬養女)御事、近衛右大将(忠房)様へ　御縁与被
為済、来亥春被遊
御上京筈候ニ付、諸向御手当相掛候儀ハ取シラベ申
出候様可承向々へ可申渡候、

八月　摂津(喜入久高)

喜入摂津

右者別段
思召之訳被為
在候ニ付、
三郎(久光)様御下着迄之間、御用部屋へ相詰御用承候様被
仰付置候得共、一往是迄之通被仰付候旨表方へ致通
達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

九月　大蔵(島津久徴)

十八日　雨、

暁大鐘前起、今日者御差図御用致承知候、然ルニ
御代参モ被　仰付置候ニ付、福昌寺江五ツ前ヨリ参
候テ
宝鏡院様へ　御代拝、夫ヨリ直出
殿、四ツ過於　敷舞台御軍役掛御用人相良治部ヨリ
承知、左之通、
内之浦
姶良

合一組

物主
名越左源太

右之通被仰付、
御出馬之節ハ可被
召列候、
右御格之通可申渡候、

九月　摂津

今日者多人数諸所物主被
仰付候、右通被　仰付候ニ付テハ別テ難有事故、家

内中打寄祝酒給候事、町内膳殿ニモ同断被仰付、昼被来候也、

十九日　曇、

朝六ツ起、今日者夕詰ニテ八ツ半時分ヨリ出　殿、島津左膳殿へ代合候、相勤泊番島津矢柄殿へ暮前代合、帰宅、母上様毎之通拙者方ニテ御寝酒共被召上候テ四ツ時分御引入、無程臥候事、

二十日　泊（ママ）、

朝六ツ起、今日者泊番ニテ候得共、七ツ過ヨリ島津権五郎殿へ一刻参、七ツ過ヨリ出　殿、夕詰島津左膳殿へ代合相勤候、四ツ半時分臥候事、

二十一日　晴、

朝六ツ起、泊明ニテ候処、大野多宮殿江朝出相頼、出　殿之上五ツ前御暇、直ニ帰宅、四ツ過ヨリ野屋敷へ参候テ夕方帰宅、暮過ヨリ　母上様拙者方毎之通御寝酒被召上、四ツ過御引入、無程臥候事、

二十二日　快晴、

暁七ツ時起書見、又臥、朝六ツ起、四ツ前出　殿、八ツ時帰宅候得者内膳殿入来、無程被帰、

三郎様江

一干鯛　一折ツ、

料銀三拾六匁七分四リツ、、

一御樽代三百疋ツ、

島津周防殿（珍彦、重富）
島津岩松殿（久宝、加治木）
島津讃岐殿（貫敦、垂水）
島津安芸殿（忠敬、今和泉）
島津図書殿（久治、宮之城）

一御肴代三百疋ツ、

島津静洞殿（忠寛、重富）
島津泉水殿（楽水カ、忠公、重富）
島津栖山殿（貫典、垂水）
島津苓翁殿（忠義、今和泉）
島津英之進殿（忠欽、久光男、島津忠敬養子）

一同二百疋ツ、

（斉宣女、種子島久道室）
松寿院殿
（久光女、島津久静室）
栄松院殿

島津讃岐殿

奥方

於朝殿

島津安芸殿

奥方

島津栖山殿

奥方

島津苓翁殿

奥方

一干鯛一折ツ、

料銀三拾六匁七分四リツ、、

一御樽代二百疋ツ、

島津又六郎

島津元丸

一三種二荷代銀五枚

御家老・御側役

若年寄・大目付

大番頭以下当番頭迄

大身分・寄合並・右以

上之嫡子・無役ニテ月

次御礼罷出候面々

相中

一二種一荷代銀三枚

奥・表御用人以下諸御

役人

相中

一二種一荷代銀三枚

諸士相中

右者

（久光）
三郎様御儀、

御剣被遊

御拝領候付、御一門方初諸士迄使者并惣代被差越、

進上物等被仰付事候得共、先達テ

御光着ニ付周防殿ヨリ島津元丸迄銘々自家調ニテ進

上被仰付候間、取仕立御使番方へ可被差出候、御家

老其外相中進上物之儀者御取替調ニテ進上被仰付候

条、都テ二丸へ可相納候、

右可致通達候、

九月　　但馬（川上久運）

二十三日　快晴、

朝六ツ起、今日者御座相頼候テ御軍役道具取調共イタシ候、昨日ヨリ修甫台所取付候、大工少人数ニテ埒明兼中々待兼候、崩レ家ノ修甫存外手広相成事ニ候、今日者家来下僕共へ手当之半首、拙者自身ニ緒共鉄炮荷キ共造候事、夜入四ツ過臥候事、

御通達之写

暐姫様（斉彬女）御軽々被遊御麻疹、御酒湯迄モ被為済候段御到来候、依之御一門方・島津図書殿并諸大身分其外月次御礼罷出候面々、明廿五日四時登城、

太守様・

三郎様江御祝儀於席々謁可被申上候、

但、大奥へ兼テ御祝儀被申上来候面々者、当日又ハ御精進日間御祝儀被申上、江戸へモ有来通追テ飛脚便御祝儀被申上、御女中方之儀モ同断可被申上候、

右之通表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

九月廿四日　　大蔵（島津久徴）

相馬事

島津出雲

右之通依願改名被仰付候条、此旨表方江致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

九月廿三日　　大蔵

二十四日　晴、

朝六ツ起、五ツ半ヨリ講堂詰ニテ出勤、八ツ後退出、直ニ帰宅、今日民部殿着後初テ今日入来候、夜入母上様毎之通拙者方ニテ御寝酒被召上候、四ツ半臥候事、

二十五日　晴、

朝六ツ起、四ツ時出　殿、八ツ後内膳との被来候、五ツ時分ヨリ　母上様毎之通拙者方ニテ御寝酒被召上候、九ツ時分臥候事、

御通達之写

喜入摂津殿（久高）

右

御参勤御供被

仰付候旨

御直ニ被　仰付候、此旨表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

九月廿五日　大蔵（島津久徴）

今度御参勤之割御改革被

仰出、

此御方様之儀ハ来亥年夏中　御在府候様御達シ相成居候処、来亥年春中

御在府之割ニ被成御心得候様、御老中水野出泉守様（和泉守カ、忠精）ヨリ被仰渡候段御到来候、此旨奉承知候様表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

但、諸郷へ申渡地頭・領主、大番頭ヨリ可被申渡候、

九月　大蔵

二十六日　曇、夜雨、

朝六ツ起、六ツ半朝出ニテ出　殿、泊明内記様へ代合相勤候、四ツ後御暇、直ニ帰宅、大鐘時分ヨリおつやとの御出、薬丸猪之助殿ニモ入来、四ツ過被帰、無程臥候事、

二十七日　曇、

朝六ツ起、四ツ過ヨリ野屋敷へ参候、八ツ前ヨリ奥山藤左衛門殿へ参、菊花致見物候、当分盛リ最中ニテ候、未咲出サルモ有之候、別テ美事ニテ候、其内ナガラ能相見得候菊之銘左ニ書取候、

薄小黄　大空　紅之筆

篠藤　白玉　八重桜

黄千鳥　黄袖　薄霜

白縁赤　千歳　白瀧
黄小桜　赤煙　黄紅筋
紫白縁　小黄　黄煙
乱藤　薄雪　白赤咲

八ツ過帰宅、八ツ半ヨリ夕詰ニテ出　殿、内記様へ代合相勤候、今日者御下リ遅ク詰衆・書役等モ未相勤被居候、詰衆新八郎殿ニテ七ツ過被帰候、泊大野多宮殿夕方出　殿、代合、直ニ帰宅、夜入毎之通母上様拙者方おつやさま抔打寄酒共給候テ、四ツ時分臥候事、

二十八日　曇、

朝六ツ起、四ツ時出勤、四ツ過御暇、直ニ帰宅、今日町田民部殿三番御小姓与番頭へ御役替被　仰付候ニ付、七ツ時ヨリ参、夜九ツ時分帰宅候事、　母上様ニモ御出ニテ候、朝薬丸家おきさとの被来候由、今朝美代氏被来、今日菱刈杢之介殿ニモ大目付ヨリ大番頭勤被　仰付、島津仁十郎殿事御小姓与番頭被仰付候、昨日吉川源右衛門殿・中山甚五兵衛殿御役御免被仰付候、吉川氏ハ御側役格ニテ御趣法方御用人、中山氏ハ高奉行歟ニテ三島方掛、有川十右衛門殿ニモ先日御役御免被　仰付候由、

二十九日　晴、

朝六ツ起、四ツ時出　殿、八ツ前帰宅之事、青木氏入来候、

晦日

朝六ツ起、四ツ前伊藤六郎右衛門殿入来、四ツ時出殿、講堂詰ニテ造士館へ参、四ツ半帰宅、七ツ時ヨリ始良与頭田野辺卯助、内之浦役々ニモ来候、此節物主被仰付候ニ付、手当事ハ勿論、武術等相励候様委細相達置候、内之浦役々へハ此節
太守様（忠義）・
三郎様（久光）　仰出・御家老衆御添書於所相弘メ候様相渡候、跡ニテ銘々盃共イタシ緩々酒共為給候、各夕方帰ル、亭主振ハ美代氏ニテ候、川上家お藤・おくわ来リ候、夜入五ツ時分帰候、四ツ過臥候事、